
みえ県民意識調査分析レポート（平成26年度）
- 県民の幸福実感向上のために -

平成26年8月

三重県 戦略企画部

みえ県民意識調査分析ワーキング

目次

はじめに	1
第1章 県民の幸福感の現状～属性別にみた姿～	3
第1節 幸福感の県全体の状況	5
第2節 幸福感の一属性クロス分析	6
第3節 幸福感の詳細クロス分析	9
第4節 幸福感を判断する際に重視した事項と幸福感との関係	14
第5節 幸福感を高める手立てと幸福感との関係	16
第2章 幸福実感指標の現状	17
第1節 16の幸福実感指標の結果概要	19
第2節 それぞれの幸福実感指標の現状	22
第3章 家族と幸福実感	55
第1節 父親の育児参画	57
第2節 結婚及び子ども	62
第4章 地域や社会とのつながりと幸福実感	69
第1節 会話の頻度について	71
第2節 地域活動への参画	75
第3節 16の幸福実感指標との関係について	79
第4節 地域の住みやすさについて	85
第5章 働き方と幸福実感	87
第1節 女性の就労	89
第2節 現実の働き方と希望する働き方	95
第3節 仕事と生活に関すること	102
第6章 まとめ(県民の幸福実感向上のために)	107
第1節 県民の幸福実感と密接な関連があるもの	109
第2節 県民の幸福実感の向上に向けて	112
第3節 調査・分析についての今後の検討課題	115
その他(資料等)	117
調査票(第3回みえ県民意識調査)	119
回答者の属性構成と県全体の構成との比較	131
平均値や回答比率の差についての統計的な有意性を確認するための手法	132
顧問からのメッセージ	133
ワーキング開催実績とメンバー	134

(別冊 データ集)

詳細な集計データについては、別冊のデータ集として集約しています。

はじめに

1 みえ県民意識調査の概要

県では、「みえ県民力ビジョン」において「県民力でめざす『幸福実感日本一』の三重」を基本理念として掲げ、県民の「幸福実感」を把握し、県政運営に活用するため、一万人の県民の皆さんを対象に、「幸福感」についての意識や、地域や社会の状況についての実感などを項目とする「みえ県民意識調査」を毎年実施しています。

本年1月から2月にかけて実施した「第3回みえ県民意識調査」の概要は次のとおりで、集計結果は4月に公表したところです。

調査期間：平成26年1月～2月

調査対象：県内に居住する20歳以上の男女10,000人に対する郵送アンケート

有効回答数：5,456人（有効回答率 54.6%）

調査項目：

- ・ 幸福感（第1回調査からの継続項目）
- ・ 地域や社会の状況についての実感（第1回調査からの継続項目）
- ・ 生活や仕事のこと
- ・ 地域や社会とのつながり
- ・ 家族や精神的なゆとり

2 分析レポートの目的

「みえ県民意識調査」を詳細に分析した結果は、県民の皆さんの幸福実感を高めるための参考となり、政策議論の材料としても活用できることが第1回調査および前回調査で明らかになりました。

今回の調査については、既に集計結果（報告書）を公表し、県の年次報告書である「成果レポート」にも主な結果を記載したところですが、この意識調査の結果が「三重県経営方針」の策定や当初予算議論の際の資料等として活用されるよう、戦略企画部職員による「みえ県民意識調査分析ワーキング」を設け、専門家の助言も得ながら、詳細な分析を進めてきました。

このレポートでは、幸福実感について詳細に分析した結果を整理した上で、県民の幸福実感と密接に関連しているものは何か、あるいは幸福実感向上のためにはどのような課題があるのかなどについて考察した内容を記述しています。この意識調査の結果だけで政策を判断することはできませんが、このレポートをきっかけとして、県民の幸福実感向上と政策のあり方等について議論が展開されることをめざしています。

3 本レポートの構成

第1章「県民の幸福実生の現状」では、10点満点で質問した幸福実生がどのような特徴や傾向があるのかを明らかにするため、属性別に集計しました。

第2章「幸福実生指標の現状」では、「みえ県民力ビジョン」に掲げる16の幸福実生指標に対応する「地域や社会の状況についての実感」の属性別集計、第1回からの推移をまとめ、その特徴や傾向の把握に努めるとともに、どのような課題があるのか等についての分析と考察をしました。

第3章「家族と幸福実感」では、これまでの調査結果により「家族」が県民の幸福実感と密接な関連があることが明らかになったことから、今回調査における新たな質問項目の「父親の育児参画」と「結婚」、「子ども」について詳細に分析しました。

第4章「地域や社会とのつながりと幸福実感」では、前回調査で「地域や社会へのつながり」と県民の幸福実感には関連があることが明らかになったことから、今回調査における新たな質問項目の「会話の頻度」や「地域活動への参画」などについて詳細に分析しました。

第5章「働き方と幸福実感」では、「女性の就労」や「希望の就業時間と実際の就業時間」など県民の幸福実感と関連があると考えられる働き方に関する項目について詳細に分析しました。

第6章「まとめ（県民の幸福実感向上のために）」では、第1章から第5章の統計的な分析から見てきた県民の幸福実感の特徴や傾向を整理しながら、県民の幸福実感と密接な関連があるもの、あるいは県民の幸福実感向上のためには何が課題なのか等について考察し、仮説も含め記述しています。

4 分析を進めるにあたって

第1回調査から、みえ県民意識調査分析ワーキングに参画いただいている鳥取大学地域学部の小野達也教授には、2度にわたり来県していただき、意識調査の結果を徹底的に分析し政策に活用することの大切さと、集計データの統計的な有意性の確認方法などについて具体的に説明をいただき、分析作業を後押ししてくださいました。

また、次の専門家（順不同）の方々には、調査票の設計や分析の方法等について貴重なご助言をいただきました。

- ・津谷典子慶應義塾大学経済学部教授（三重県経営戦略会議委員）
- ・白波瀬佐和子東京大学大学院人文社会系研究科教授（三重県経営戦略会議委員）
- ・玄田有史東京大学社会科学研究所教授

調査の実施や分析を進めるにあたり助言をいただきました皆さまには改めてお礼を申し上げますとともに、今後ともご助言をお願いしたいと思います。

5 その他（記載方法など）

- ・本レポートでは、10点満点で調査した幸福感についてのみ「幸福感」として記述し、地域や社会の状況についての実感を含む主観的な実感全体については、「幸福実感」として記述しています。
- ・データを属性別に細分化すると、どうしてもサンプル数が少なくなり、統計的な精度が低くなることから、出来る限りデータに統計的な有意性があるのかについて確認しました。また、属性項目のうち、職業の「その他の職業」、世帯類型の「その他世帯」、世帯収入の「わからない」は、原則として、記述を省略しています。
- ・スペース等の都合上、選択肢の表現等を趣旨が変わらない程度に簡略化して記述しています。また集計にあたっては、未回答の扱いや四捨五入の関係により、回答比率の合計が100%にならない等の場合があります。
- ・詳細なデータについては、データ集として別冊にまとめています。データが必要な方は、県ホームページ（[URL](http://www.pref.mie.lg.jp/SENSOMU/HP/mieishiki) <http://www.pref.mie.lg.jp/SENSOMU/HP/mieishiki>）をご覧ください。また、三重県戦略企画総務課（059-224-2062 電子メール sensomu@pref.mie.jp）まで連絡をお願いします。

第1章

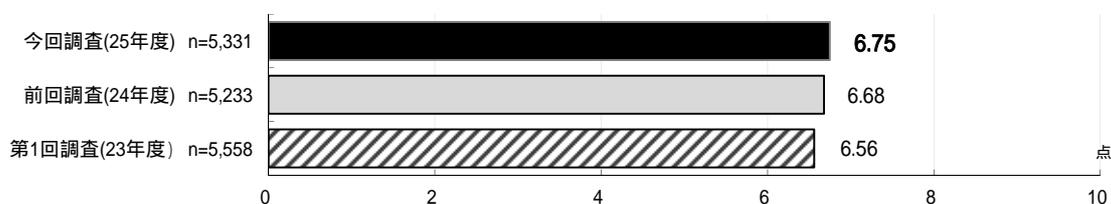
県民の幸福感の現状 ～属性別にみた姿～

第1節 幸福度の県全体の状況

県民の皆さんが日ごろ感じている幸福度（以下、「幸福度」と記載）について10点満点で質問したところ、今回調査（平成25年度実施）の平均値は6.75点で、前回調査より0.07点、第1回調査より0.19点それぞれ高く、県民の皆さんの幸福度は全体として前年及び前々年同期よりも高くなっています（図表1-1-1、図表1-1-2）

また、調査方法等が同一ではないことから単純な比較はできませんが、国の調査結果を見ると、県民全体の幸福度は国民全体の幸福度よりも高い水準にあると見られます（図表1-1-3）

図表1-1-1 幸福度の平均値（前回調査及び第1回調査との比較）



- （備考） 1．今回調査と前回調査との差は統計的に有意（危険率5%未満）
 2．今回調査及び前回調査と第1回調査との差は、いずれも統計的に有意（危険率5%未満）

図表1-1-2 みえ県民意識調査の調査概要（第1回～第3回）

	今回調査 （第3回みえ県民意識調査）	前回調査 （第2回みえ県民意識調査）	第1回調査 （第1回みえ県民意識調査）
調査時期	平成26年1月～2月	平成25年1月～2月	平成24年1月～2月
標本数	県内居住の男女 10,000人	県内居住の男女 10,000人	県内居住の男女 10,000人
有効回答(率)	5,456 (54.6%)	5,432 (54.3%)	5,710 (57.1%)
調査対象	20歳以上	20歳以上	20歳以上
実施方法	郵送法	郵送法	郵送法

図表1-1-3 参考とした国の調査

<p>国民生活選好度調査（実施主体：内閣府） 質問「現在、あなたはどの程度幸せですか。「とても幸せ」を10点、「とても不幸」を0点とすると、何点くらいになると思いますか。（みえ県民意識調査と同一） 調査概要・結果（平成21年度～平成23年度）</p> <ul style="list-style-type: none"> 平成23年度国民生活選好度調査：幸福度の平均値 6.41点 （24年3月実施 調査対象：15歳～79歳の男女 有効回答数(率)：2,802(70.1%) 訪問留置法） 平成22年度国民生活選好度調査：幸福度の平均値 6.46点 （23年3月実施 調査対象：15歳～79歳の男女 有効回答数(率)：3,578(71.6%) 訪問留置法） 平成21年度国民生活選好度調査：幸福度の平均値 6.47点 （22年3月実施 調査対象：15歳～79歳の男女 有効回答数(率)：2,900(72.5%) 訪問留置法）
--

第2節 幸福度の一属性クロス分析

幸福度を1つの属性(ここでは、性、年齢、職業、配偶関係、世帯類型、世帯収入、地域)によるクロス分析を行いました。個々人の幸福度は様々であり、多くの要素と関係性があると考えられることから、県民の幸福度の特徴や傾向をより詳細に把握するためには、次節に記載する2以上の属性によるクロス集計の結果も合わせて見ていく必要があります。

(参考) 1 ()内の数字は前回調査との差(ポイント)です。< >内の数字は第1回調査との差(ポイント)です。なお、統計的に有意な差がある場合には、下線を付けています。

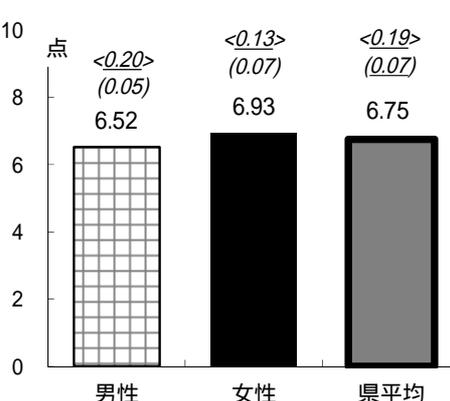
- 2 棒グラフについて
- 黒色: 幸福度の平均値が県平均より高く、かつ統計的に有意な差がある属性項目
 - 格子: 幸福度の平均値が県平均より低く、かつ統計的に有意な差がある属性項目
 - 灰色: 幸福度の平均値が県平均と比べ、統計的に有意な差が認められない属性項目

1 性別

第1回調査、前回調査と同様に、女性は男性より幸福度が高くなっています。

第1回調査と比べ、男性、女性とも幸福度が高くなり、男性と女性の幸福度の差は小さくなっています(図表1-2-1)。

図表1-2-1 幸福度(性別)

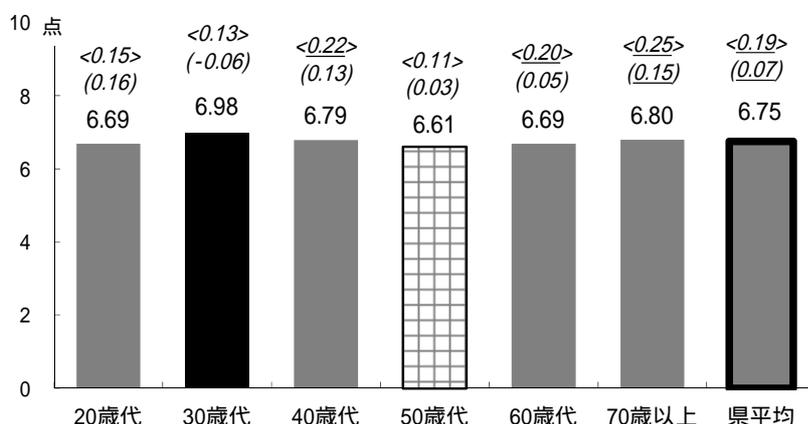


2 年齢別

県平均より、30歳代の幸福度が高く、50歳代の幸福度が低くなっています。

前回調査と比べ、70歳以上の幸福度が高くなり、第1回調査と比べ、40歳代、60歳以上の幸福度が高くなっています。(図表1-2-2)。

図表1-2-2 幸福度(年齢(10歳階級)別)

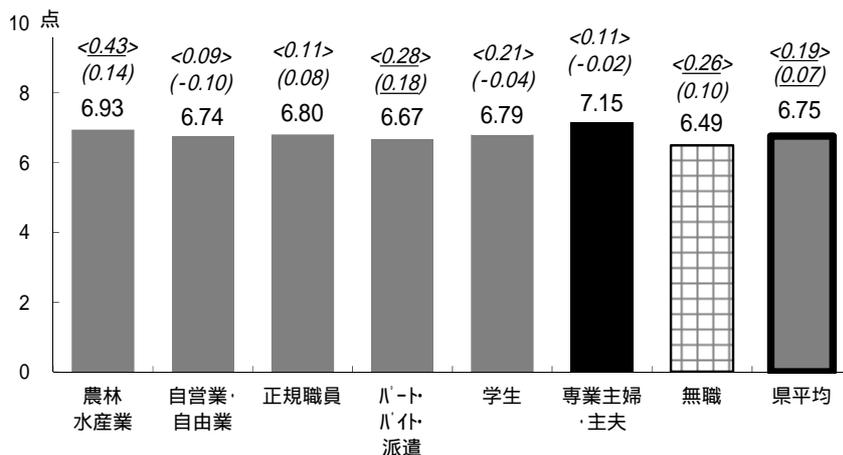


3 職業別

県平均より、専業主婦・主夫の方の幸福感が高く、無職の方の幸福感が低くなっています

第1回調査と比べ、農林水産業の方、パート・アルバイト・派遣社員などの方、無職の方の幸福感が高くなっています。前回調査と比べ、パート・アルバイト・派遣社員などの方の幸福感が高くなり、前回調査では県平均より幸福感が低くなっていましたが、今回調査では統計的に有意な差が認められません(図表1-2-3)。

図表1-2-3 幸福感(職業別)



4 配偶関係別

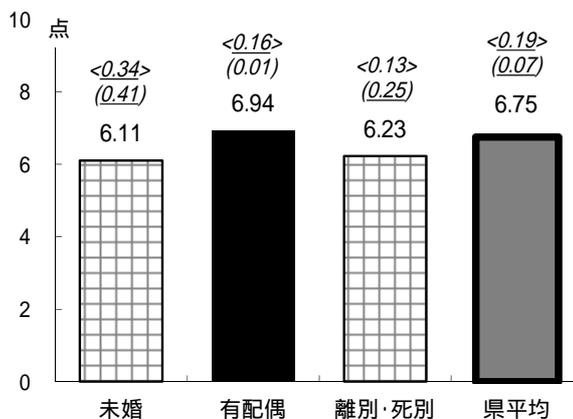
第1回調査、前回調査と同様に、県平均より、有配偶の方は幸福感が高く、未婚、離別・死別の方は幸福感が低くなっています。

第1回調査と比べ、未婚、有配偶の方の幸福感が高くなっており、前回調査と比べ、未婚、離別・死別の方の幸福感が高くなっています(図表1-2-4)。

(備考)

今回調査では、離別と死別を区分して質問していますが過去との比較のため、離別・死別を合わせて集計しています。

図表1-2-4 幸福感(配偶関係別)



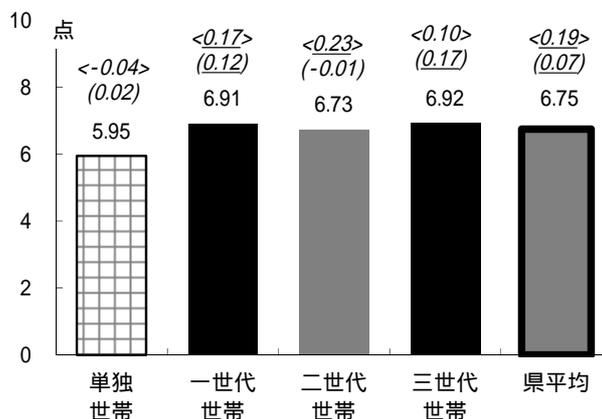
5 世帯類型別

県平均より、一世代世帯と三世代世帯の幸福感が高く、単独世帯の幸福感が低くなっています。(図表1-2-5)

(備考)

前回調査では今回調査した世帯類型に代えて同居の家族について質問しています。今回調査との比較では同居の家族の質問の回答の組み合わせにより、世帯類型を判断しています。

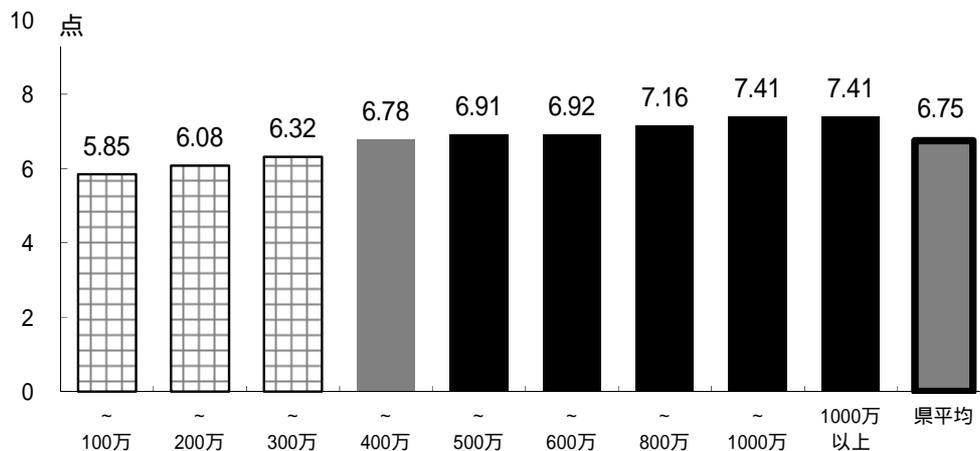
図表1-2-5 幸福感(世帯類型別)



6 世帯の年間収入別

県平均と比べ、300万円未満の層の幸福度が低く、400万円以上の層の幸福度が高くなっています（図表1-2-6）。

図表1-2-6 幸福度（世帯の年間収入別）



（備考）

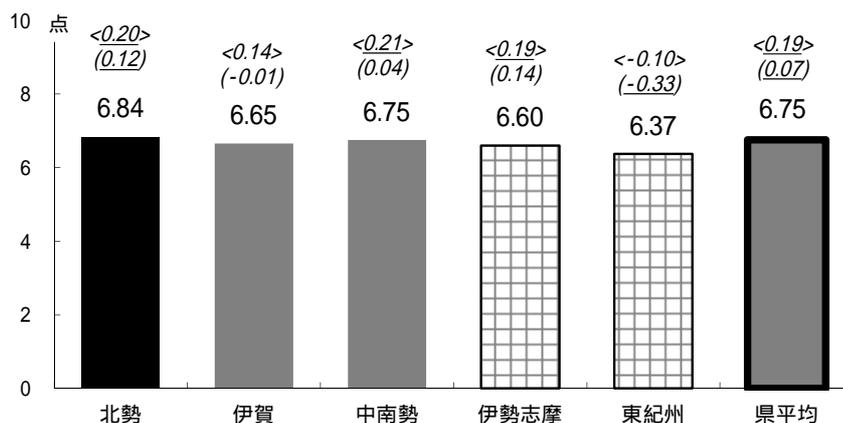
前回調査では個人の年間収入を質問、第1回調査では異なる区分での世帯収入を質問しているため、前回調査及び第1回調査との比較はしていません。

7 地域別

県平均と比べ、北勢地域の幸福度が高く、伊勢志摩地域、東紀州地域の幸福度が低くなっています。

第1回調査と比べ、北勢地域、中南勢地域、伊勢志摩地域の幸福度が高くなっています。前回調査と比べ、北勢地域の幸福度が高く、東紀州地域の幸福度が低くなっています（図表1-2-7）。

図表1-2-7 幸福度（地域別）



【参考】連続して幸福度が高い（低い）属性項目

第1回調査から第3回調査まで、3回連続で、県平均に比べ、幸福度が高いあるいは低い属性項目（統計的に有意な差がある場合）は次のとおりです。

（幸福度が高い属性） 女性、30歳代、専業主婦・主夫、有配偶、一世代世帯

（幸福度が低い属性） 男性、無職、未婚、離別・死別、単独世帯、伊勢志摩地域

第3節 幸福度の詳細クロス分析

個々人の幸福度は様々であり、多くの要素と関係性があると考えられます。そこで、県民の幸福度の特徴や傾向をより詳細に把握するため、この節では、以下の2属性以上のクロス分析を行いました。

- 1 性・年齢(5歳階級)別に見た幸福度
- 2 職業・性・配偶関係別に見た幸福度
- 3 配偶関係・性・年齢別に見た幸福度
- 4 地域・性別などから見た幸福度

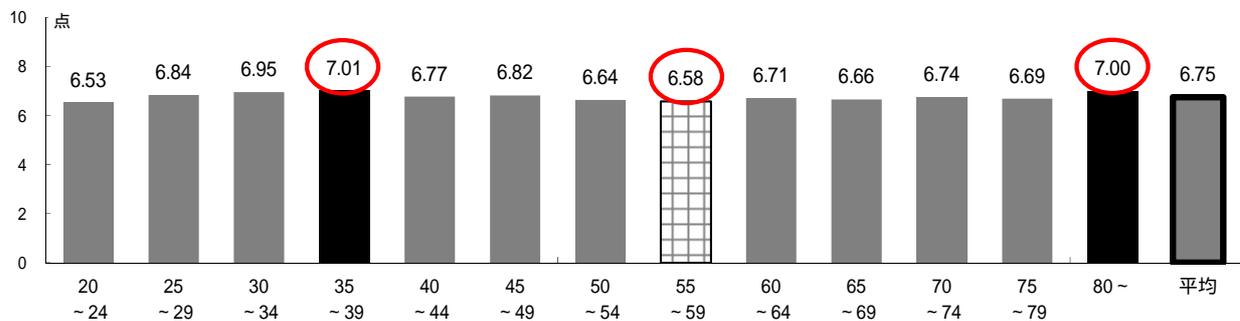
なお、すべての属性(性、年齢、職業、配偶関係、世帯類型、世帯年収、地域)を2つ組み合わせたクロス分析については、42通り(重複分を除くと21通り)ありますが、集計データ(有意性検定含む)、前回調査及び第1回調査との推移データを別冊のデータ集に掲載しています。

1 性・年齢(5歳階級)別に見た幸福度の特徴

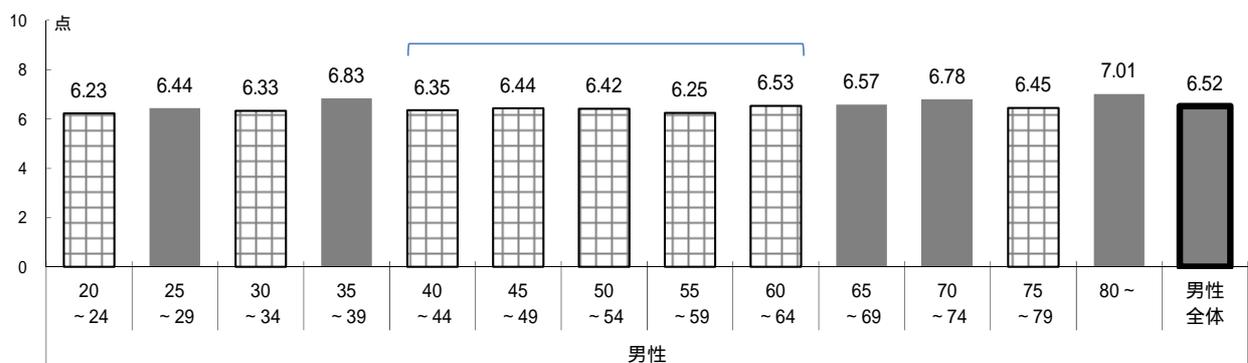
10歳階級別に幸福度を見ると、30歳代の幸福度が高く、50歳代の幸福度が低くなっています(6頁)。さらに、5歳階級別に見ると、35～39歳、80歳以上の幸福度が高く、55～59歳の幸福度が低くなっています(図表1-3-1)。

また、性・年齢別に幸福度を見ると、40歳代から60歳代前半までの男性で幸福度が低く、一方、20歳代後半から40歳代の女性で幸福度が高くなっています(図表1-3-2、1-3-3)。

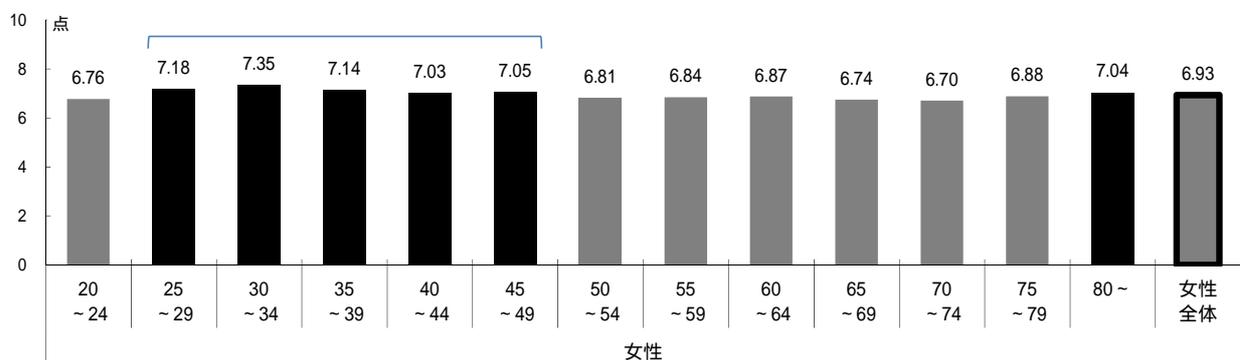
図表1-3-1 幸福度(年齢(5歳階級)別)



図表1-3-2 幸福度(男性・年齢(5歳階級)別)



図表1-3-3 幸福度(女性・年齢(5歳階級)別)



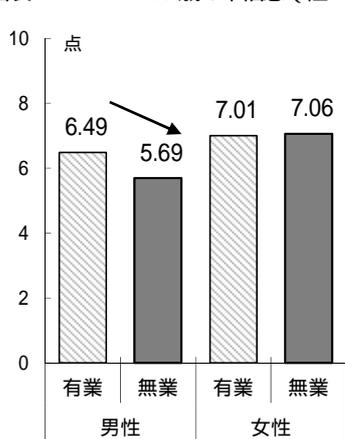
2 職業・性・配偶関係別に見た幸福度の特徴

20～59歳を対象に、幸福度を性・職業の有無別に見ると、男性は有業よりも無業の幸福度の平均値は低くなっています（図表1-3-4）。

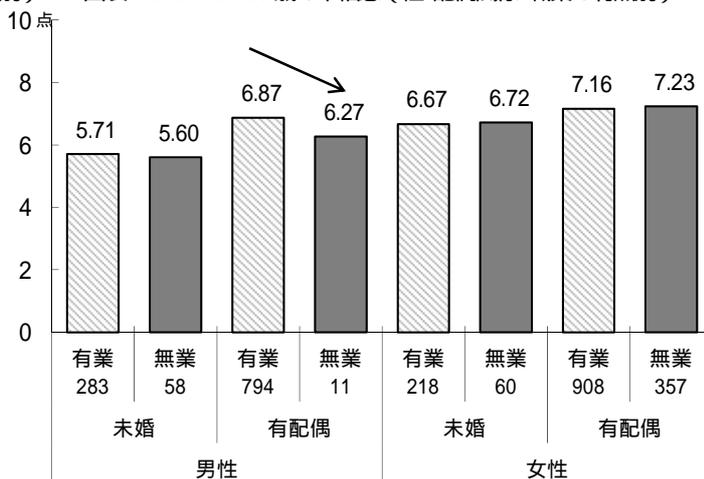
さらに、配偶関係別に見た場合、有業と無業で幸福度の平均値の差が最も大きいのは男性の有配偶となっています（図表1-3-5）。

また、有配偶を対象に有業、無業を区分して見ると、男女ともパート・アルバイト・派遣社員などの幸福度の平均値が他の区分よりも低くなっています（図表1-3-6）。

図表1-3-4 20～59歳の幸福度（性・職業の有無別）

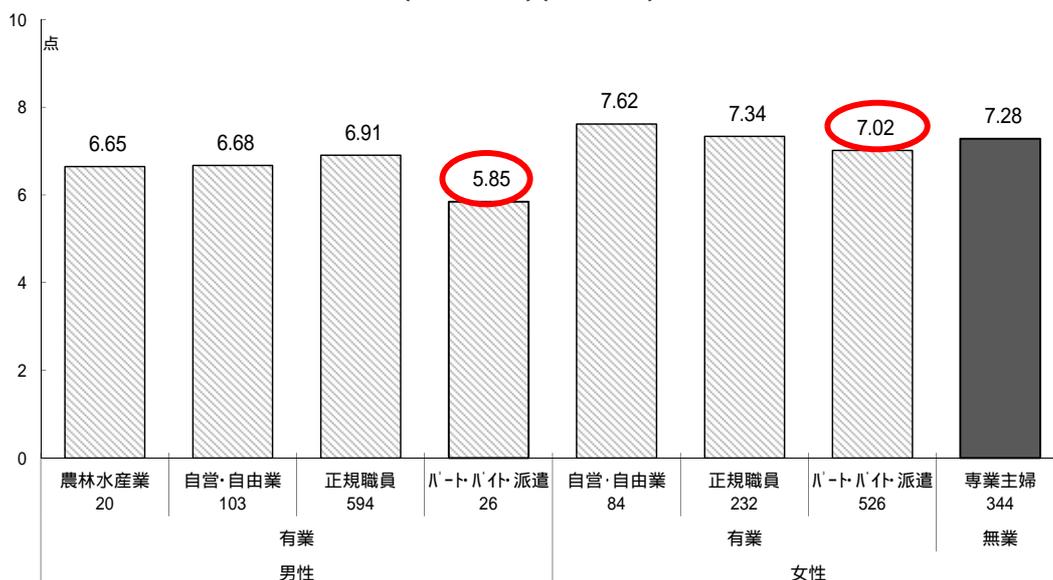


図表1-3-5 20～59歳の幸福度（性・配偶関係・職業の有無別）



- (参考) 1 有業...農林水産業、自営業・自由業、正規職員、パート・アルバイト・派遣社員など、その他の職業
 2 無業...学生、専業主婦・主夫、無職
 3 各属性欄の数字はサンプル数。

図表1-3-6 20～59歳の有配偶の幸福度（性・職業別）(20～59歳)



- (参考) 1 各属性欄の数字はサンプル数。
 2 サンプル数が20未満の区分については、表示していません。

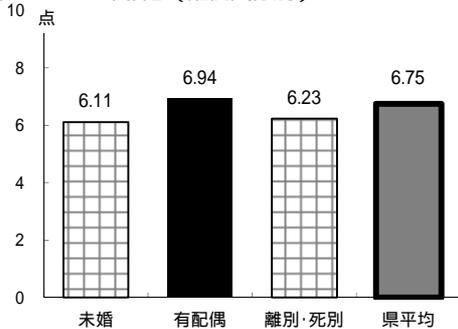
3 配偶関係・性・年齢別に見た幸福度の特徴

配偶関係別に幸福度を見ると、有配偶の方の幸福度が高く、未婚と離別・死別の方の幸福度が低くなっています(図表 1-3-7)。さらに、離別と死別を分けて配偶関係別の幸福度を見ると、離別の方の幸福度が低くなっています(図表 1-3-8)。

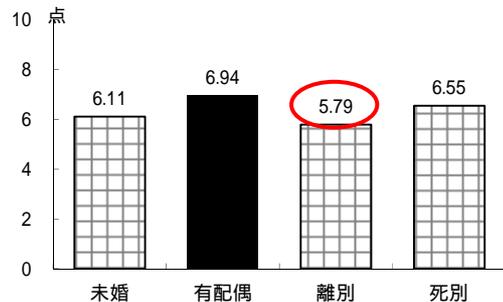
性・配偶関係別に幸福度を見ると、男性の離別の方の幸福度が低くなっています(図表 1-3-9)。

配偶関係・年齢別に幸福度を見ると、有配偶の方の20歳代から40歳代までの幸福度が高く、未婚、離別の方はいずれの年齢区分でも幸福度が低くなっています(図表 1-3-10)。

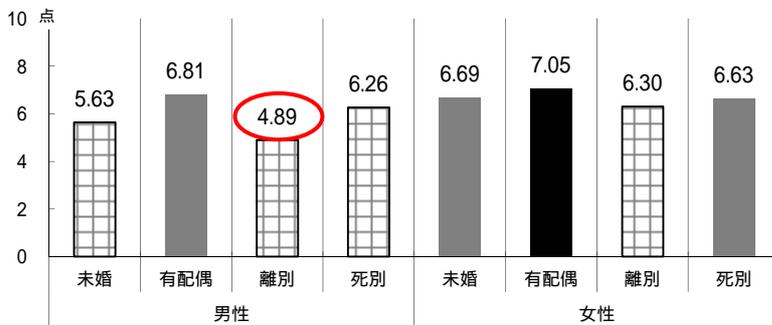
図表 1-3-7 幸福度(配偶関係別)



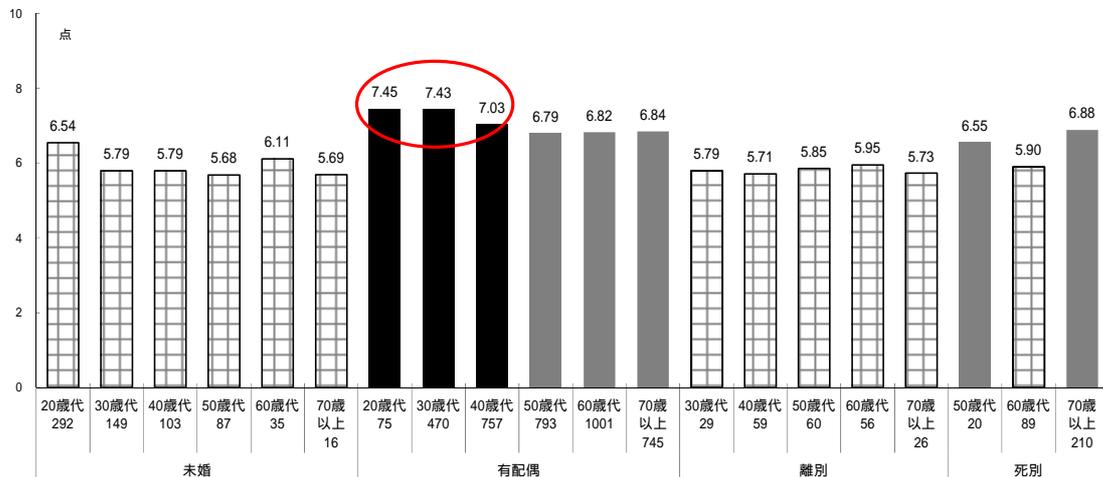
図表 1-3-8 幸福度(配偶関係別-離別・死別分離)



図表 1-3-9 幸福度(性・配偶関係別)



図表 1-3-10 幸福度(配偶関係・年齢(10歳階級)別)



(参考) 1 各属性欄の数字はサンプル数。

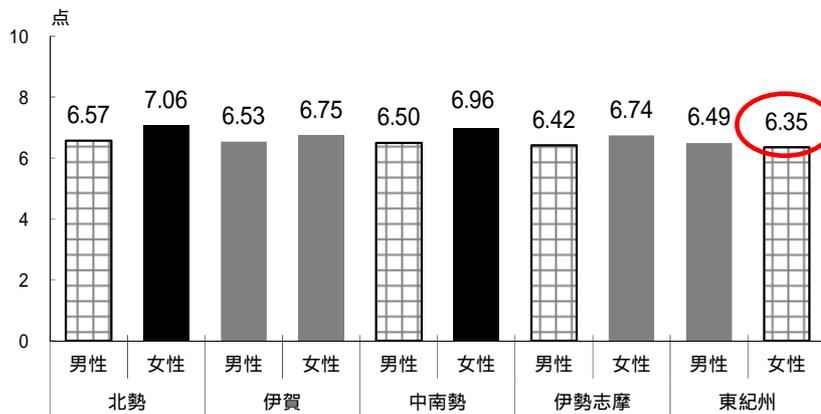
2 離別の20歳代、死別の20~40歳代については、サンプル数が少ないため、表示していません。

4 地域・性別などに見た幸福度の特徴

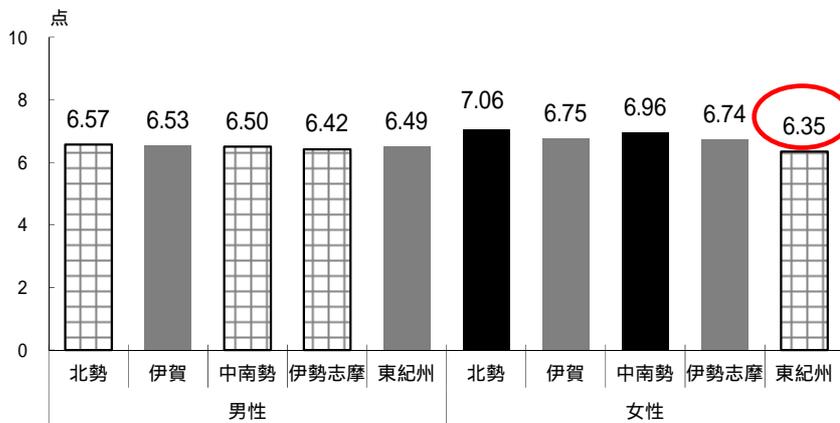
地域・性別に幸福度を見ると、北勢、伊賀、中南勢、伊勢志摩地域で女性の幸福度の平均値が男性よりも高くなっていますが、東紀州地域では女性の幸福度が低くなっています。性・地域別に幸福度を見ると、東紀州地域のみ女性の幸福度が県平均よりも低くなっています（図表1-3-11、1-3-12）。

また、年齢（20歳階級）・地域別に幸福度を見ると、東紀州地域の60歳以上の幸福度が低くなっています（図表1-3-13）。

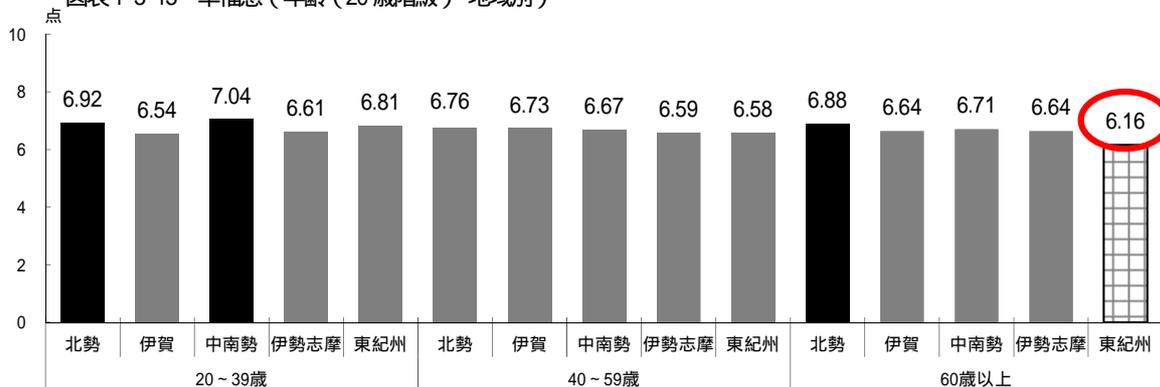
図表1-3-11 幸福度（地域・性別）



図表1-3-12 幸福度（性・地域別）



図表1-3-13 幸福度（年齢（20歳階級）・地域別）



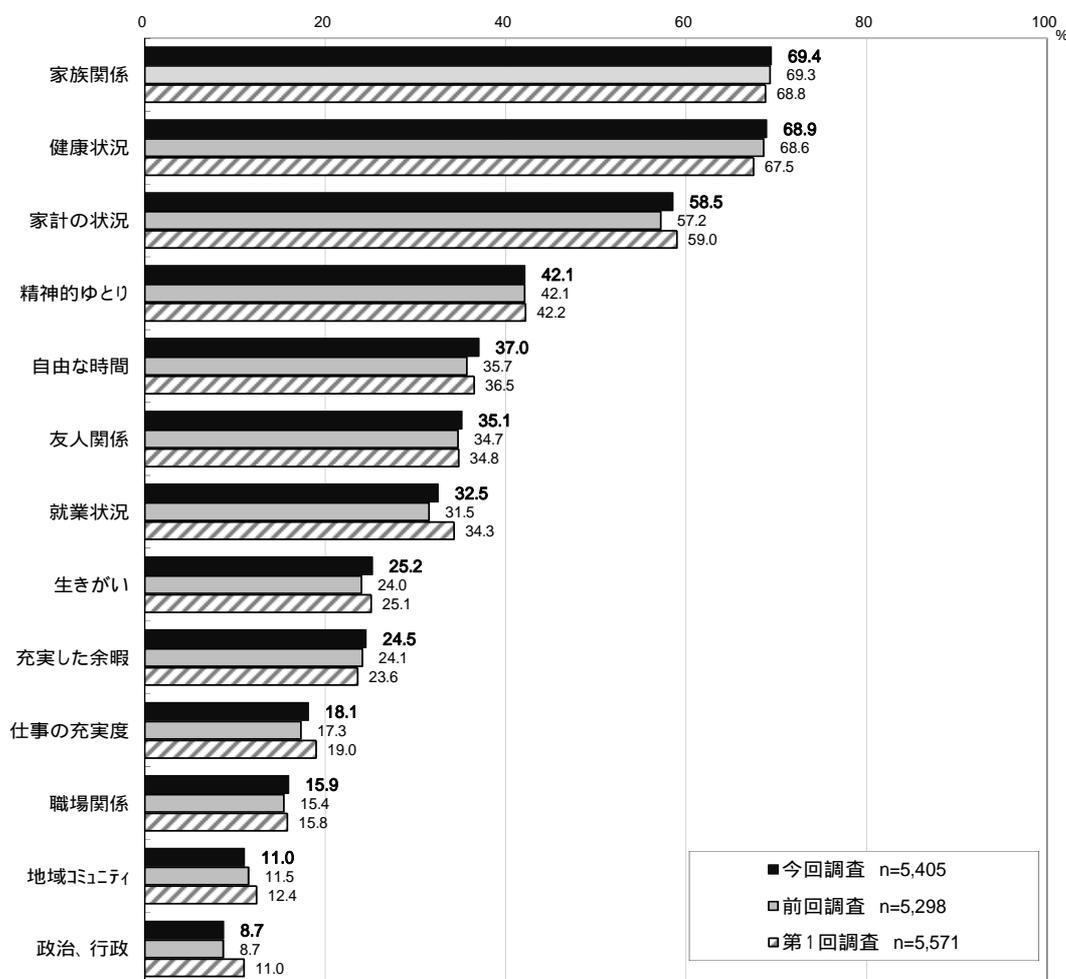
第4節 幸福感を判断する際に重視した事項と幸福感との関係

1 幸福感を判断する際に重視した事項の県全体の状況

幸福感を判断する際に重視した事項は、「家族関係」が69.4%と最も高く、次いで「健康状況」(68.9%)、「家計の状況(所得・消費)」(58.5%)となっており、第1回調査、前回調査と同じ順位であり、第4位以下もこれまでと、大きな変化はみられません(図表1-4-1)

なお、調査方法等が同一ではないので単純な比較はできませんが、国の調査では上位3項目は県と同じですが、「健康状況」が「家族関係」よりも高い割合になっています(図表1-4-2)

図表1-4-1 幸福感を判断する際に重視した事項(複数回答)



図表1-4-2 参考とした国の調査

国民生活選好度調査(平成21年度~23年度)(実施主体:内閣府)
 質問「幸福感を判断する際に、重視した事項は何ですか。」(複数回答)
 注)国の選択肢には「政治、行政」がありません。
 調査結果(各年度上位3項目)(平成21年度~平成23年度)

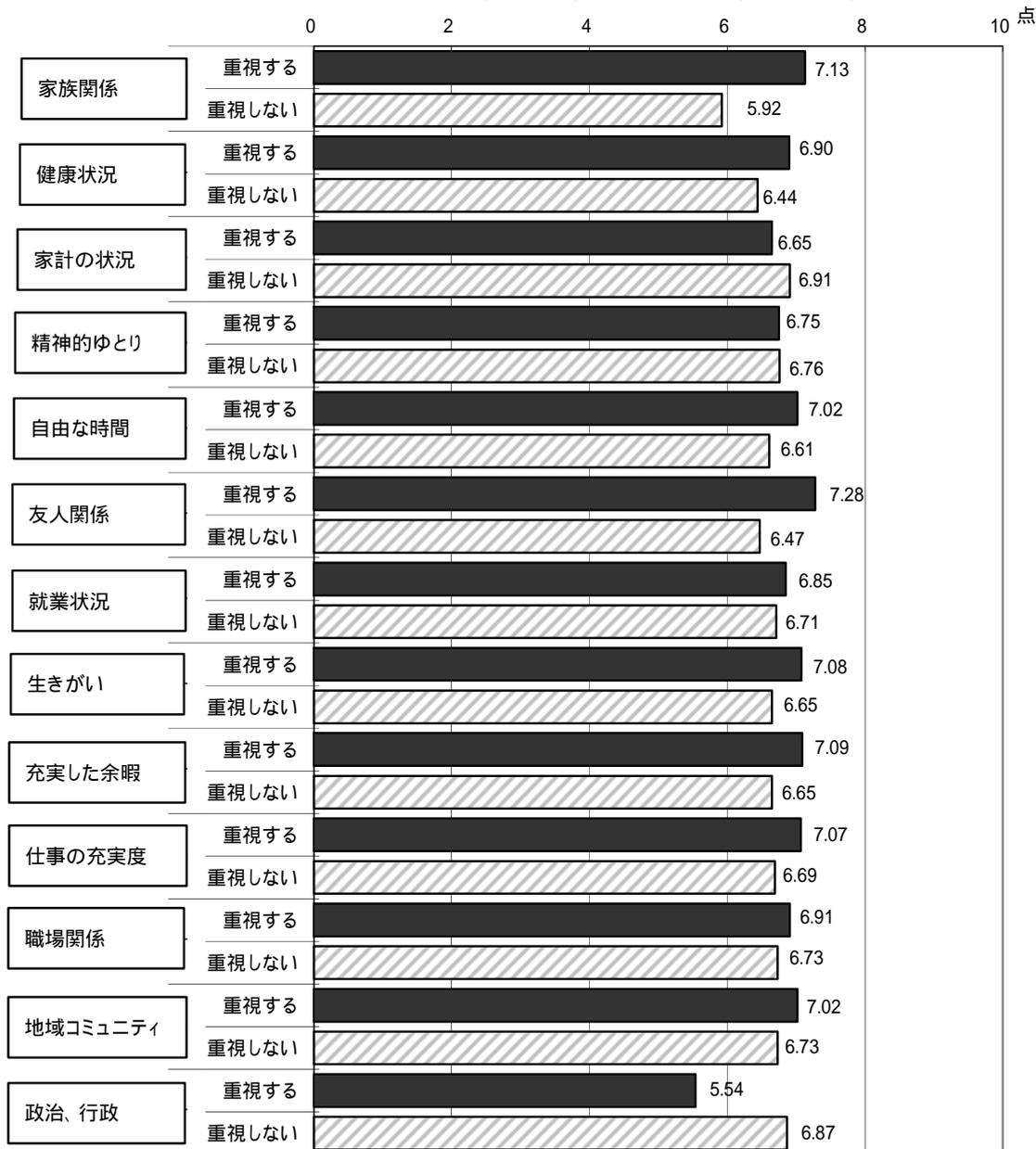
- 平成23年度:家計の状況(62.2%)、健康状況(62.1%)、家族関係(61.3%)
- 平成22年度:健康状況(65.4%)、家族関係(65.2%)、家計の状況(62.1%)
- 平成21年度:健康状況(69.7%)、家族関係(66.4%)、家計の状況(65.4%)

2 幸福度を判断する際に重視した事項と幸福度との関係

幸福度を判断する際に重視した事項について、選択した（重視する）人の幸福度の平均値と、選択しなかった（重視しない）人の幸福度の平均値を比較したところ、「家計の状況」、「精神的なゆとり」、「政治、行政」以外は、選択した（重視する）人の平均値が選択しなかった（重視しない）人の平均値より高くなっています。最も差が大きいのは、「家族関係」で、選択した人が7.13点で、選択しなかった人（5.92点）より1.21点高くなっています。

また、選択した人の平均値が最も低かったのは「政治、行政」で、選択した人の平均値（5.54点）が、選択しなかった人の平均値（6.87点）より1.33点低くなっています（図表1-4-3）

図表1-4-3 幸福度を判断する際に重視した事項を選択した（重視する）人と選択しない（重視しない）人の幸福度の平均値

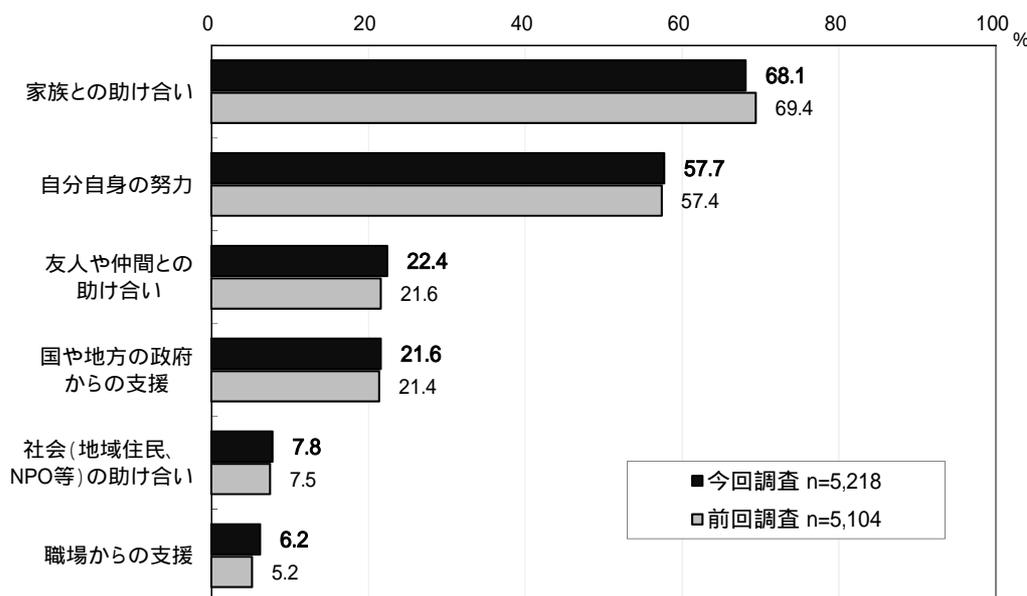


第5節 幸福度を高める手立てと幸福度との関係

1 幸福度を高める手立ての県全体の状況

幸福度を高める手立てについては、「家族との助け合い」が68.1%と最も高く、次いで「自分自身の努力」(57.7%)となっています。前回調査と比較すると、順位に変動はありません(図表1-5-1)

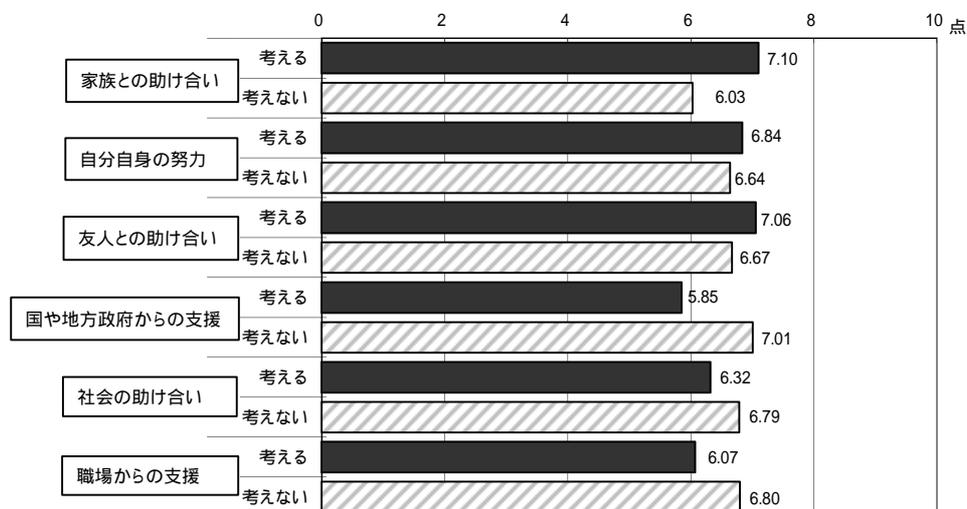
図表1-5-1 幸福度を高める手立て(2つまでの複数回答)



2 幸福度を高める手立てと幸福度との関係

幸福度を高める有効な手立てについて、選択した(有効な手立てと考える)人の幸福度の平均値と、選択しなかった(有効な手立てと考えない)人の幸福度の平均値を比較したところ、「家族との助け合い」、「自分自身の努力」、「友人との助け合い」については、選択した人の幸福度が選択しなかった人よりも高く、「国や地方の政府からの支援」、「社会(地域住民、NPO等)の助け合い」、「職場からの支援」については、選択しなかった人の幸福度が選択した人よりも高くなっています(図表1-5-2)

図表1-5-2 幸福度を高める有効な手立てと考える(選択した)人と考えない(選択しない)人の幸福度の平均値



第2章 幸福実感指標の現状

この第2章では、「みえ県民力ビジョン」において設定した16の幸福実感指標に基づき質問した「地域や社会の状況についての実感」について、属性ごとのクロス集計、3年間の推移等による分析を行いました。

第1節 16の幸福実感指標の結果概要

1 幸福実感指標

幸福実感指標は「みえ県民力ビジョン行動計画」において、16の政策分野ごとに設定したもので、県民の皆さん一人ひとりが生活している中で感じる政策分野ごとの実感の推移を調べ、全体としての幸福実感を把握するための指標です。

幸福実感指標とそれに関連する県の政策分野は以下のとおりです。

問2	幸福実感指標	関連する政策分野
(1)	災害等の危機への備えが進んでいると感じる県民の割合	危機管理
(2)	必要な医療サービスが利用できていると感じる県民の割合	命を守る
(3)	犯罪や事故が少なく、安全に暮らせていると感じる県民の割合	暮らしを守る
(4)	必要な福祉サービスが利用できていると感じる県民の割合	共生の福祉社会
(5)	身近な自然や環境を守る取組が広がっていると感じる県民の割合	環境を守る持続可能な社会
(6)	一人ひとりが尊重され、誰もが社会に参画できていると感じる県民の割合	人権の尊重と多様性を認め合う社会
(7)	子どものためになる教育が行われていると感じる県民の割合	教育の充実
(8)	地域社会の見守りの中で、子どもが元気に育っていると感じる県民の割合	子どもの育ちと子育て
(9)	スポーツを通じて夢や感動が育まれていると感じる県民の割合	スポーツの推進
(10)	自分の住んでいる地域に愛着があり、今後も住み続けたいと感じる県民の割合	地域との連携
(11)	文化芸術や地域の歴史等について、学び親しむことができると感じる県民の割合	文化と学び
(12)	三重県産の農林水産物を買いたいと感じる県民の割合	農林水産業
(13)	県内の産業活動が活発であると感じる県民の割合	強じんて多様な産業
(14)	働きたい人が仕事に就き、必要な収入を得ていると感じる県民の割合	雇用の確保
(15)	国内外に三重県の魅力が発信され、交流が進んでいると感じる県民の割合	世界に開かれた三重
(16)	道路や公共交通機関等が整っていると感じる県民の割合	安心と活力を生み出す基盤

2 全体の状況(図表2-1-1 参照)

16の幸福実感指標についての今回調査結果、前回調査及び第1回調査結果との比較についての概要は次のとおりです。それぞれの項目の詳細については、次節において記載しています。

(1) 今回調査結果の概要

『実感している層』の割合を高い順に見ると、3番目までは次のようになっています。

- (12) 三重県産の農林水産物を買いたい(85.6%)
- (10) 自分の住んでいる地域に愛着があり、今後も住み続けたい(72.4%)
- (3) 犯罪や事故が少なく、安全に暮らせている(61.5%)

また、『実感していない層』の割合を高い順に見ると、3番目までは次のようになっています。

- (14) 働きやすい人が仕事に就き、必要な収入を得ている(65.2%)
- (6) 一人ひとりが尊重され、誰もが社会に参画できている(60.3%)
- (1) 災害等の危機への備えが進んでいる(59.0%)

『実感している層』の割合・・・「感じる」と「どちらかといえば感じる」の割合を小数点第2位で四捨五入した数値の合計
 『実感していない層』の割合・・・「感じない」と「どちらかといえば感じない」の割合を小数点第2位で四捨五入した数値の合計

(2) 前回調査との比較

前回調査時よりも6項目で実感が高く()なっており、実感が低く()なっている項目はありません。

実感が高くなっている項目のうち、『実感している層』の割合の変化の幅が大きい順の3項目は次のとおりです。

- (15) 国内外に三重県の魅力が発信され、交流が進んでいる(実感：+11.8ポイント)
- (13) 県内の産業活動が活発である(実感：+6.3ポイント)
- (7) 子どものためになる教育が行われている(実感：+3.8ポイント)

『実感が高く』・・・今回調査と前回調査との比較で、『実感している層』の割合が増えている、又は『実感していない層』の割合が減っており、統計的に有意な水準の差がある場合(危険率5%未満)

『実感が低く』・・・今回調査と前回調査との比較で、『実感している層』の割合が減っている、又は『実感していない層』の割合が増え、統計的に有意な水準の差がある場合(危険率5%未満)

(3) 第1回調査との比較

第1回調査時よりも13項目で実感が高く()なっており、1項目で実感が低く()なっています。

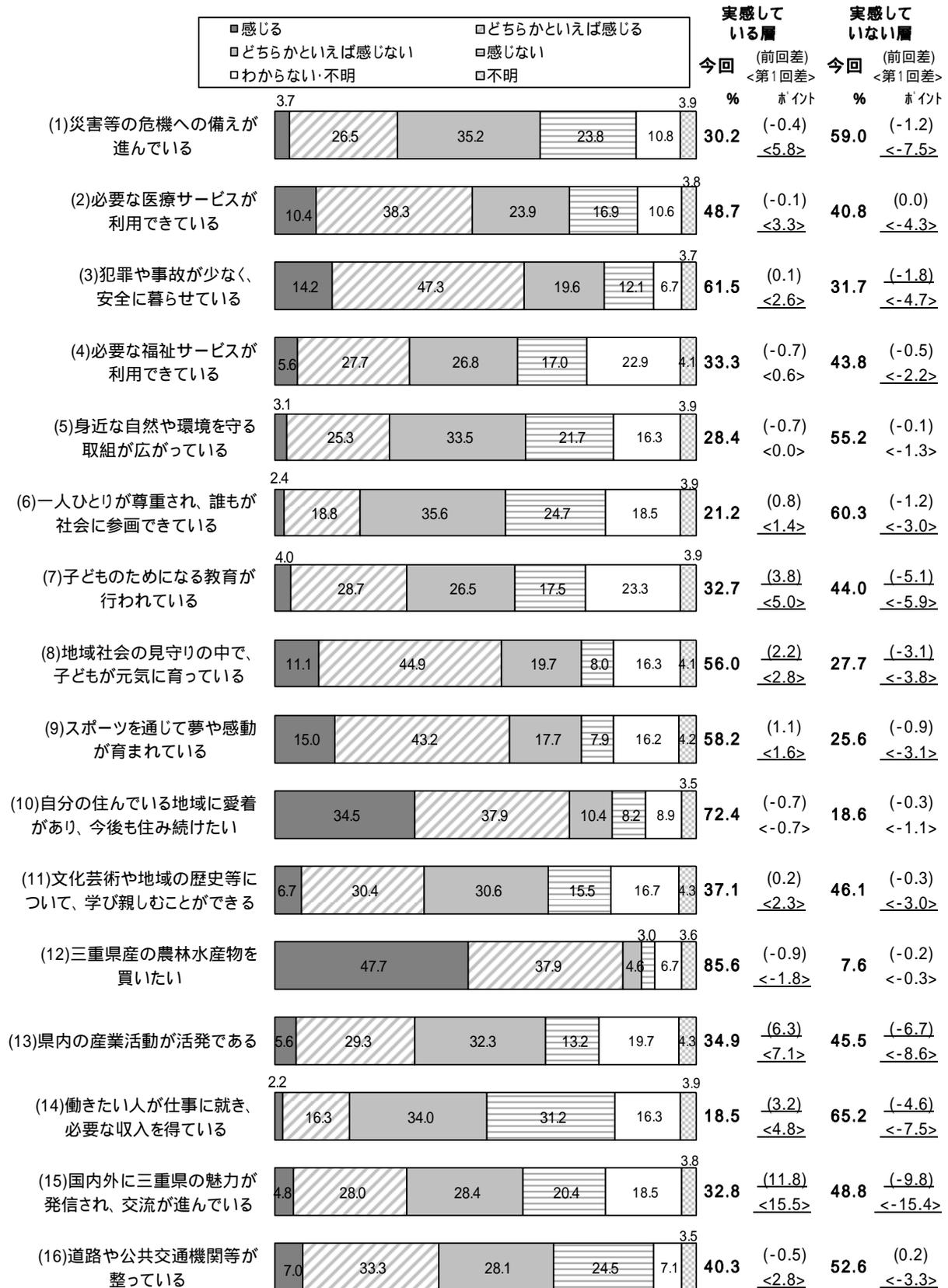
実感が高くなっている項目のうち、『実感している層』の割合の変化の幅が大きい順の3項目は次のとおりです。

- (15) 国内外に三重県の魅力が発信され、交流が進んでいる(実感：+15.5ポイント)
- (13) 県内の産業活動が活発である(実感：+7.1ポイント)
- (1) 災害等の危機への備えが進んでいる(実感：+5.8ポイント)

『実感が高く』・・・今回調査と第1回調査との比較で、『実感している層』の割合が増えている、又は『実感していない層』の割合が減っており、統計的に有意な水準の差がある場合(危険率5%未満)

『実感が低く』・・・今回調査と第1回調査との比較で、『実感している層』の割合が減っている、又は『実感していない層』の割合が増え、統計的に有意な水準の差がある場合(危険率5%未満)

図表2-1-1 地域や社会の状況についての実感(項目別)



(備考) (前回差)及び<第1回差>の数値に下線を付けているのは、統計的に有意な水準(危険率5%未満)の場合です。

第2節 それぞれの幸福実感指標の現状

1 災害等の危機への備えが進んでいる（問2 - 1）

(1) 今回調査結果の概要（図表2-2-1 参照）

- 『実感している層』は30.2%、『実感していない層』は59.0%です。
16項目中、『実感していない層』が3番目に高くなっています。
- 『実感していない層』が『実感している層』より28.8ポイント高くなっています。
- 特徴のある属性項目は次のとおりです。（県全体に比べて統計的に有意な差がある属性項目）

実感している傾向が相対的に強い属性項目	実感している傾向が相対的に弱い属性項目
東紀州 女性 70歳以上 専業主婦、無職 離死別 0～100万円	男性 20歳代、40～50歳代 正規職員 未婚 単独世帯、二世帯世帯 300～600万円

(2) 第1回調査からの推移（図表2-2-2 参照）

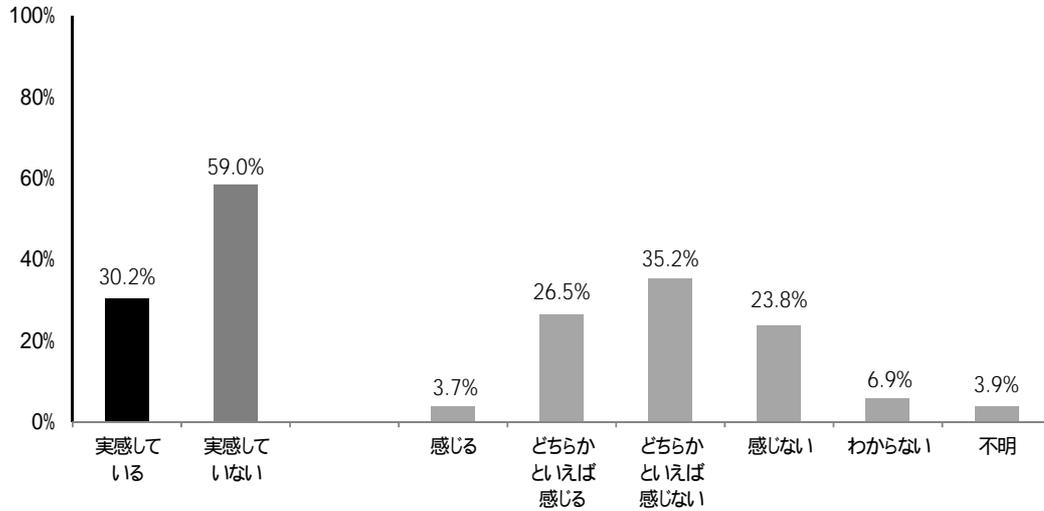
- 全体結果（統計的に有意な水準で増減があるもの）
 - ・ 第1回調査時よりも、実感が高くなっています。
（『実感している層』：+5.8ポイント、『実感していない層』：-7.5ポイント）
- 属性別の傾向（統計的に有意な水準で増減があるもの）

実感が高くなっている属性項目		実感が低くなっている属性項目	
対前回調査	対第1回調査	対前回調査	対第1回調査
主婦	伊賀除く各地域 全性別 全年齢層 自営、正規、パート等、主婦、 無職 全配偶関係 全世帯類型	自営	

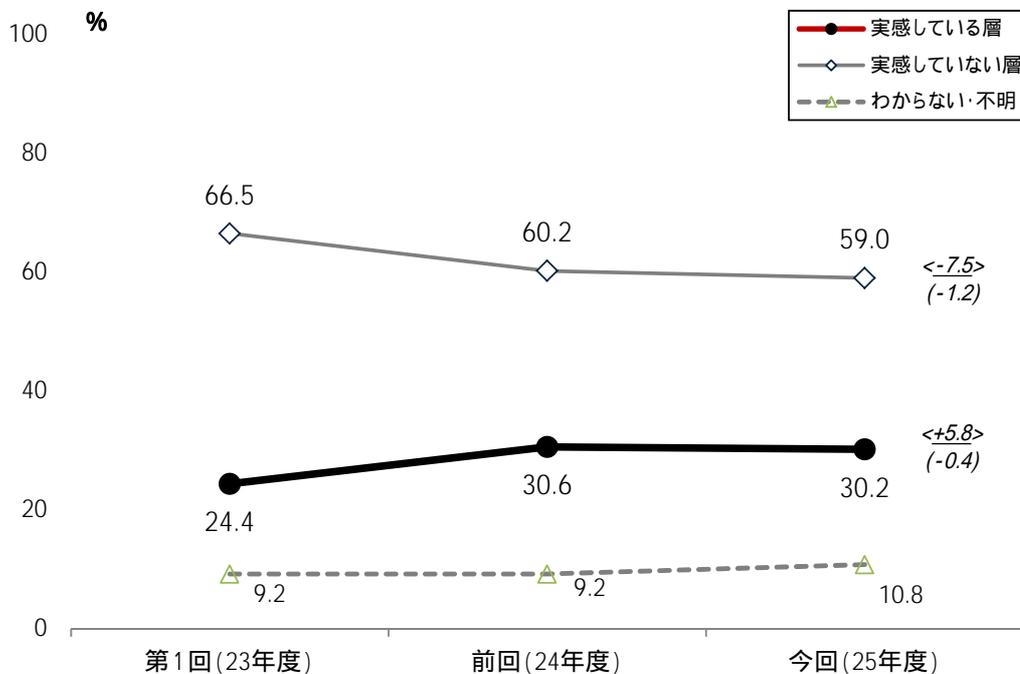
(3) 分析・考察

- ・ 第1回調査時よりも実感は高くなっていますが、依然として実感していない層が実感している層の2倍程度となっています。
- ・ 属性別に見ると、大半の属性で第1回調査時よりも実感は高くなっていますが、今回調査でも、性別、年齢、職業別などにより、実感している傾向の差が見られます。
- ・ 一方、「防災に関する県民意識調査」（平成25年度）では、東日本大震災発生後「時間の経過とともに危機意識が薄れつつある」人が45.0%（全県）となっており、危機意識の低下が懸念されます。なお、津波危険地域（鳥羽市以南）では31.0%であり、地域による差も見られます。
- ・ これらを踏まえると、あらゆる機会を活用して、必要な情報をきめ細かに県民各層に届け、危機意識の低下を防ぎ、「協働」による地域防災力の向上などに取り組む必要があると考えられます。

図表2-2-1 地域や社会の状況についての実感割合（今回調査結果）（災害等の危機への備えが進んでいる）



図表2-2-2 地域や社会の状況についての実感割合(第1回調査からの推移)（災害等への危機への備えが進んでいる）



【備考】

- 『実感している』…『感じる』と『どちらかといえば感じる』の割合の合計
- 『実感していない』…『感じない』と『どちらかといえば感じない』の割合の合計
- 『実感している傾向が相対的に強い属性項目』…『実感している』割合が県全体に比べて高い、あるいは『実感していない』割合が低い属性項目（危険率5%未満で統計的に有意な差があるものを記載）
- 『実感している傾向が相対的に弱い属性項目』…『実感している』割合が県全体に比べて低い、あるいは『実感していない』割合が高い属性項目（危険率5%未満で統計的に有意な差があるものを記載）
- 『実感が高くなっている属性項目』…『実感している』割合が増加、あるいは『実感していない』割合が減少している属性項目（危険率5%未満で統計的に有意な差があるものを記載）
- 『実感が低くなっている属性項目』…『実感している』割合が減少、あるいは『実感していない』割合が増加している属性項目（危険率5%未満で統計的に有意な差があるものを記載）。
- 図表（第1回からの推移）中、（ ）内は対前回差、< >内は対第1回差を記載。いずれも、危険率5%未満で統計的に有意な差があるものには下線を付けている。

2 必要な医療サービスが利用できている（問2 - 2）

(1) 今回調査結果の概要（図表2-2-3参照）

- 『実感している層』は48.7%、『実感していない層』は40.8%です。
- 『実感している層』が『実感していない層』より7.9ポイント高くなっています。
- 特徴のある属性項目は次のとおりです。（県全体に比べて統計的に有意な差がある属性項目）

実感している傾向が相対的に強い属性項目	実感している傾向が相対的に弱い属性項目
北勢、中南勢 70歳以上 農林水産業、学生、無職 0～100万円、1000万円～	伊賀、東紀州 40～50歳代 正規職員、パート・バイト派遣 未婚 100～200万円

(2) 第1回調査からの推移（図表2-2-4参照）

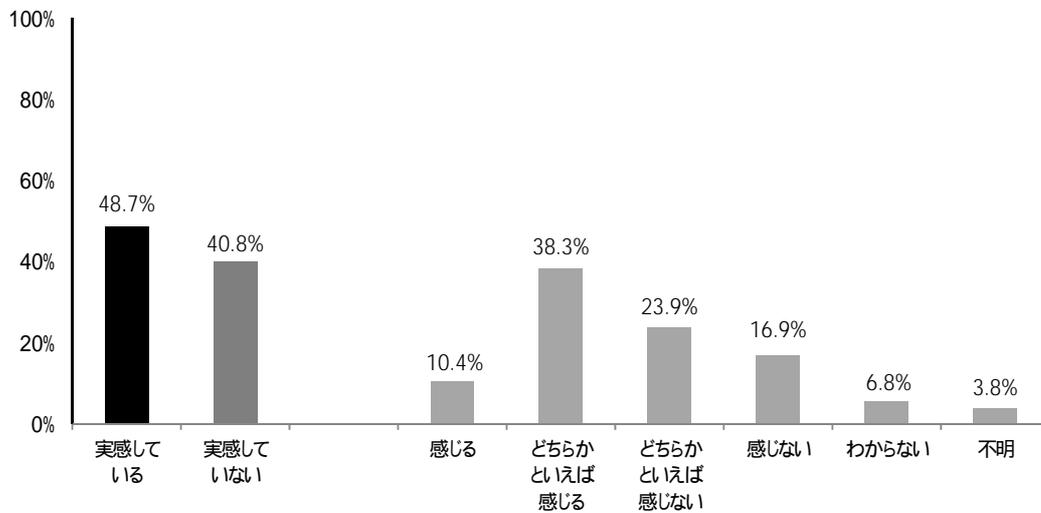
- 全体結果
 - ・ 第1回調査時よりも、実感が高くなっています。
（『実感している層』：+3.3ポイント、『実感していない層』：-4.3ポイント）
- 属性別の傾向（統計的に有意な水準で増減があるもの）

実感が高くなっている属性項目		実感が低くなっている属性項目	
対前回調査	対第1回調査	対前回調査	対第1回調査
伊賀	東紀州除く各地域 全性別 30～40代、60代 パート等、主婦、無職 未婚、有配偶 一世代、二世代	中南勢	

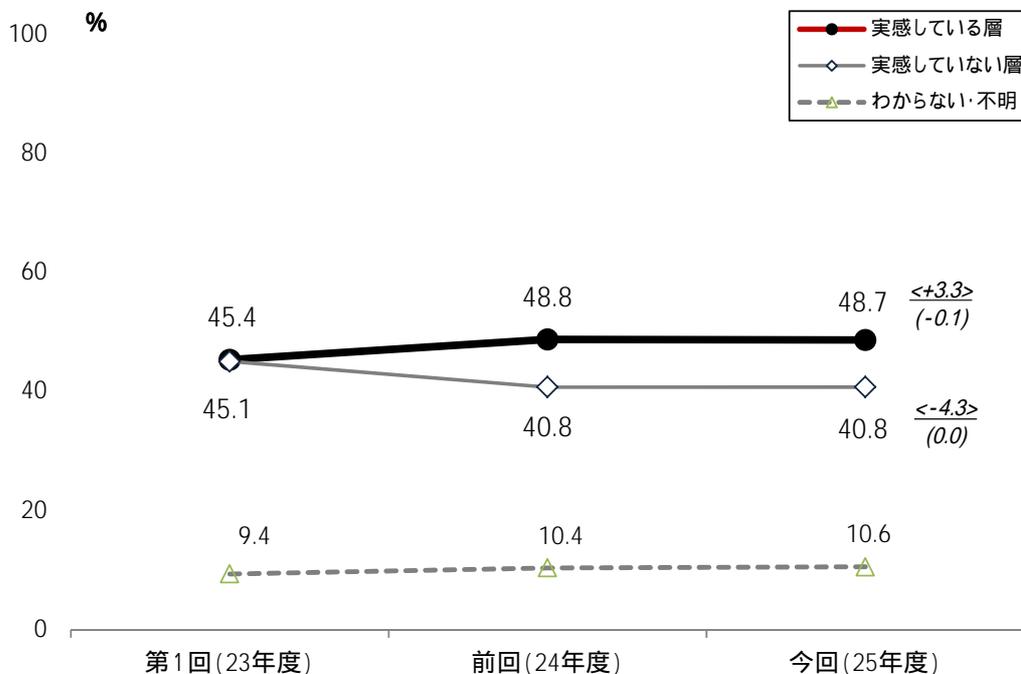
(3) 分析・考察

- ・ 県全体では、第1回調査時より実感が高くなっており、前回調査、今回調査とも実感している層が5割近くあり、実感していない層を8ポイント程度上回っています。
- ・ 属性別に見ても、多くの属性で第1回調査時よりも実感が高くなっていますが、依然として、地域や年齢等による差は見られます。
- ・ 今回調査における悩みの原因についての質問項目で「自分の健康状態」と回答する人の割合は、年齢が高くなるにつれて高くなる傾向となっています（102頁）。40～50歳代が実感している傾向が弱く、70歳以上は強くなっていることについて、若年層は健康に不安が少なく、高齢層は実際に医療サービスを利用しているのに対して、40～50歳代では、健康状態に不安を持ちながら、医療サービスを利用するほどではないという可能性も考えられます。
- ・ 地域による差については、伊賀地域と東紀州地域では、人口10万人当たりの医師数が県平均に比べて少ない（厚生労働省「医師・歯科医師・薬剤師調査」（平成22年12月31日現在）：人口10万人当たり医療施設従事医師数）という調査結果もあり、医師不足への不安感が影響している可能性があります。引き続き、医師の不足・偏在解消に向けての取組が必要と考えられます。

図表2-2-3 地域や社会の状況についての実感割合（今回調査結果）（必要な医療サービスが利用できている）



図表2-2-4 地域や社会の状況についての実感割合(第1回調査からの推移)(必要な医療サービスが利用できている)



【備考】

- 1 『実感している』…『感じる』と『どちらかといえば感じる』の割合の合計
- 2 『実感していない』…『感じない』と『どちらかといえば感じない』の割合の合計
- 3 『実感している傾向が相対的に強い属性項目』…『実感している』割合が県全体に比べて高い、あるいは『実感していない』割合が低い属性項目（危険率5%未満で統計的に有意な差があるものを記載）
- 4 『実感している傾向が相対的に弱い属性項目』…『実感している』割合が県全体に比べて低い、あるいは『実感していない』割合が高い属性項目（危険率5%未満で統計的に有意な差があるものを記載）
- 5 『実感が高くなっている属性項目』…『実感している』割合が増加、あるいは『実感していない』割合が減少している属性項目(危険率5%未満で統計的に有意な差があるものを記載)
- 6 『実感が低くなっている属性項目』…『実感している』割合が減少、あるいは『実感していない』割合が増加している属性項目(危険率5%未満で統計的に有意な差があるものを記載)。
- 7 図表(第1回からの推移)中、()内は対前回差、< >内は対第1回差を記載。いずれも、危険率5%未満で統計的に有意な差があるものには下線を付けている。

3 犯罪や事故が少なく、安全に暮らしている（問2 - 3）

(1) 今回調査結果の概要（図表2-2-5参照）

- 『実感している層』は61.5%、『実感していない層』は31.7%です。
16項目中、『実感している層』が3番目に高くなっています。
- 『実感している層』が『実感していない層』より29.8ポイント高くなっています。
- 特徴のある属性項目は次のとおりです。（県全体に比べて統計的に有意な差がある属性項目）

実感している傾向が相対的に強い属性項目	実感している傾向が相対的に弱い属性項目
伊勢志摩、東紀州 60歳以上 農林水産業、無職 三世帯世帯 500～600万円、1000万円～	北勢 20～40歳代 正規職員、パートパート派遣 ～200万円

(2) 第1回調査からの推移（図表2-2-6参照）

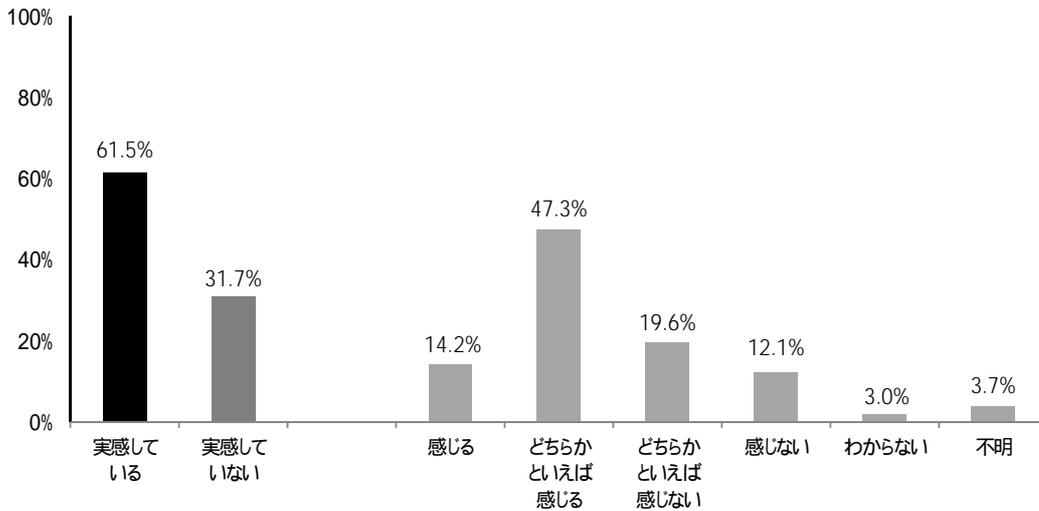
- 全体結果
 - ・ 前回調査時よりも、実感が高くなっています。
（『実感していない層』 - 1.8ポイント）
 - ・ 第1回調査時よりも、実感が高くなっています。
（『実感している層』： +2.6ポイント、『実感していない層』： -4.7ポイント）
- 属性別の傾向（統計的に有意な水準で増減があるもの）

実感が高くなっている属性項目		実感が低くなっている属性項目	
対前回調査	対第1回調査	対前回調査	対第1回調査
中南勢、伊勢志摩 60代 無職	北勢、中南勢、伊勢志摩 全性別 50以上 自営、パート等、主婦、無職 全配偶関係 一世代、二世代、三世帯	北勢	20代

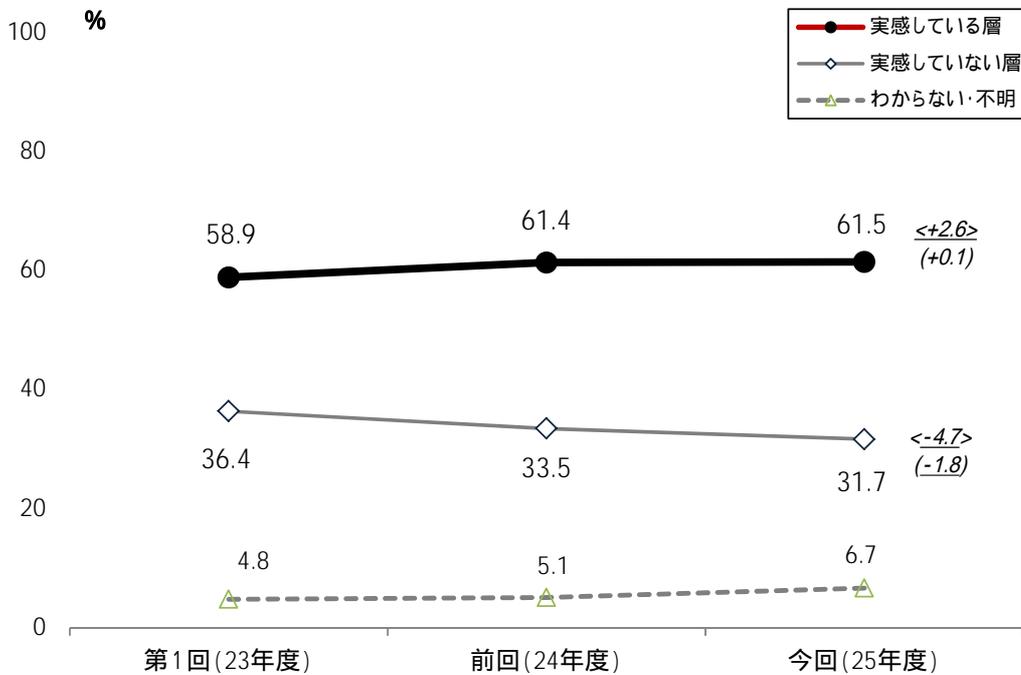
(3) 分析・考察

- ・ 第1回調査から実感している層が実感していない層を大きく上回っていましたが、第1回調査時及び前回調査時より実感が高まっており、県全体として、実感している層が実感していない層を30ポイント程度上回っています。
- ・ 属性別に見ると、地域、年齢などによる差は見られますが、実感している傾向が弱い属性についても、実感している層が5割を超えています。
- ・ 地域別の差については、刑法犯の認知件数、交通事故の発生件数の地域別の比率の高低と類似しており、それらと関連している可能性があります。また、北勢地域で前回調査よりも実感が低くなっているのは、北勢地域での昨年8月の強盗殺人等事件や今年1月の工場爆発事故などが関連している可能性もあります。

図表2-2-5 地域や社会の状況についての実感割合（今回調査結果）（犯罪や事故が少なく、安全に暮らせている）



図表2-2-6 地域や社会の状況についての実感割合(第1回調査からの推移)(犯罪や事故が少なく、安全に暮らせている)



【備考】

- 1 『実感している』…「感じる」と「どちらかといえば感じる」の割合の合計
- 2 『実感していない』…「感じない」と「どちらかといえば感じない」の割合の合計
- 3 『実感している傾向が相対的に強い属性項目』…『実感している』割合が県全体に比べて高い、あるいは『実感していない』割合が低い属性項目（危険率5%未満で統計的に有意な差があるものを記載）
- 4 『実感している傾向が相対的に弱い属性項目』…『実感している』割合が県全体に比べて低い、あるいは『実感していない』割合が高い属性項目（危険率5%未満で統計的に有意な差があるものを記載）
- 5 『実感が高くなっている属性項目』…『実感している』割合が増加、あるいは『実感していない』割合が減少している属性項目(危険率5%未満で統計的に有意な差があるものを記載)
- 6 『実感が低くなっている属性項目』…『実感している』割合が減少、あるいは『実感していない』割合が増加している属性項目(危険率5%未満で統計的に有意な差があるものを記載)。
- 7 図表（第1回からの推移）中、()内は対前回差、< >内は対第1回差を記載。いずれも、危険率5%未満で統計的に有意な差があるものには下線を付けている。

4 必要な福祉サービスが利用できている（問2 - 4）

(1) 今回調査結果の概要（図表2-2-7 参照）

- 『実感している層』は33.3%、『実感していない層』は43.8%です。
- 『実感していない層』が『実感している層』より10.5ポイント高くなっています。
- 特徴のある属性項目は次のとおりです。（県全体に比べて統計的に有意な差がある属性項目）

実感している傾向が相対的に強い属性項目	実感している傾向が相対的に弱い属性項目
伊勢志摩、東紀州 60歳以上 農林水産業、学生、専業主婦、無職 三世帯世帯 0～100万円	20～50歳代 正規職員、パート・バイト・派遣 未婚 600～1000万円

(2) 第1回調査からの推移（図表2-2-8 参照）

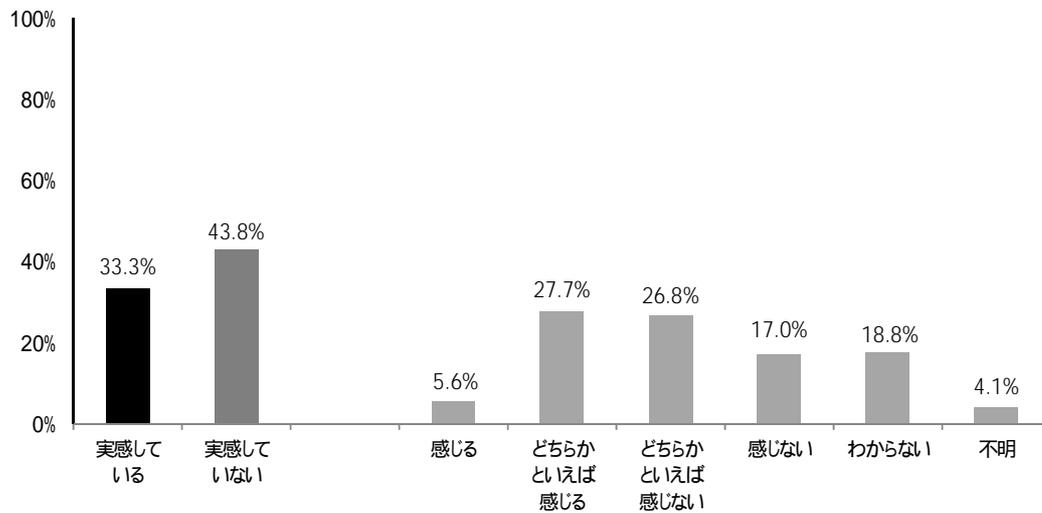
- 全体結果
 - ・ 第1回調査時よりも、実感が高くなっています。（『実感していない層』：-2.2ポイント）
- 属性別の傾向（統計的に有意な水準で増減があるもの）

実感が高くなっている属性項目		実感が低くなっている属性項目	
対前回調査	対第1回調査	対前回調査	対第1回調査
30代 正規職員 三世帯	伊勢志摩 男性 60代 無職 一世帯	70以上 農林水産業 一世帯	

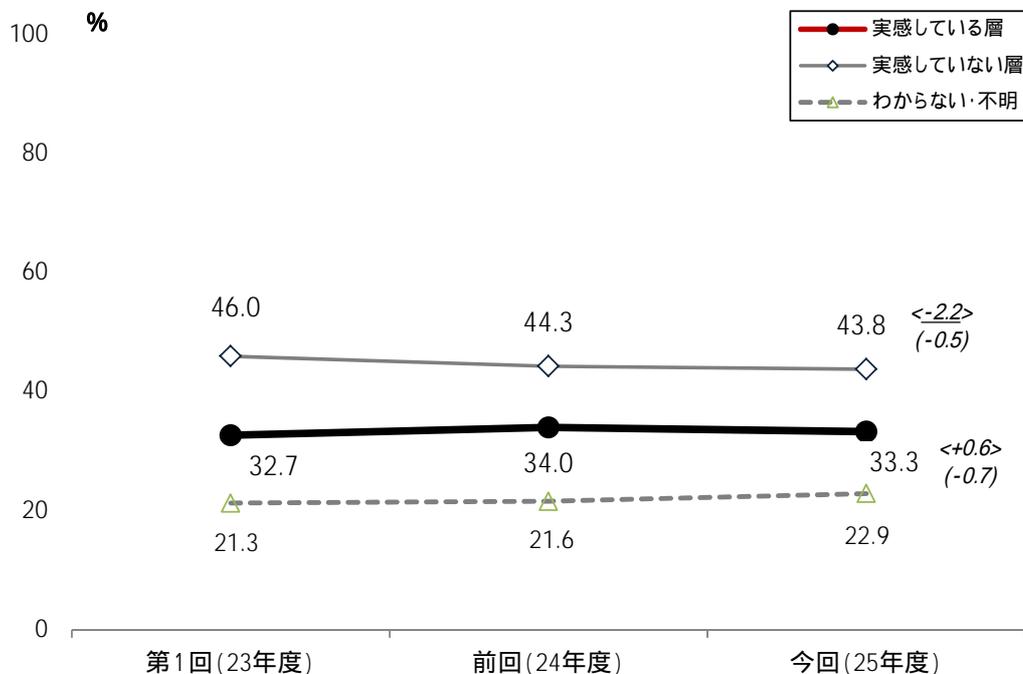
(3) 分析・考察

- ・ 県全体として、第1回調査時よりも実感が高くなっていますが、大きな変化はなく、実感していない層が実感している層を10ポイント程度上回っています。また、わからない・不明が3回とも2割強の比率となっています。
- ・ 属性別の特徴を見ると、福祉サービスの受け手が多く含まれると想定される60歳以上、無職、世帯収入100万円未満では実感している傾向が強くなっています。年齢別では、20～50歳代の幅広い年代で実感している傾向が弱くなっていますが、詳細に見ると、20～30歳代では、わからない・不明が3割程度と高くなっているのに対し、40～50歳では実感していない層が5割前後の高い比率となっています。
- ・ 60歳以上の高齢者、無職、世帯収入100万円未満の低所得者層において、県全体よりも相対的に実感が強くなっています。特に70歳以上、無職では実感している層が実感していない層を上回っており、現在、福祉サービスが必要かどうかで感じ方や回答の傾向が異なっている可能性があります。
- ・ 一方、40～50歳代では実感していない層が5割を超えているということは、介護サービスの現状に対する不満、将来に対する不安である可能性があります。
- ・ それらを踏まえると、現在、福祉サービスが必要な方に対して適切な対応を図ることに加えて、現時点では当事者ではない方に対しての不安解消や社会全体に福祉サービスに対する理解を求めるための啓発的な取組も考えられます。

図表2-2-7 地域や社会の状況についての実感割合（今回調査結果）（必要な福祉サービスが利用できている）



図表2-2-8 地域や社会の状況についての実感割合(第1回調査からの推移)(必要な福祉サービスが利用できている)



【備考】

- 『実感している』…「感じる」と「どちらかといえば感じる」の割合の合計
- 『実感していない』…「感じない」と「どちらかといえば感じない」の割合の合計
- 『実感している傾向が相対的に強い属性項目』…『実感している』割合が県全体に比べて高い、あるいは『実感していない』割合が低い属性項目（危険率5%未満で統計的に有意な差があるものを記載）
- 『実感している傾向が相対的に弱い属性項目』…『実感している』割合が県全体に比べて低い、あるいは『実感していない』割合が高い属性項目（危険率5%未満で統計的に有意な差があるものを記載）
- 『実感が高くなっている属性項目』…『実感している』割合が増加、あるいは『実感していない』割合が減少している属性項目(危険率5%未満で統計的に有意な差があるものを記載)
- 『実感が低くなっている属性項目』…『実感している』割合が減少、あるいは『実感していない』割合が増加している属性項目(危険率5%未満で統計的に有意な差があるものを記載)。
- 図表(第1回からの推移)中、()内は対前年差、< >内は対第1回差を記載。いずれも、危険率5%未満で統計的に有意な差があるものには下線を付けている。

5 身近な自然や環境を守る取組が広がっている（問2 - 5）

(1) 今回調査結果の概要（図表2-2-9 参照）

- 『実感している層』は28.4%、『実感していない層』は55.2%です。
16項目中、『実感している層』が3番目に低くなっています。
- 『実感していない層』が『実感している層』の割合より26.8ポイント高くなっています。
- 特徴のある属性項目は次のとおりです。（県全体に比べて統計的に有意な差がある属性項目）

実感している傾向が相対的に強い属性項目	実感している傾向が相対的に弱い属性項目
女性 70歳以上 学生、無職 離死別 0~100万円	男性 20歳代、40~60歳代 正規職員 未婚 単独世帯

(2) 第1回調査からの推移（図表2-2-10 参照）

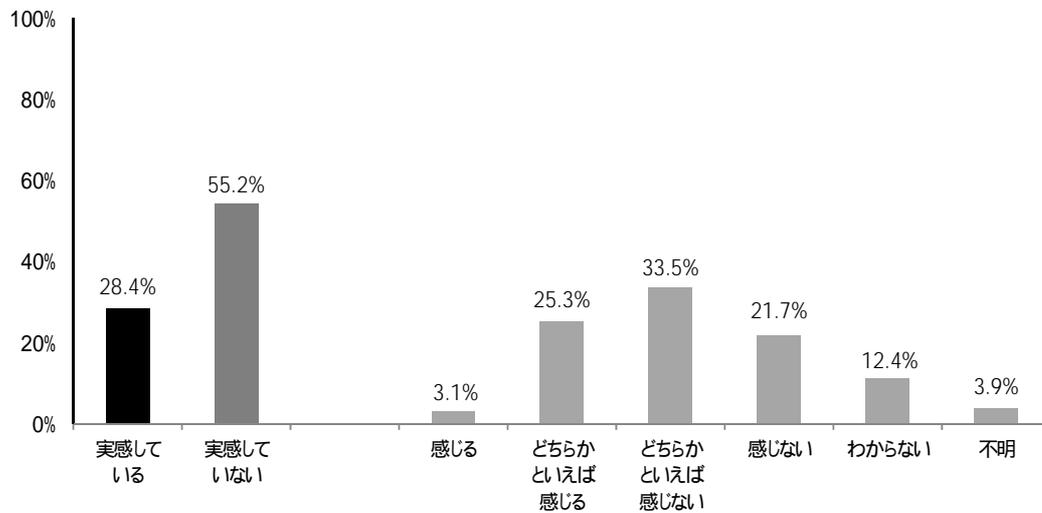
- 全体結果
 - ・ 前回調査時、第1回調査時との比較では、統計的に有意な差が認められません。
- 属性別の傾向（統計的に有意な水準で増減があるもの）

実感が高くなっている属性項目		実感が低くなっている属性項目	
対前回調査	対第1回調査	対前回調査	対第1回調査
北勢	北勢、東紀州 男性 30代、70以上 一世代	伊勢志摩 専業主婦	20代 三世代

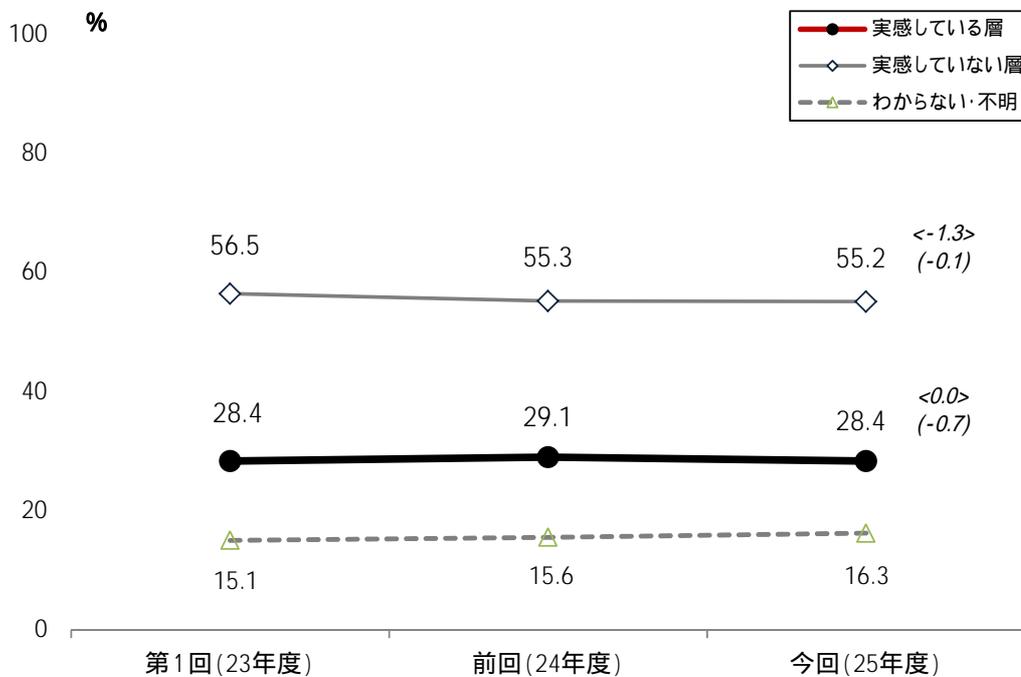
(3) 分析・考察

- ・ 第1回、前回、今回ともほぼ同様の結果であり、実感していない層が実感している層の倍程度となっています。
- ・ 属性別の特徴についても、他の指標でも見受けられる属性が多く、この指標の特徴ではない可能性があります。
- ・ 一方、「環境保全の活動への参加状況」とのクロス集計(84頁)では、実感している層の参加経験率が47.0%に対して、実感していない層の参加経験率は37.5%となっており、関係する活動への参加により実感が高くなる可能性があります。
- ・ より多くの県民が環境保全活動に参加していただけるよう、身近な環境や自然を守る取組に参加しやすい仕組みづくりなどの取組が考えられます。

図表2-2-9 地域や社会の状況についての実感割合（今回調査結果）（身近な自然や環境を守る取組が広がっている）



図表2-2-10 地域や社会の状況についての実感割合(第1回調査からの推移)(身近な自然や環境を守る取組が広がっている)



【備考】

- 1 『実感している』…「感じる」と「どちらかといえば感じる」の割合の合計
- 2 『実感していない』…「感じない」と「どちらかといえば感じない」の割合の合計
- 3 『実感している傾向が相対的に強い属性項目』…『実感している』割合が県全体に比べて高い、あるいは『実感していない』割合が低い属性項目（危険率5%未満で統計的に有意な差があるものを記載）
- 4 『実感している傾向が相対的に弱い属性項目』…『実感している』割合が県全体に比べて低い、あるいは『実感していない』割合が高い属性項目（危険率5%未満で統計的に有意な差があるものを記載）
- 5 『実感が高くなっている属性項目』…『実感している』割合が増加、あるいは『実感していない』割合が減少している属性項目(危険率5%未満で統計的に有意な差があるものを記載)
- 6 『実感が低くなっている属性項目』…『実感している』割合が減少、あるいは『実感していない』割合が増加している属性項目(危険率5%未満で統計的に有意な差があるものを記載)。
- 7 図表（第1回からの推移）中、（ ）内は対前回差、< >内は対第1回差を記載。いずれも、危険率5%未満で統計的に有意な差があるものには下線を付けている。

6 一人ひとりが尊重され、誰もが社会に参画できている（問2 - 6）

(1) 今回調査結果の概要（図表2-2-11 参照）

- 『実感している層』は21.2%、『実感していない層』は60.3%です。
16項目中、『実感している層』が2番目に低くなっています。
16項目中、『実感していない層』の割合が2番目に高くなっています。
- 『実感していない層』が『実感している層』より39.1ポイント高くなっています。
- 特徴のある属性項目は次のとおりです。（県全体に比べて統計的に有意な差がある属性項目）

実感している傾向が相対的に強い属性項目	実感している傾向が相対的に弱い属性項目
70歳以上 農林水産業、学生、無職 単独世帯 0～100万円、400～500万円	男性 50～60歳代 正規職員、パート・アルバイト派遣 離死別 300～400万円、600～800万円

(2) 第1回調査からの推移（図表2-2-12 参照）

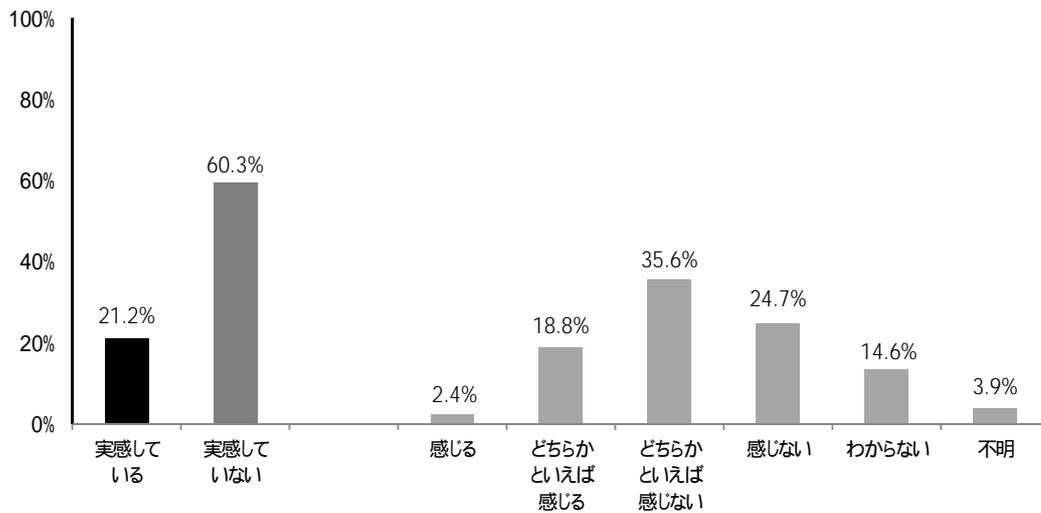
- 全体結果
 - ・ 第1回調査時よりも、実感が高くなっています。
（『実感している層』：+1.4ポイント、『実感していない層』：-3.0ポイント）
- 属性別の傾向（統計的に有意な水準で増減があるもの）

実感が高くなっている属性項目		実感が低くなっている属性項目	
対前回調査	対第1回調査	対前回調査	対第1回調査
北勢 男性 40代 学生 未婚 三世代	北勢 全性別 40代 正規、パート等 未婚、有配偶 単独、二世帯		三世代

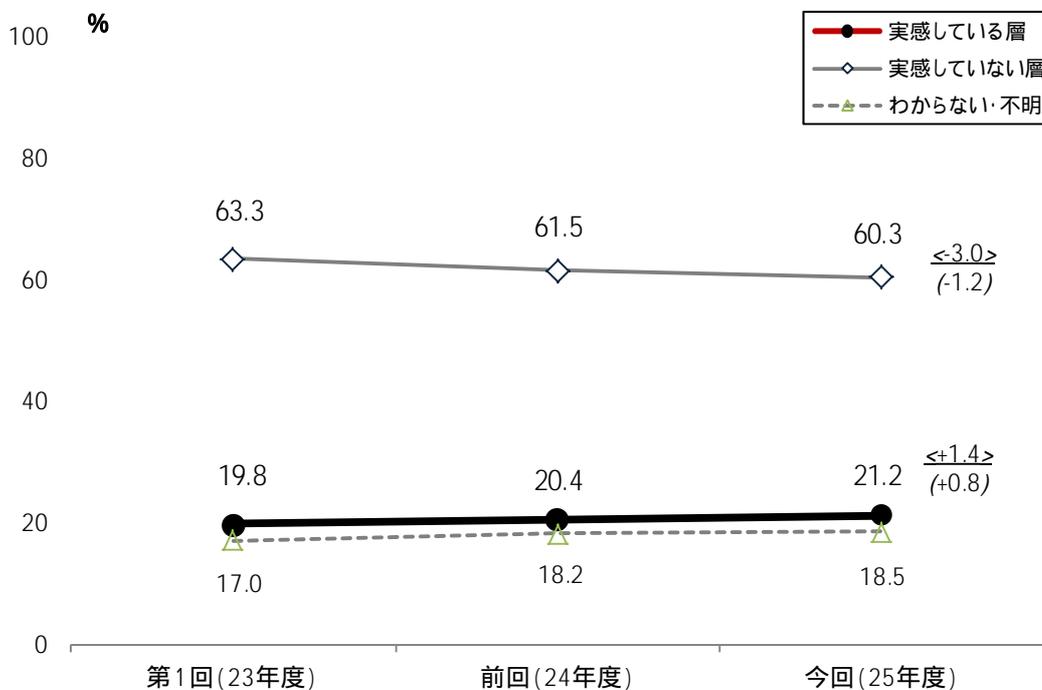
(3) 分析・考察

- ・ 県全体では、実感していない層が実感している層の3倍近くとなっていますが、第1回調査時よりも実感は高くなっています。
- ・ 第1回調査時からの推移を属性別に見ても、一定の属性項目で実感が高くなっており、実感が低くなっている属性項目はほとんどありません。
- ・ 他の幸福実感指標に比べると、回答者によって対象として想定する内容の幅が広く実感が低くなっている可能性もありますが、着実に実感は高くなっており、継続的な取組が必要と考えられます。

図表2-2-11 地域や社会の状況についての実感割合（今回調査結果）（一人ひとりが尊重され、誰もが社会に参画できている）



図表2-2-12 地域や社会の状況についての実感割合(第1回調査からの推移)(一人ひとりが尊重され、誰もが社会に参画できている)



【備考】

- 1 『実感している』…「感じる」と「どちらかといえば感じる」の割合の合計
- 2 『実感していない』…「感じない」と「どちらかといえば感じない」の割合の合計
- 3 『実感している傾向が相対的に強い属性項目』…『実感している』割合が県全体に比べて高い、あるいは『実感していない』割合が低い属性項目（危険率5%未満で統計的に有意な差があるものを記載）
- 4 『実感している傾向が相対的に弱い属性項目』…『実感している』割合が県全体に比べて低い、あるいは『実感していない』割合が高い属性項目（危険率5%未満で統計的に有意な差があるものを記載）
- 5 『実感が高くなっている属性項目』…『実感している』割合が増加、あるいは『実感していない』割合が減少している属性項目(危険率5%未満で統計的に有意な差があるものを記載)
- 6 『実感が低くなっている属性項目』…『実感している』割合が減少、あるいは『実感していない』割合が増加している属性項目(危険率5%未満で統計的に有意な差があるものを記載)。
- 7 図表(第1回からの推移)中、()内は対前年差、< >内は対第1回差を記載。いずれも、危険率5%未満で統計的に有意な差があるものには下線を付けている。

7 子どものためになる教育が行われている（問2 - 7）

(1) 今回調査結果の概要（図表2-2-13 参照）

- 『実感している層』は32.7%、『実感していない層』は44.0%です。
- 『実感していない層』が『実感している層』よりも11.3ポイント高くなっています。
- 特徴のある属性項目は次のとおりです。（県全体に比べて統計的に有意な差がある属性項目）

実感している傾向が相対的に強い属性項目	実感している傾向が相対的に弱い属性項目
女性 30～40歳代、70歳以上 農林水産業、専業主婦、無職 離死別 単独世帯(非実感層が低い)、二世帯世帯 0～100万円(非実感層が低い)、500～600万円、 800～1000万円	男性 20歳代、40～60歳代 自営業、正規職員、パート・アルバイト派遣 未婚 単独世帯(実感層が低い) 0～200万円(実感層が低い)、1000万円以上

(2) 第1回調査からの推移（図表2-2-14 参照）

- 全体結果
 - ・ 前回調査時よりも、実感が高くなっています。
 （『実感している層』：+3.8ポイント、『実感していない層』：-5.1ポイント）
 - ・ 第1回調査時よりも、実感が高くなっています。
 （『実感している層』：+5.0ポイント、『実感していない層』：-5.9ポイント）
- 属性別の傾向（統計的に有意な水準で増減があるもの）

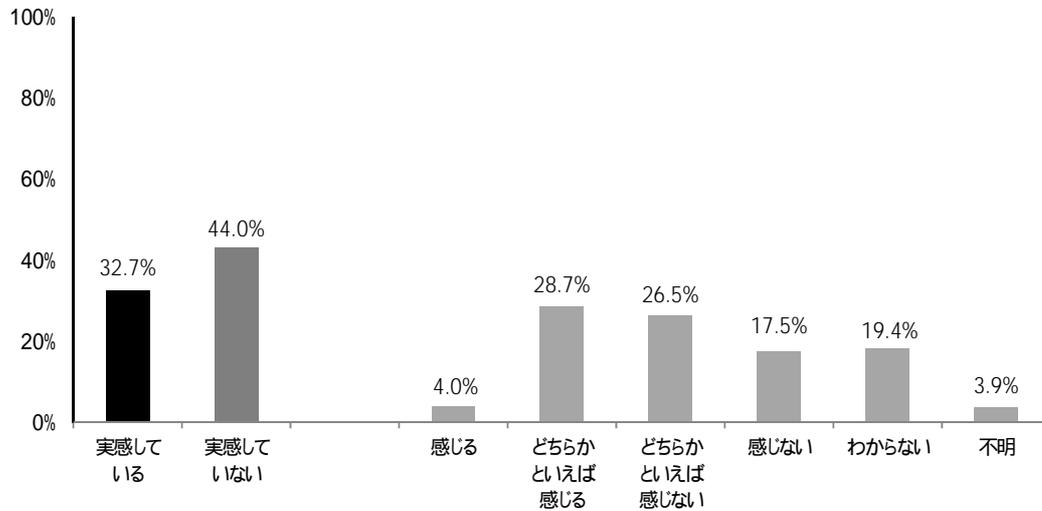
実感が高くなっている属性項目		実感が低くなっている属性項目	
対前回調査	対第1回調査	対前回調査	対第1回調査
北勢、中南勢、伊勢志摩 全性別 30～50代、70以上 正規、パート等、主婦、無職 全配偶関係 単独、二世帯、三世帯	北勢、中南勢、伊勢志摩 全性別 30以上 正規、パート等、無職 全配偶関係 単独、一世代、二世帯		

(3) 分析・考察

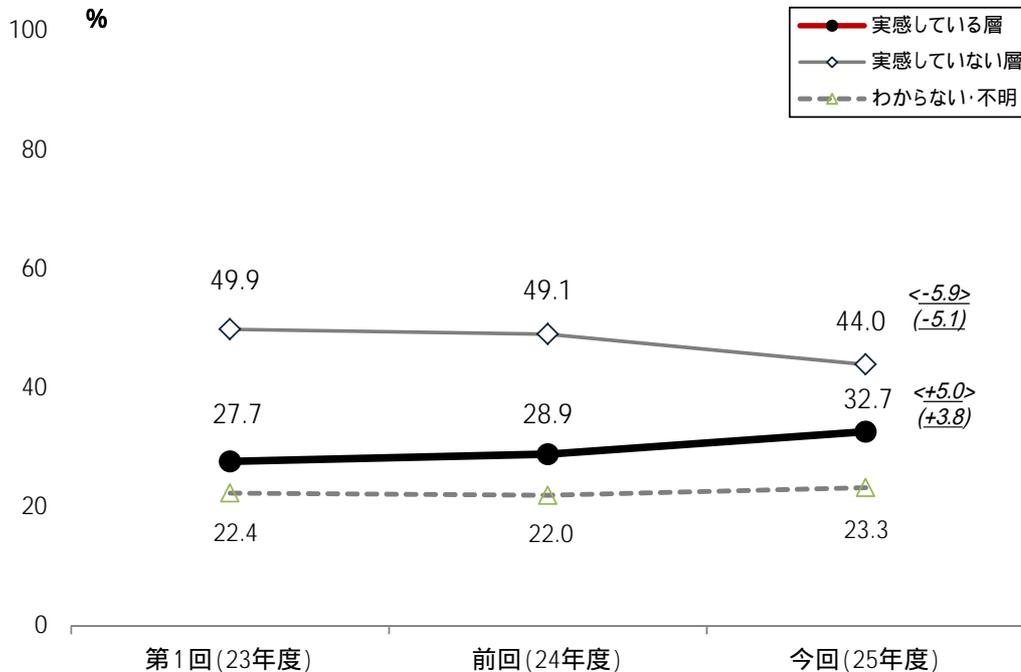
- ・ 第1回調査時、前回調査時よりも実感が高くなっており、実感している層と実感していない層の差は小さくなっています。第1回調査では実感していない層が実感している層を20ポイント以上上回っていましたが、今回調査での差は10ポイント強となっています。また、わからない・不明という回答が3回とも20%強となっています。
- ・ 属性別に第1回からの推移を見ると、多くの属性で実感が高まり、実感が低くなっている属性はありません。また、子どもが学校に在籍している方を対象に分析()すると、小学生、中学生、高校生いずれの区分でも、県全体より実感している層の割合が高くなっており、特に小学生では5割以上が実感している層となっています。
- ・ 県教育委員会が実施した「学校生活についてのアンケート（県内の公立小学校5年生、中学校2年生、高等学校2年生が対象）」において、学校に満足している子どもたちの割合が平成24年度の78.7%から平成25年度は80.4%と増加しており、このことが、実感が高くなった要因の一つと考えられます。
- ・ 実感している層が増加しているものの、実感していない層が実感している層を上回っているため、引き続き、学校・家庭・地域が一体となり、様々な主体による教育への取組を進めることが必要と考えられます。

- () 小学生の子がいる(実感:51.5%、非実感:40.3%) 中学生の子がいる(実感:46.0%、非実感:45.8%)
 高校生の子がいる(実感:36.7%、非実感:52.8%)

図表 2-2-13 地域や社会の状況についての実感割合（今回調査結果）（子どものためになる教育が行われている）



図表 2-2-14 地域や社会の状況についての実感割合(第1回調査からの推移)(子どものためになる教育が行われている)



【備考】

- 『実感している』…『感じる』と『どちらかといえば感じる』の割合の合計
- 『実感していない』…『感じない』と『どちらかといえば感じない』の割合の合計
- 『実感している傾向が相対的に強い属性項目』…『実感している』割合が県全体に比べて高い、あるいは『実感していない』割合が低い属性項目（危険率5%未満で統計的に有意な差があるものを記載）
- 『実感している傾向が相対的に弱い属性項目』…『実感している』割合が県全体に比べて低い、あるいは『実感していない』割合が高い属性項目（危険率5%未満で統計的に有意な差があるものを記載）
- 『実感が高くなっている属性項目』…『実感している』割合が増加、あるいは『実感していない』割合が減少している属性項目(危険率5%未満で統計的に有意な差があるものを記載)
- 『実感が低くなっている属性項目』…『実感している』割合が減少、あるいは『実感していない』割合が増加している属性項目(危険率5%未満で統計的に有意な差があるものを記載)。
- 図表（第1回からの推移）中、()内は対前回差、< >内は対第1回差を記載。いずれも、危険率5%未満で統計的に有意な差があるものには下線を付けている。

8 地域社会の見守りの中で、子どもが元気に育っている（問2 - 8）

(1) 今回調査結果の概要（図表2-2-15 参照）

- 『実感している層』は56.0%、『実感していない層』は27.7%です。
- 『実感している層』が『実感していない層』よりも28.3ポイント高くなっています。
- 特徴のある属性項目は次のとおりです。（県全体に比べて統計的に有意な差がある属性項目）

実感している傾向が相対的に強い属性項目	実感している傾向が相対的に弱い属性項目
女性 70歳以上 農林水産業、専業主婦、無職 有配偶、離死別 三世帯世帯 0～100万円(非実感層が低い)、400～500万円	男性 20歳代、50歳代 正規職員 未婚 単独世帯、二世帯世帯 0～100万円(実感層が低い)、600～800万円、 1000万円～

(2) 第1回調査からの推移（図表2-2-16 参照）

- 全体結果
 - ・ 前回調査時よりも、実感が高くなっています。
 （『実感している層』：+2.2ポイント、『実感していない層』：-3.1ポイント）
 - ・ 第1回調査時よりも、実感が高くなっています。
 （『実感している層』：+2.8ポイント、『実感していない層』：-3.8ポイント）
- 属性別の傾向（統計的に有意な水準で増減があるもの）

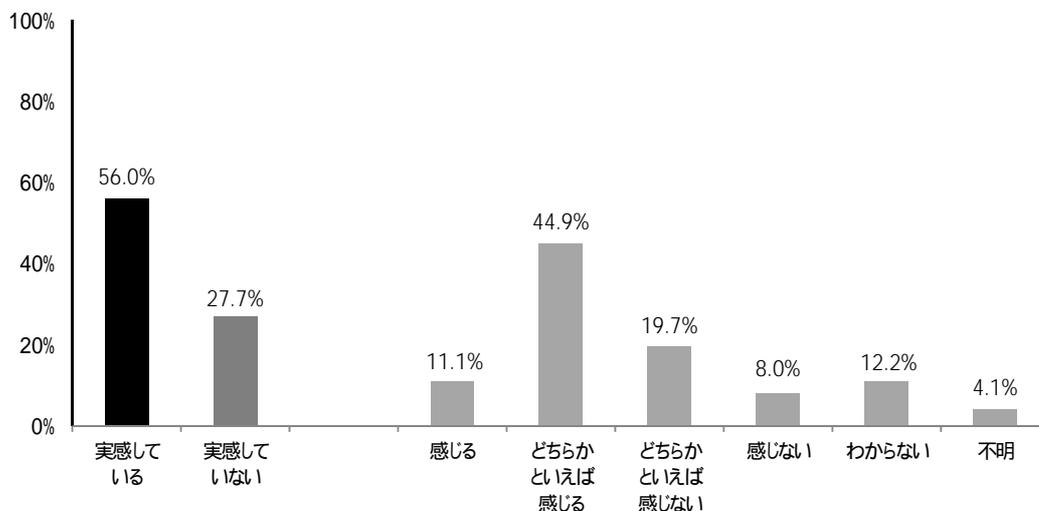
実感が高くなっている属性項目		実感が低くなっている属性項目	
対前回調査	対第1回調査	対前回調査	対第1回調査
北勢、中南勢 全性別 40～50代、70以上 農林水産、正規、無職 有配偶、離死別 一世代、二世帯、三世帯	北勢、中南勢 全性別 40以上 自営、正規、パート等、無職 有配偶、離死別 一世代、二世帯		学生

(3) 分析・考察

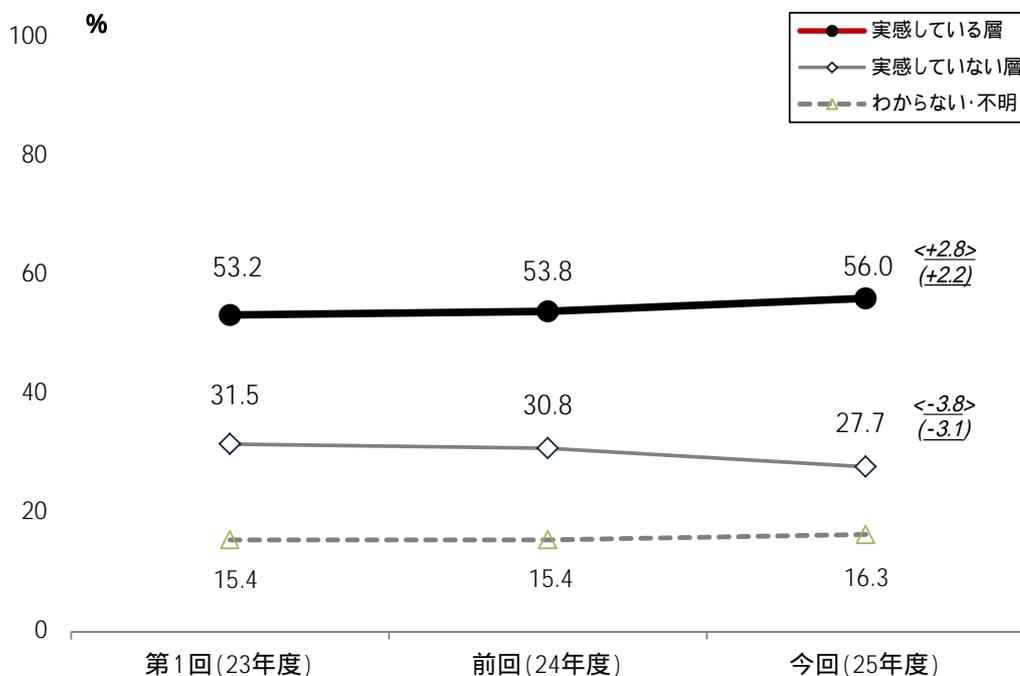
- ・ 第1回調査から実感している層が実感していない層を大きく上回っていましたが、今回調査では、第1回調査時、前回調査時よりも実感が高くなっており、県全体では、実感している層が実感していない層の倍程度となっています。
- ・ 属性別に見ても、第1回調査時、前回調査時よりも多くの属性で実感が高くなっています。
- ・ 今回調査結果における属性による特徴を見ると、男性、20歳代、50歳代、正規職員、単独世帯、未婚など地域社会との関わりが薄いと想定される層で実感している傾向が弱くなっている可能性があります。なお、子どもの有無による分析()では、就学前、小学生、中学生いずれにおいても県全体よりも実感している層の割合が高くなっています。
- ・ 子どもがいる方だけではなく幅広い層での実感を高めていくためにも、引き続き、少子化対策の総合的な推進、児童虐待防止対策の充実などに取り組むことは必要と考えられます。

() 就学前の子がいる(実感:64.4%、非実感:29.4%) 小学生の子がいる(実感:69.9%、非実感:25.2%)
 中学生の子がいる(実感:69.3%、非実感:26.6%)

図表 2-2-15 地域や社会の状況についての実感割合（今回調査結果）（地域社会の見守りの中で、子どもが元気に育っている）



図表 2-2-16 地域や社会の状況についての実感割合(第1回調査からの推移)(地域社会の見守りの中で、子どもが元気に育っている)



【備考】

- 『実感している』…「感じる」と「どちらかといえば感じる」の割合の合計
- 『実感していない』…「感じない」と「どちらかといえば感じない」の割合の合計
- 『実感している傾向が相対的に強い属性項目』…『実感している』割合が県全体に比べて高い、あるいは『実感していない』割合が低い属性項目（危険率5%未満で統計的に有意な差があるものを記載）
- 『実感している傾向が相対的に弱い属性項目』…『実感している』割合が県全体に比べて低い、あるいは『実感していない』割合が高い属性項目（危険率5%未満で統計的に有意な差があるものを記載）
- 『実感が高くなっている属性項目』…『実感している』割合が増加、あるいは『実感していない』割合が減少している属性項目（危険率5%未満で統計的に有意な差があるものを記載）
- 『実感が低くなっている属性項目』…『実感している』割合が減少、あるいは『実感していない』割合が増加している属性項目（危険率5%未満で統計的に有意な差があるものを記載）。
- 図表（第1回からの推移）中、（ ）内は対前年度差、< >内は対第1回差を記載。いずれも、危険率5%未満で統計的に有意な差があるものには下線を付けている。

9 スポーツを通じて夢や感動が育まれている（問2 - 9）

(1) 今回調査結果の概要（図表2-2-17 参照）

- 『実感している層』は58.2%、『実感していない層』は25.6%です。
16項目中、『実感していない層』が3番目に低くなっています。
- 『実感している層』が『実感していない層』より32.6ポイント高くなっています。
- 特徴のある属性項目は次のとおりです。（県全体に比べて統計的に有意な差がある属性項目）

実感している傾向が相対的に強い属性項目	実感している傾向が相対的に弱い属性項目
女性 20歳代、40歳代 正規職員(実感層が高い)、パート・アルバイト派遣、学生、専業主婦 二世帯世帯、三世帯世帯 500～1000万円	男性 60歳以上 正規職員(非実感層が高い)、無職 単独世帯 0～200万円

(2) 第1回調査からの推移（図表2-2-18 参照）

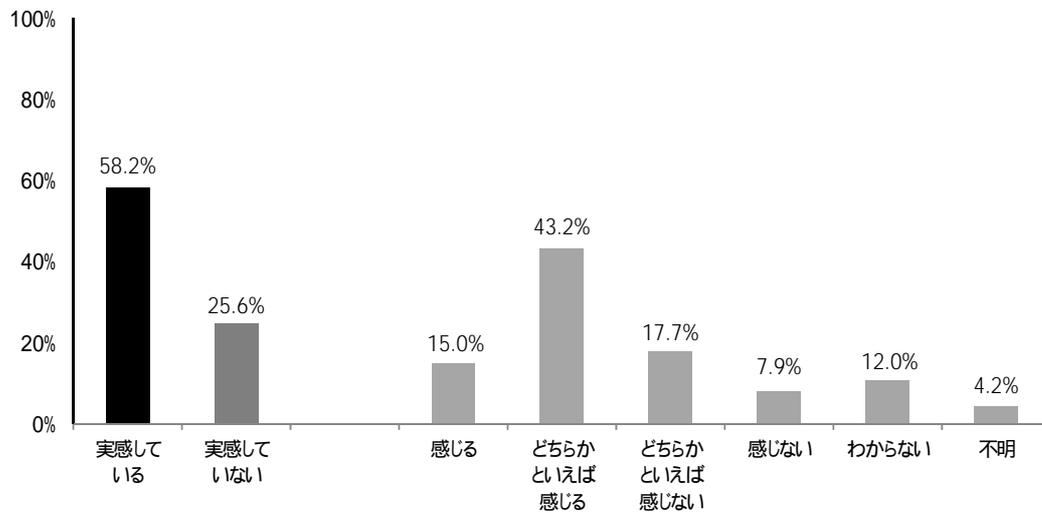
- 全体結果
 - ・ 第1回調査時よりも、実感が高くなっています。
（『実感している層』：+1.6ポイント、『実感していない層』：-3.1ポイント）
- 属性別の傾向（統計的に有意な水準で増減があるもの）

実感が高くなっている属性項目		実感が低くなっている属性項目	
対前回調査	対第1回調査	対前回調査	対第1回調査
40代 離死別 二世帯	北勢、伊賀、中南勢 全性別 40～60代 農林水産、パート等、主婦 有配偶、離死別 一世代、二世帯	自営	

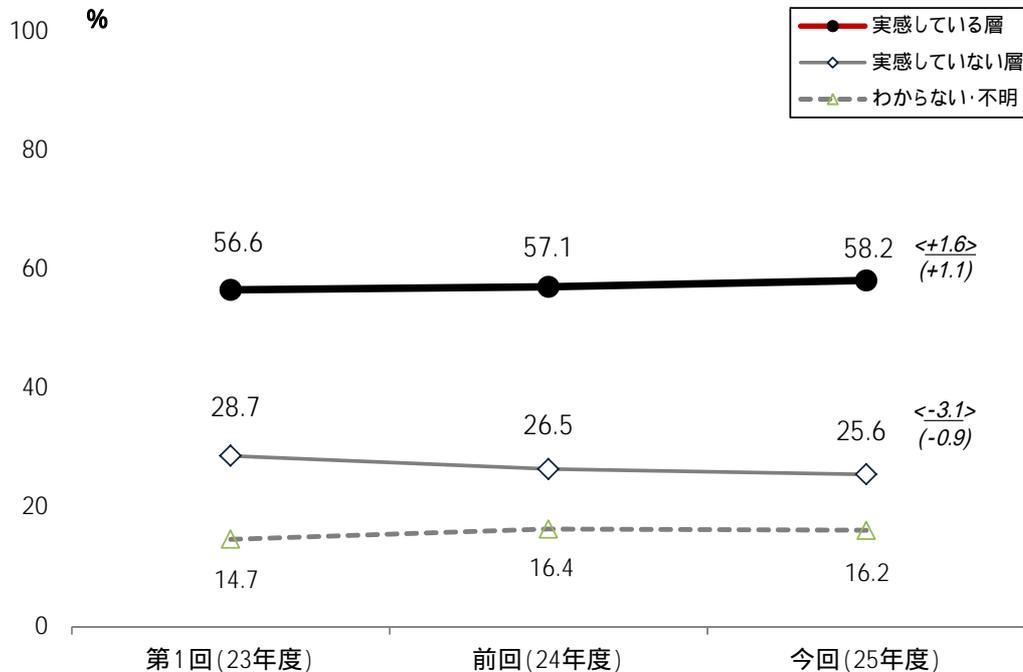
(3) 分析・考察

- ・ 県全体では、第1回調査、前回調査、今回調査とも実感している層が実感していない層を大きく上回っており、第1回調査よりも実感が高まっています。
- ・ 属性別に見ると、第1回調査よりも多くの属性で実感が高くなっています。また、年齢別では他の項目とは異なる傾向があり、若年層で実感している傾向が強く、高年齢層では弱くなっています。特に、20歳代では「感じる」が28.8%、学生では「感じる」が36.0%と高い割合になっています。
- ・ 若年層で実感している傾向が強いことについては、平成23年度社会生活基本調査におけるスポーツの行動者率についても年齢が高くなるにつれて概ね率が低下していること、また、「運動・スポーツ活動への参加状況」とのクロス集計（84頁）では、実感している層の参加経験率が43.8%に対して、実感していない層の参加経験率は33.3%となっていることから、実際にスポーツを実施しているかどうかの実感に影響している可能性があります。
- ・ 一方、東京オリンピック・パラリンピック競技大会開催決定（25年秋）などの全国的な状況や平成33年の国民体育大会及び全国障害者スポーツ大会の三重県開催に向けての動きなどにより、幅広い層で実感が高くなっている可能性があります。
- ・ これらのことから、スポーツを実践している人もしない人も含めて、スポーツを「する」「みる」「支える」といった取組を進めることは重要と考えられます。

図表2-2-17 地域や社会の状況についての実感割合（今回調査結果）（スポーツを通じて夢や感動が育まれている）



図表2-2-18 地域や社会の状況についての実感割合(第1回調査からの推移)(スポーツを通じて夢や感動が育まれている)



【備考】

- 1 『実感している』…「感じる」と「どちらかといえば感じる」の割合の合計
- 2 『実感していない』…「感じない」と「どちらかといえば感じない」の割合の合計
- 3 『実感している傾向が相対的に強い属性項目』…『実感している』割合が県全体に比べて高い、あるいは『実感していない』割合が低い属性項目（危険率5%未満で統計的に有意な差があるものを記載）
- 4 『実感している傾向が相対的に弱い属性項目』…『実感している』割合が県全体に比べて低い、あるいは『実感していない』割合が高い属性項目（危険率5%未満で統計的に有意な差があるものを記載）
- 5 『実感が高くなっている属性項目』…『実感している』割合が増加、あるいは『実感していない』割合が減少している属性項目(危険率5%未満で統計的に有意な差があるものを記載)
- 6 『実感が低くなっている属性項目』…『実感している』割合が減少、あるいは『実感していない』割合が増加している属性項目(危険率5%未満で統計的に有意な差があるものを記載)。
- 7 図表(第1回からの推移)中、()内は対前年差、< >内は対第1回差を記載。いずれも、危険率5%未満で統計的に有意な差があるものには下線を付けている。

10 自分の住んでいる地域に愛着があり、今後も住み続けたい(問2-10)

(1) 今回調査結果の概要(図表2-2-19参照)

- 『実感している層』は72.4%、『実感していない層』は18.6%です。
16項目中、『実感している層』の割合が2番目に高くなっています。
16項目中、『実感していない層』の割合が2番目に低くなっています。
- 『実感している層』が『実感していない層』よりも53.8ポイント高くなっています。
- 特徴のある属性項目は次のとおりです。(県全体に比べて統計的に有意な差がある属性項目)

実感している傾向が相対的に強い属性項目	実感している傾向が相対的に弱い属性項目
男性 70歳以上 農林水産業、正規職員、無職 三世帯世帯 1000万円~	20歳代、50歳代 パート・バイト・派遣、専業主婦 単独世帯 0~200万円

(2) 第1回調査からの推移(図表2-2-20参照)

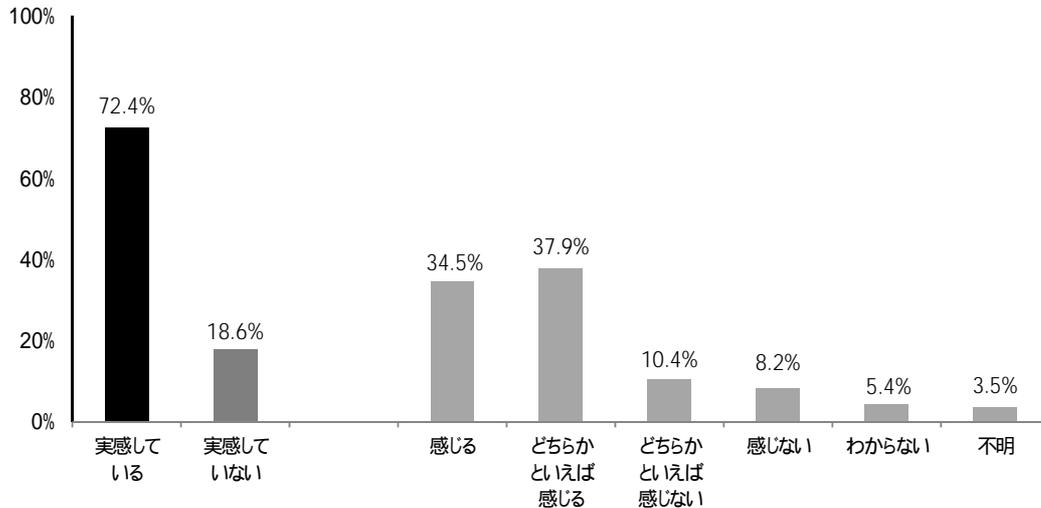
- 全体結果
 - ・ 前回調査時、第1回調査時との比較では、統計的に有意な差が認められません。
- 属性別の傾向(統計的に有意な水準で増減があるもの)

実感が高くなっている属性項目		実感が低くなっている属性項目	
対前回調査	対第1回調査	対前回調査	対第1回調査
	女性 40代	東紀州 20代 主婦	20代 三世帯

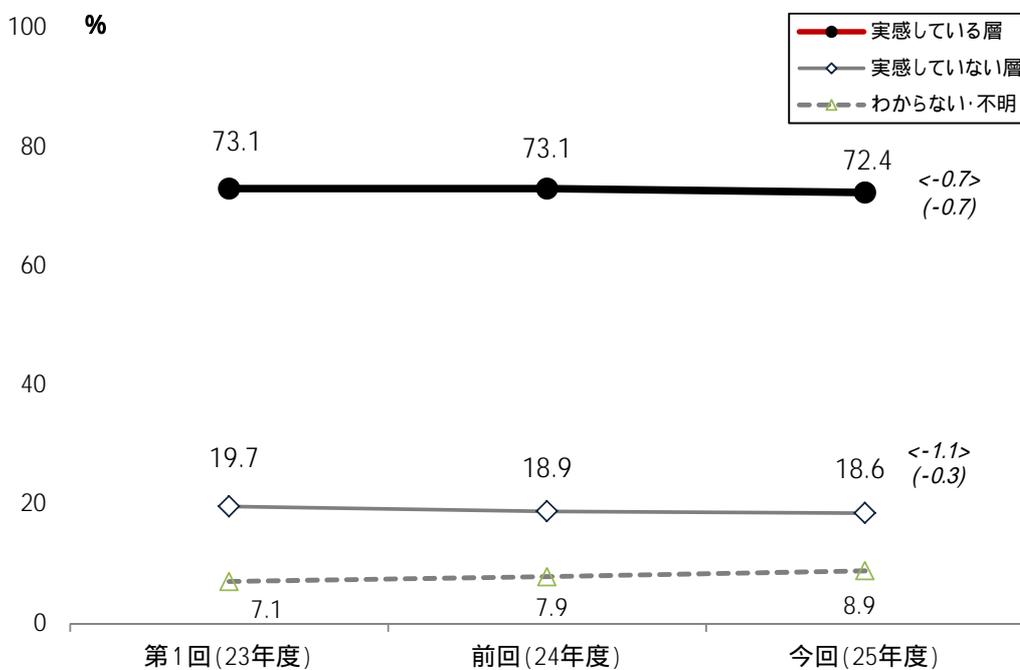
(3) 分析・考察

- ・ 第1回調査、前回調査、今回調査とも県全体では実感している層が7割以上であり、実感していない層の4倍近い割合となっており、その傾向に変化はありません。
- ・ 属性別に見ると、実感の強弱や実感が低くなっている属性がありますが、割合としては最低でも6割代後半となっています。また、「地域の住みやすさ」についての回答を属性別に見ると、男性、正規職員の肯定的回答の割合が高い、単独世帯、200万円未満の肯定的回答の割合が低い、など傾向が似通っている部分もありますが、年齢や地域などについては、異なる傾向となっています(83頁)。
- ・ 一方、「まちづくり、地域振興の活動への参加状況」とのクロス集計(83頁)では、実感している層の参加経験率が51.0%に対して、実感していない層の参加経験率は37.5%となっており、関係する活動への参加により実感が高くなる可能性があります。
- ・ これらのことから、住みやすい地域づくりに加えて、実際にまちづくりなどの活動への参画を支援していく取組も考えられます。

図表 2-2-19 地域や社会の状況についての実感割合(今回調査結果)(自分の住んでいる地域に愛着があり、今後も住み続けたい)



図表 2-2-20 地域や社会の状況についての実感割合(第1回調査からの推移)(自分の住んでいる地域に愛着があり、今後も住み続けたい)



【備考】

- 『実感している』…『感じる』と『どちらかといえば感じる』の割合の合計
- 『実感していない』…『感じない』と『どちらかといえば感じない』の割合の合計
- 『実感している傾向が相対的に強い属性項目』…『実感している』割合が県全体に比べて高い、あるいは『実感していない』割合が低い属性項目(危険率5%未満で統計的に有意な差があるものを記載)
- 『実感している傾向が相対的に弱い属性項目』…『実感している』割合が県全体に比べて低い、あるいは『実感していない』割合が高い属性項目(危険率5%未満で統計的に有意な差があるものを記載)
- 『実感が高くなっている属性項目』…『実感している』割合が増加、あるいは『実感していない』割合が減少している属性項目(危険率5%未満で統計的に有意な差があるものを記載)
- 『実感が低くなっている属性項目』…『実感している』割合が減少、あるいは『実感していない』割合が増加している属性項目(危険率5%未満で統計的に有意な差があるものを記載)。
- 図表(第1回からの推移)中、()内は対前回差、< >内は対第1回差を記載。いずれも、危険率5%未満で統計的に有意な差があるものには下線を付けている。

1.1 文化芸術や地域の歴史等について、学び親しむことができる（問2 - 1.1）

(1) 今回調査結果の概要（図表2-2-21 参照）

- 『実感している層』は37.1%、『実感していない層』は46.1%です。
- 『実感していない層』が『実感している層』よりも9.0ポイント高くなっています。
- 特徴のある属性項目は次のとおりです。（県全体に比べて統計的に有意な差がある属性項目）

実感している傾向が相対的に強い属性項目	実感している傾向が相対的に弱い属性項目
伊勢志摩 女性 70歳以上 学生、専業主婦、無職 離死別 単独世帯 0～100万円	北勢 男性 20歳代、40～50歳代 正規職員 二世帯世帯 100～200万円、600万円～

(2) 第1回調査からの推移（図表2-2-22 参照）

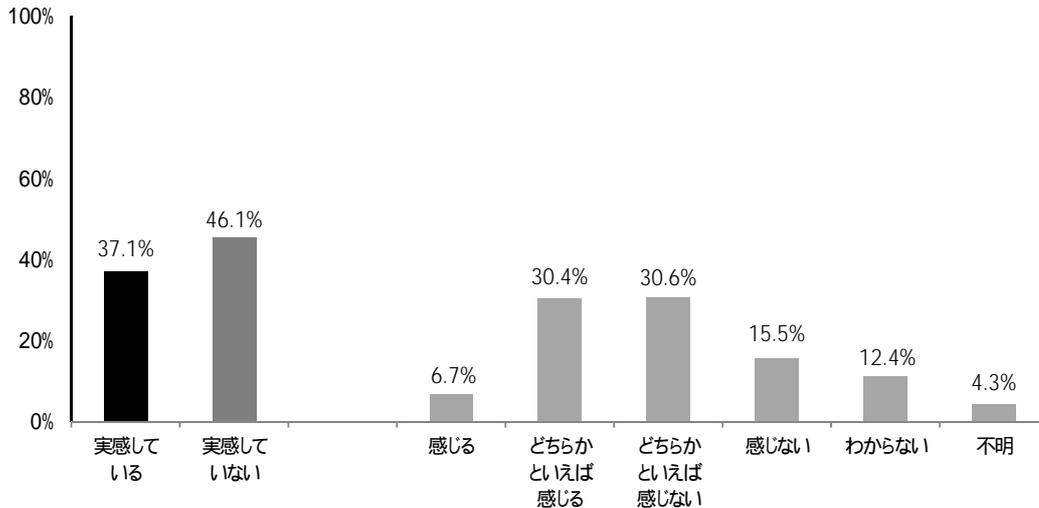
- 全体結果
 - ・ 第1回調査時よりも、実感が高くなっています。
（『実感している層』：+2.3ポイント、『実感していない層』：-3.0ポイント）
- 属性別の傾向（統計的に有意な水準で増減があるもの）

実感が高くなっている属性項目		実感が低くなっている属性項目	
対前回調査	対第1回調査	対前回調査	対第1回調査
女性 30代	北勢、伊賀、伊勢志摩 女性 30代、50代 正規、パート等、学生、主婦、 無職 有配偶 一世代、二世代	中南勢	

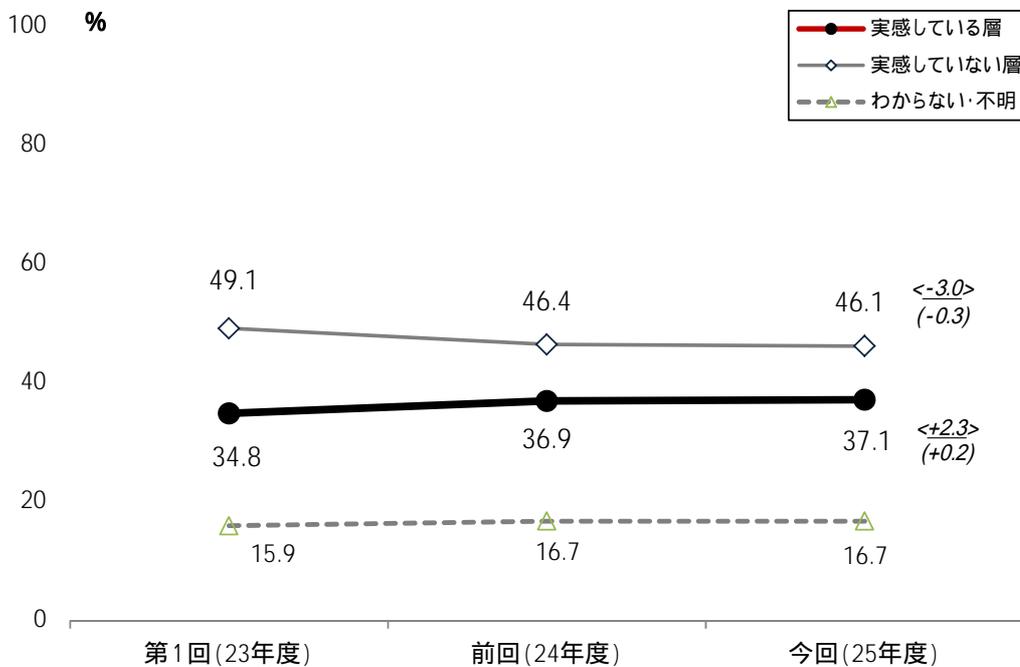
(3) 分析・考察

- ・ 県全体では、実感していない層が実感している層を上回っていますが、第1回調査時よりも実感が高くなっており、その差は第1回調査での15ポイント弱から10ポイント弱に縮まっています。
- ・ 属性別に見ると、地域、性別、年齢、職業などで実感の違いが見られますが、第1回調査時よりは多くの属性で実感が高まっています。
- ・ また、「文化芸術・趣味・娯楽活動への参加状況」とのクロス集計（84頁）では、実感している層の参加経験率が42.4%に対して、実感していない層の参加経験率は25.7%となっており、関係する活動への参加により実感が高くなる可能性があります。
- ・ 実感している層の割合が高くなるなど、一定の進捗は見られますが、北勢地域や20歳代、40～50歳代で相対的に実感している傾向が弱いことから、新たに開館した三重県総合博物館を活用するなど、様々な地域や年齢層を対象として、文化芸術や地域の歴史にふれる機会を得られるような取組も考えられます。

図表 2-2-21 地域や社会の状況についての実感割合(今回調査結果)(文化芸術や地域の歴史等について、学び親しむことができる)



図表 2-2-22 地域や社会の状況についての実感割合(第1回調査からの推移)(文化芸術や地域の歴史等について、学び親しむことができる)



【備考】

- 『実感している』…『感じる』と『どちらかといえば感じる』の割合の合計
- 『実感していない』…『感じない』と『どちらかといえば感じない』の割合の合計
- 『実感している傾向が相対的に強い属性項目』…『実感している』割合が県全体に比べて高い、あるいは『実感していない』割合が低い属性項目(危険率5%未満で統計的に有意な差があるものを記載)
- 『実感している傾向が相対的に弱い属性項目』…『実感している』割合が県全体に比べて低い、あるいは『実感していない』割合が高い属性項目(危険率5%未満で統計的に有意な差があるものを記載)
- 『実感が高くなっている属性項目』…『実感している』割合が増加、あるいは『実感していない』割合が減少している属性項目(危険率5%未満で統計的に有意な差があるものを記載)
- 『実感が低くなっている属性項目』…『実感している』割合が減少、あるいは『実感していない』割合が増加している属性項目(危険率5%未満で統計的に有意な差があるものを記載)。
- 図表(第1回からの推移)中、()内は対前回差、< >内は対第1回差を記載。いずれも、危険率5%未満で統計的に有意な差があるものには下線を付けている。

1.2 三重県産の農林水産物を買いたい(問2-12)

(1) 今回調査結果の概要(図表2-2-23参照)

- 『実感している層』は85.6%、『実感していない層』は7.6%です。
16項目中、『実感している層』の割合が最も高くなっています。
16項目中、『実感していない層』の割合が最も低くなっています。
- 『実感している層』が『実感していない層』より78.0ポイント高くなっています。
- 特徴のある属性項目は次のとおりです。(県全体に比べて統計的に有意な差がある属性項目)

実感している傾向が相対的に強い属性項目	実感している傾向が相対的に弱い属性項目
中南勢、伊勢志摩 女性 40歳代 正規職員、パート・アルバイト派遣、専業主婦 有配偶 二世帯世帯、三世帯世帯 300万円～	伊賀 男性 70歳以上 自営業、無職 離死別 単独世帯 0～200万円

(2) 第1回調査からの推移(図表2-2-24参照)

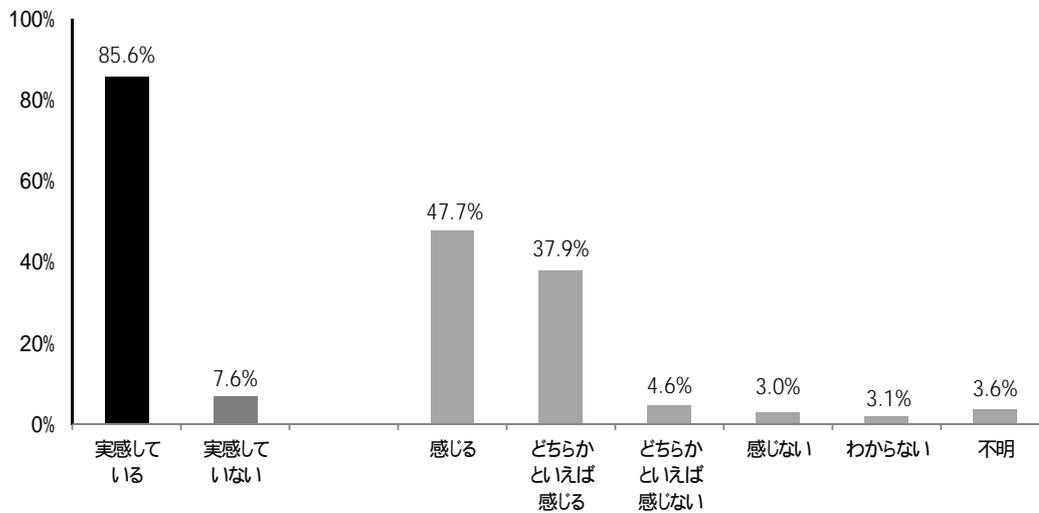
- 全体結果
 - ・ 第1回調査時よりも、実感が低くなっています。
(『実感している層』: -1.8ポイント)
- 属性別の傾向(統計的に有意な水準で増減があるもの)

実感が高くなっている属性項目		実感が低くなっている属性項目	
対前回調査	対第1回調査	対前回調査	対第1回調査
正規 三世帯	中南勢	伊賀 女性 農林水産、自営、主婦 有配偶	北勢、伊賀 全性別 20代、50代、70以上 農林水産、自営

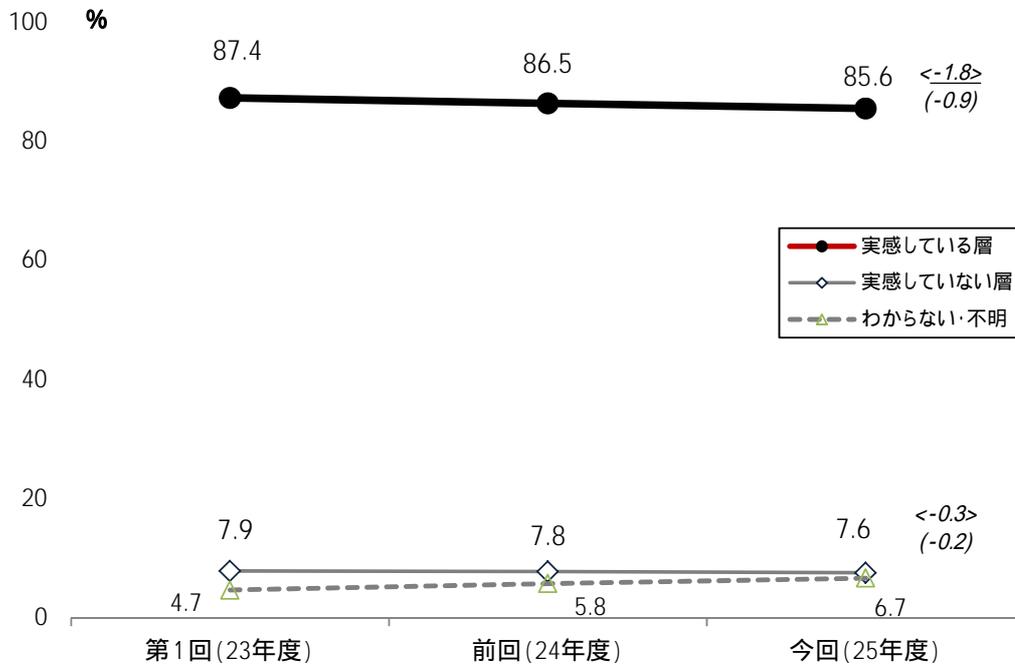
(3) 分析・考察

- ・ 第1回調査時よりも実感が低くなっていますが、第1回から第3回まで実感している層の割合が8割以上、実感していない層の割合が1割未満であり、16項目中で実感している割合が最も高く、実感していない割合が最も低くなっています。
- ・ 属性別に見ると、地域、性別、世帯年収などによる違いは見られますが、大半の属性項目で実感している層の割合が8割を超えています。実感している層の割合が7割台となっている属性は、世帯収入200万円未満、単独世帯のみであり、食材の購入にあたり、金額をより重視している可能性があります。
- ・ 8割を超える高い実感を維持向上させていくためにも、引き続き、安全安心な三重県産の農林水産物を県民の皆さんに安定的に供給できるように取り組むとともに、県民の皆さんのニーズに応えた商品の開発や情報発信の強化などに取り組んでいくことが必要と考えられます。

図表2-2-23 地域や社会の状況についての実感割合（今回調査結果）（三重県産の農林水産物を買いたい）



図表2-2-24 地域や社会の状況についての実感割合(第1回調査からの推移)（三重県産の農林水産物を買いたい）



【備考】

- 1 『実感している』…「感じる」と「どちらかといえば感じる」の割合の合計
- 2 『実感していない』…「感じない」と「どちらかといえば感じない」の割合の合計
- 3 『実感している傾向が相対的に強い属性項目』…『実感している』割合が県全体に比べて高い、あるいは『実感していない』割合が低い属性項目（危険率5%未満で統計的に有意な差があるものを記載）
- 4 『実感している傾向が相対的に弱い属性項目』…『実感している』割合が県全体に比べて低い、あるいは『実感していない』割合が高い属性項目（危険率5%未満で統計的に有意な差があるものを記載）
- 5 『実感が高くなっている属性項目』…『実感している』割合が増加、あるいは『実感していない』割合が減少している属性項目（危険率5%未満で統計的に有意な差があるものを記載）
- 6 『実感が低くなっている属性項目』…『実感している』割合が減少、あるいは『実感していない』割合が増加している属性項目（危険率5%未満で統計的に有意な差があるものを記載）。
- 7 図表（第1回からの推移）中、（ ）内は対前回差、< >内は対第1回差を記載。いずれも、危険率5%未満で統計的に有意な差があるものには下線を付けている。

1.3 県内の産業活動が活発である（問2 - 13）

(1) 今回調査結果の概要（図表2-2-25 参照）

- 『実感している層』は34.9%、『実感していない層』は45.5%です。
- 『実感していない層』が『実感している層』よりも10.6ポイント高くなっています。
- 特徴のある属性項目は次のとおりです。（県全体に比べて統計的に有意な差がある属性項目）

実感している傾向が相対的に強い属性項目	実感している傾向が相対的に弱い属性項目
北勢 女性 70歳以上 専業主婦、無職 0～100万円、400～500万円、600～800万円	伊賀、中南勢、伊勢志摩、東紀州 男性 50～60歳代 正規職員 100～200万円

(2) 第1回調査からの推移（図表2-2-26 参照）

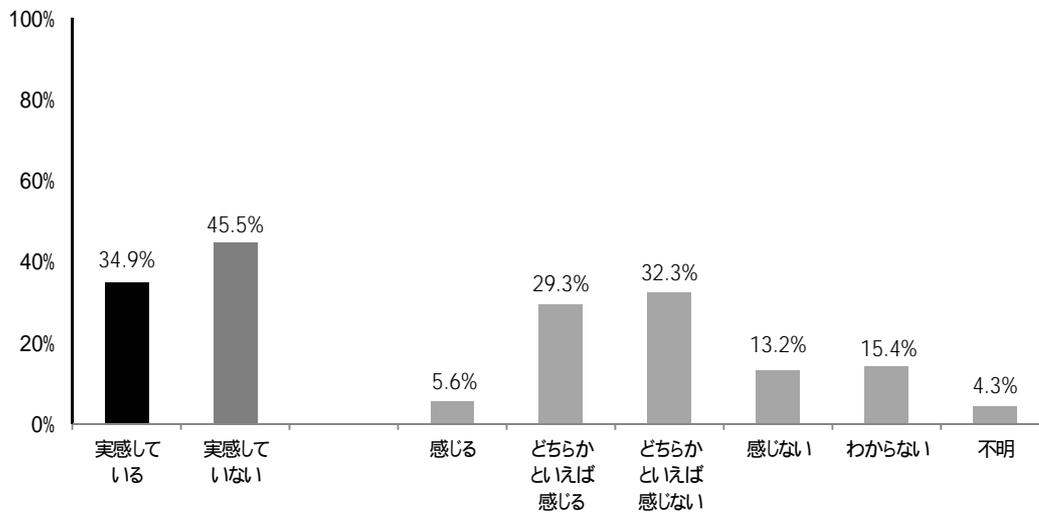
- 全体結果
 - ・ 前回調査時よりも、実感が高くなっています。
（『実感している層』：+6.3ポイント、『実感していない層』：-6.7ポイント）
 - ・ 第1回調査時よりも、実感が高くなっています。
（『実感している層』：+7.1ポイント、『実感していない層』：-8.6ポイント）
- 属性別の傾向（統計的に有意な水準で増減があるもの）

実感が高くなっている属性項目		実感が低くなっている属性項目	
対前回調査	対第1回調査	対前回調査	対第1回調査
北勢、中南勢、伊勢志摩	東紀州除く各地域		
全性別	全性別		
全年齢層	全年齢層		
全職業	農林水産除く各職業		
全配偶関係	全配偶関係		
全世帯類型	全世帯類型		

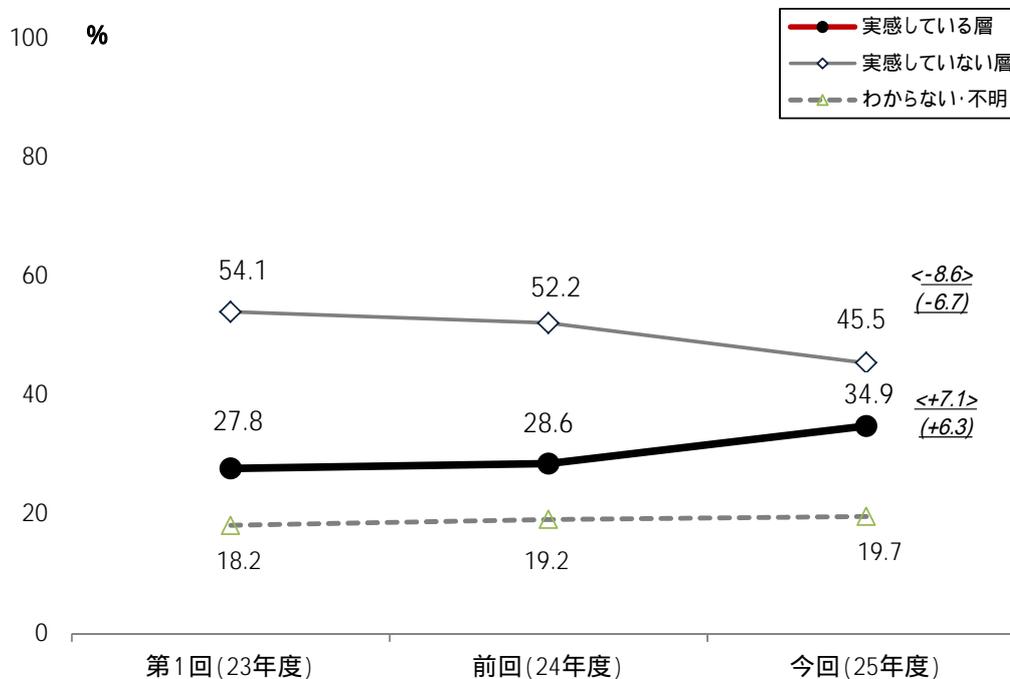
(3) 分析・考察

- ・ 県全体では第1回調査時、前回調査時よりも実感が高くなり、依然として実感していない層が実感している層を上回っているものの、その差は第1回調査の25ポイント程度から10ポイント強まで縮まっています。
- ・ 属性別に見ると、北勢地域で実感している傾向が強く、それ以外の地域との実感の差が見られます。また、第1回調査時、前回調査時よりもほとんどの属性で実感が高くなっていますが、東紀州地域は実感が高くなっておらず、伊賀地域は前回調査時よりも実感が高くなっていません。
- ・ 県全体では、平成25年度の県内への企業誘致件数が65件と、過去4年間の実績に比べて大きく増加するなどの成果が影響している可能性があります。
- ・ 今後、実感の高まりが県内全ての地域に広がるようにするため、県内企業の大半を占め、地域の経済や暮らしを支え、コミュニティの中核的役割を担っている中小企業・小規模企業に対してきめ細かな支援を行い、県民生活の向上や産業の活性化につなげていく必要があると考えられます。
- ・ また、20歳代、学生については、実感が高くはなっていますが、他の年齢階層や職業に比べて伸びが鈍い傾向にあり、本県の将来を担う若者に県内産業の魅力をより一層伝えていく必要があると考えられます。

図表2-2-25 地域や社会の状況についての実感割合（今回調査結果）（県内の産業活動が活発である）



図表2-2-26 地域や社会の状況についての実感割合(第1回調査からの推移)（県内の産業活動が活発である）



【備考】

- 『実感している』…『感じる』と『どちらかといえば感じる』の割合の合計
- 『実感していない』…『感じない』と『どちらかといえば感じない』の割合の合計
- 『実感している傾向が相対的に強い属性項目』…『実感している』割合が県全体に比べて高い、あるいは『実感していない』割合が低い属性項目（危険率5%未満で統計的に有意な差があるものを記載）
- 『実感している傾向が相対的に弱い属性項目』…『実感している』割合が県全体に比べて低い、あるいは『実感していない』割合が高い属性項目（危険率5%未満で統計的に有意な差があるものを記載）
- 『実感が高くなっている属性項目』…『実感している』割合が増加、あるいは『実感していない』割合が減少している属性項目（危険率5%未満で統計的に有意な差があるものを記載）
- 『実感が低くなっている属性項目』…『実感している』割合が減少、あるいは『実感していない』割合が増加している属性項目（危険率5%未満で統計的に有意な差があるものを記載）。
- 図表（第1回からの推移）中、（ ）内は対前年度差、< >内は対第1回差を記載。いずれも、危険率5%未満で統計的に有意な差があるものには下線を付けている。

1.4 働きたい人が仕事に就き、必要な収入を得ている（問2 - 14）

(1) 今回調査結果の概要（図表2-2-27 参照）

- 『実感している層』は18.5%、『実感していない層』は65.2%です。
16項目中、『実感している層』が最も低くなっています。
16項目中、『実感していない層』が最も高くなっています。
- 『実感していない層』が『実感している層』よりも46.7ポイント高くなっています。
- 特徴のある属性項目は次のとおりです。（県全体に比べて統計的に有意な差がある属性項目）

実感している傾向が相対的に強い属性項目	実感している傾向が相対的に弱い属性項目
北勢 女性 30歳代、70歳以上 農林水産業、正規職員(実感層が高い)、無職	伊賀、伊勢志摩、東紀州 男性 50～60歳代 正規職員(非実感層が高い)、パート・バイト・派遣、専業主婦
離死別 単独世帯 0～100万円、600万円～	二世帯世帯 100～300万円、400～500万円

(2) 第1回調査からの推移（図表2-2-28 参照）

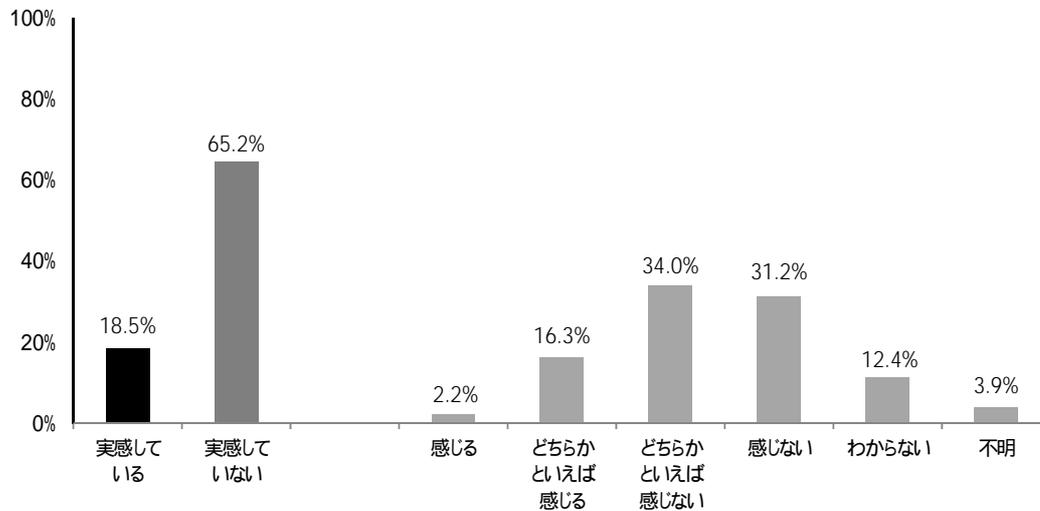
- 全体結果
 - ・ 前回調査時よりも、実感が高くなっています。
（『実感している層』：+3.2ポイント、『実感していない層』：-4.6ポイント）
 - ・ 第1回調査時よりも、実感が高くなっています。
（『実感している層』：+4.8ポイント、『実感していない層』：-7.5ポイント）
- 属性別の傾向（統計的に有意な水準で増減があるもの）

実感が高くなっている属性項目		実感が低くなっている属性項目	
対前回調査	対第1回調査	対前回調査	対第1回調査
北勢、中南勢、伊勢志摩 全性別 30～50代 正規、パート等、無職	東紀州除く各地域 全性別 30以上 自営、正規、パート等、主婦、無職		
未婚、有配偶 全世帯類型	全配偶関係 全世帯類型		

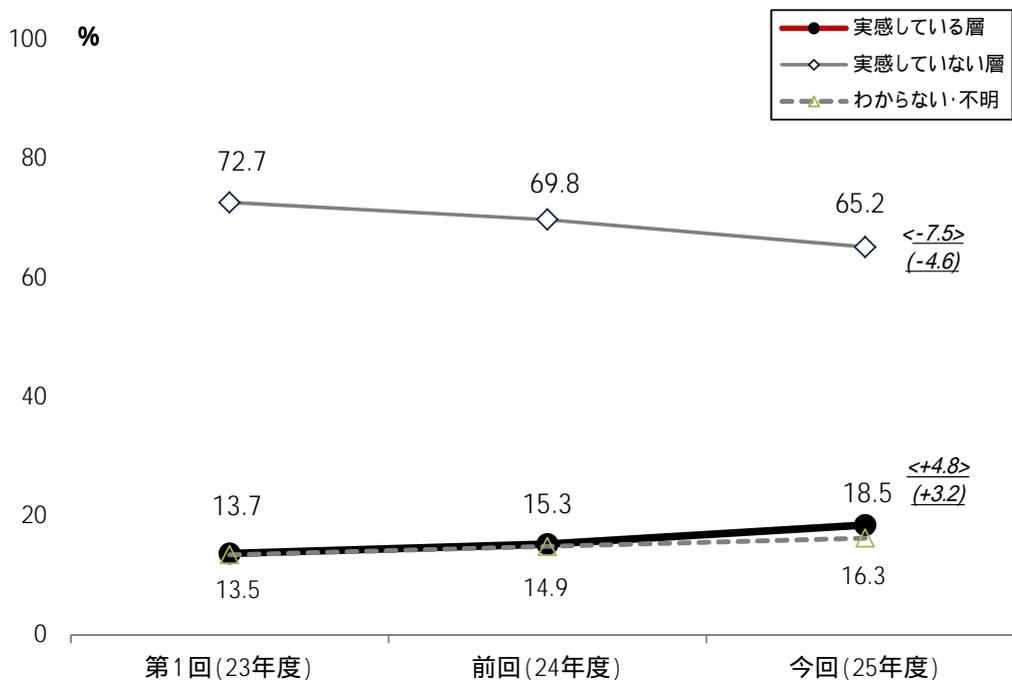
(3) 分析・考察

- ・ 第1回調査時、前回調査時よりも県全体で実感が高くなっていますが、実感していない層が実感している層の3.5倍程度と大きく上回っています。
- ・ 属性別に見ると、全体と同様に多くの属性で第1回調査時、前回調査時よりも実感が高くなっており、職業別では、正規職員、パート・バイト・派遣社員など、雇用労働者の実感が前回調査時よりも高くなっています。一方、地域別では、北勢地域の実感が強く、それ以外の地域との差があり、第1回調査時、前回調査時からの推移を見ても、東紀州地域では実感が高くなっていません。
- ・ 地域別の実感の傾向を見ると「県内の産業活動が活発である（問2 - 13）」と同様の傾向が見られ、産業振興施策の推進によって、この項目の実感も高めることにつながる可能性があります。
- ・ 全体として実感を高めていくためには、県内各地において産業を一層活発にするための取組を進めるとともに、企業と求職者とのマッチングや人材育成などにも引き続き取り組んでいくことが必要と考えられます。

図表2-2-27 地域や社会の状況についての実感割合（今回調査結果）（働きたい人が仕事に就き、必要な収入を得ている）



図表2-2-28 地域や社会の状況についての実感割合(第1回調査からの推移)（働きたい人が仕事に就き、必要な収入を得ている）



【備考】

- 『実感している』…『感じる』と『どちらかといえば感じる』の割合の合計
- 『実感していない』…『感じない』と『どちらかといえば感じない』の割合の合計
- 『実感している傾向が相対的に強い属性項目』…『実感している』割合が県全体に比べて高い、あるいは『実感していない』割合が低い属性項目（危険率5%未満で統計的に有意な差があるものを記載）
- 『実感している傾向が相対的に弱い属性項目』…『実感している』割合が県全体に比べて低い、あるいは『実感していない』割合が高い属性項目（危険率5%未満で統計的に有意な差があるものを記載）
- 『実感が高くなっている属性項目』…『実感している』割合が増加、あるいは『実感していない』割合が減少している属性項目(危険率5%未満で統計的に有意な差があるものを記載)
- 『実感が低くなっている属性項目』…『実感している』割合が減少、あるいは『実感していない』割合が増加している属性項目(危険率5%未満で統計的に有意な差があるものを記載)。
- 図表(第1回からの推移)中、()内は対前年度差、< >内は対第1回差を記載。いずれも、危険率5%未満で統計的に有意な差があるものには下線を付けている。

1.5 国内外に三重県の魅力が発信され、交流が進んでいる（問2 - 15）

(1) 今回調査結果の概要（図表2-2-29 参照）

- 『実感している層』は32.8%、『実感していない層』は48.8%です。
- 『実感していない層』が『実感している層』よりも16.0ポイント高くなっています。
- 特徴のある属性項目は次のとおりです。（県全体に比べて統計的に有意な差がある属性項目）

実感している傾向が相対的に強い属性項目	実感している傾向が相対的に弱い属性項目
伊勢志摩 女性 70歳以上 専業主婦、無職 離死別 単独世帯 0～100万円、500～600万円	北勢、伊賀、東紀州 男性 40歳代、60歳代 正規職員 二世帯世帯 100～200万円、1000万円～

(2) 第1回調査からの推移（図表2-2-30 参照）

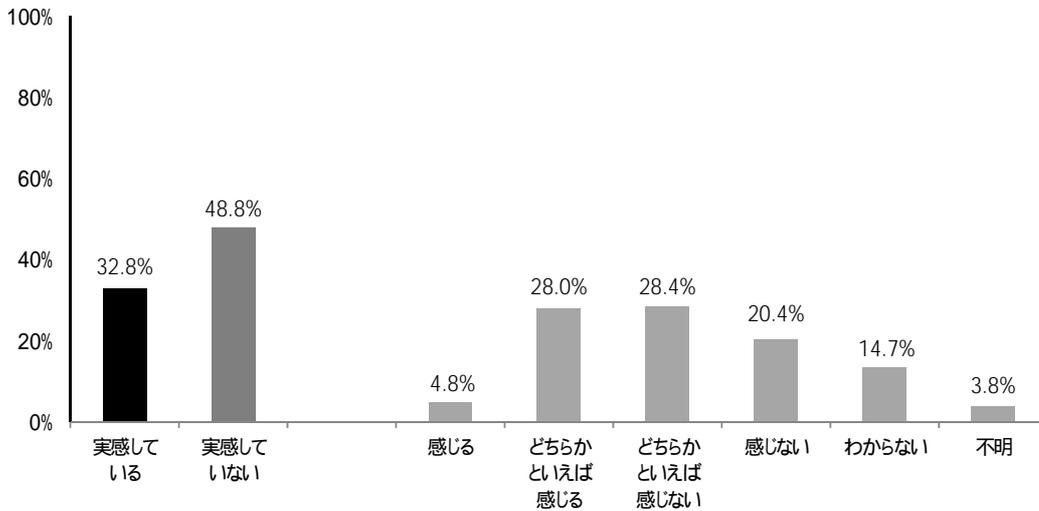
- 全体結果
 - ・ 前回調査時よりも、実感が高くなっています。
（『実感している層』：+11.8ポイント、『実感していない層』：-9.8ポイント）
 - ・ 第1回調査時よりも、実感が高くなっています。
（『実感している層』：+15.5ポイント、『実感していない層』：-15.4ポイント）
- 属性別の傾向（統計的に有意な水準で増減があるもの）

実感が高くなっている属性項目		実感が低くなっている属性項目	
対前回調査	対第1回調査	対前回調査	対第1回調査
全地域	全地域		
全性別	全性別		
全年齢層	全年齢層		
全職業	全職業		
全配偶関係	全配偶関係		
全世帯類型	全世帯類型		

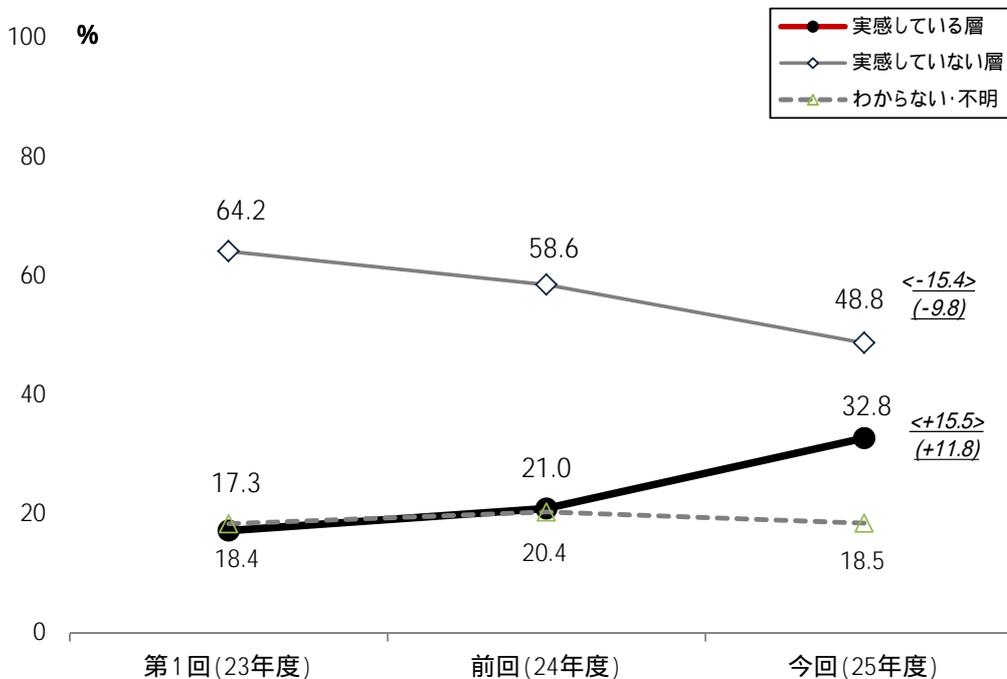
(3) 分析・考察

- ・ 第1回調査時、前回調査時よりも県全体で実感が高くなっており、依然として実感していない層が実感している層を上回っているものの、その差は第1回調査の50ポイント弱から15ポイント程度まで縮まっています。
- ・ 属性別に見ても、第1回調査時、前回調査時よりも全ての属性で実感が高くなっていますが、特に、伊勢志摩地域では、実感している層が第1回調査での17.3%から40.3%と倍以上に増え、他地域よりも実感している傾向が強くなっています。
- ・ これらのことから、「神宮式年遷宮」を契機として伊勢神宮周辺を中心に三重県への注目が高まったこと、また、平成25年4月からの「三重県観光キャンペーン～実はそれ、ぜんぶ三重なんです！～」首都圏営業拠点「三重テラス」のオープンなどによる三重の魅力発信が、実感の高まりにつながったと思われます。
- ・ この傾向を一時的なものとしてせず定着させるためには、熊野古道世界遺産登録10周年などの好機を活用した観光誘客や国内外への情報発信の強化などに引き続き取り組んでいく必要があります。

図表 2-2-29 地域や社会の状況についての実感割合（今回調査結果）（国内外に三重県の魅力が発信され、交流が進んでいる）



図表 2-2-30 地域や社会の状況についての実感割合(第1回調査からの推移)(国内外に三重県の魅力が発信され、交流が進んでいる)



【備考】

- 『実感している』…『感じる』と『どちらかといえば感じる』の割合の合計
- 『実感していない』…『感じない』と『どちらかといえば感じない』の割合の合計
- 『実感している傾向が相対的に強い属性項目』…『実感している』割合が県全体に比べて高い、あるいは『実感していない』割合が低い属性項目（危険率5%未満で統計的に有意な差があるものを記載）
- 『実感している傾向が相対的に弱い属性項目』…『実感している』割合が県全体に比べて低い、あるいは『実感していない』割合が高い属性項目（危険率5%未満で統計的に有意な差があるものを記載）
- 『実感が高くなっている属性項目』…『実感している』割合が増加、あるいは『実感していない』割合が減少している属性項目（危険率5%未満で統計的に有意な差があるものを記載）
- 『実感が低くなっている属性項目』…『実感している』割合が減少、あるいは『実感していない』割合が増加している属性項目（危険率5%未満で統計的に有意な差があるものを記載）。
- 図表（第1回からの推移）中、（ ）内は対前回差、< >内は対第1回差を記載。いずれも、危険率5%未満で統計的に有意な差があるものには下線を付けている。

1.6 道路や公共交通機関等が整っている（問2 - 16）

(1) 今回調査結果の概要（図表2-2-31 参照）

- 『実感している層』は40.3%、『実感していない層』は52.6%です。
- 『実感していない層』が『実感している層』よりも12.3ポイント高くなっています。
- 特徴のある属性項目は次のとおりです。（県全体に比べて統計的に有意な差がある属性項目）

実感している傾向が相対的に強い属性項目	実感している傾向が相対的に弱い属性項目
北勢 70歳以上 学生、無職 0～100万円、300～400万円	伊賀 男性 50歳代 正規職員

(2) 第1回調査からの推移（図表2-2-32 参照）

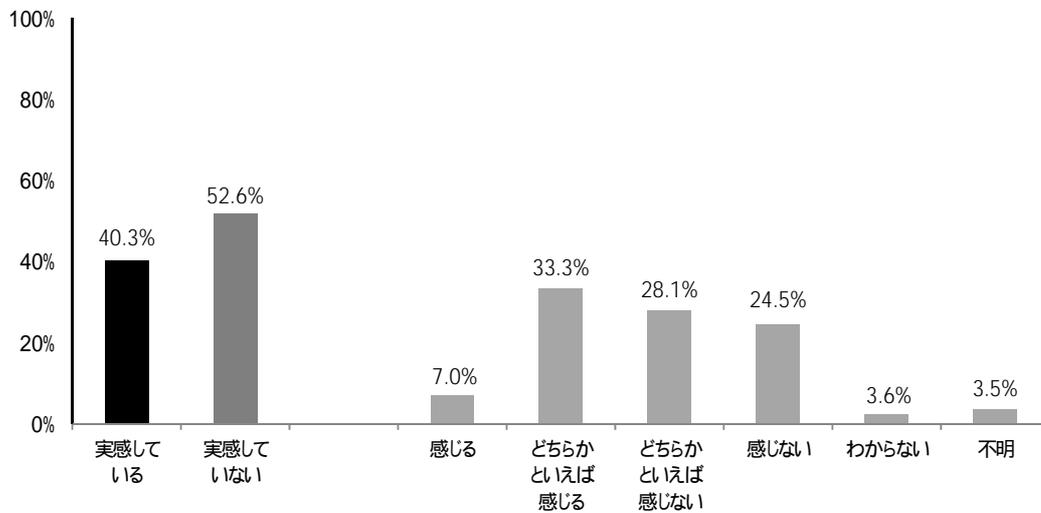
- 全体結果
 - ・ 第1回調査時よりも、実感が高くなっています。
（『実感している層』：+2.8ポイント、『実感していない層』：-3.3ポイント）
- 属性別の傾向（統計的に有意な水準で増減があるもの）

実感が高くなっている属性項目		実感が低くなっている属性項目	
対前回調査	対第1回調査	対前回調査	対第1回調査
東紀州	伊勢志摩、東紀州 全性別 30～40代、60以上 パート等、主婦、無職 有配偶 一世代	自営 三世代	

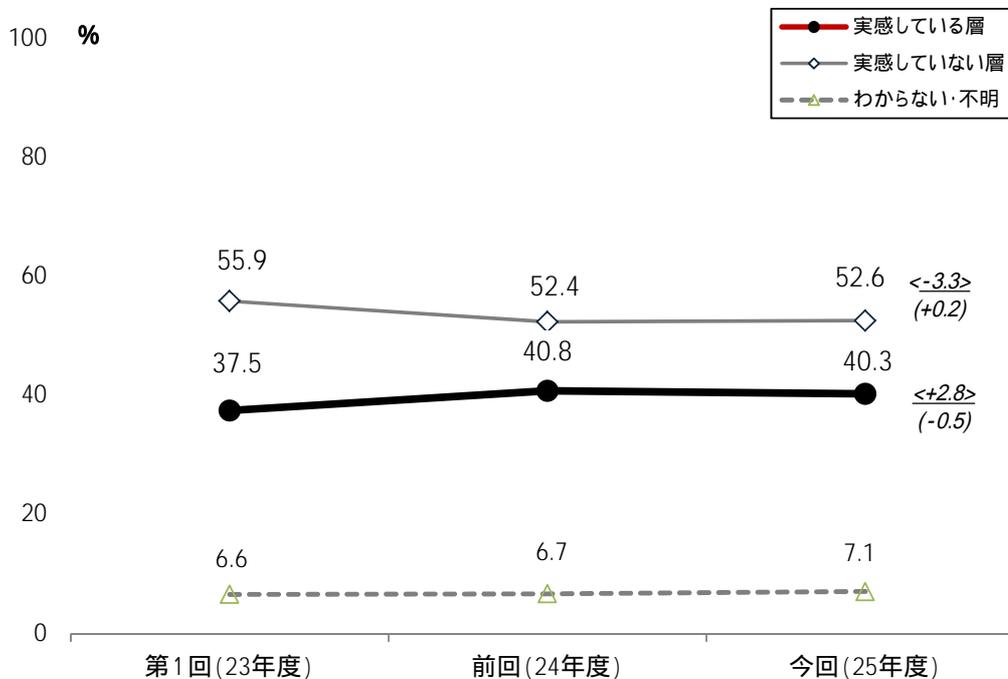
(3) 分析・考察

- ・ 県全体では、実感していない層が実感している層を10ポイント以上上回っていますが、第1回調査時よりも実感が高くなっており、その差は縮まっています。
- ・ 属性別に見ると、第1回調査時よりも多くの属性で実感が高くなっていますが、特に、東紀州地域では、実感している層が第1回調査での18.7%から39.3%と倍以上に増えています。また、今回調査結果を地域別で見ると、北勢地域で実感している傾向が強く、伊賀地域で弱くなっています。
- ・ 東紀州地域で実感が高くなったのは、「熊野尾鷲道路（三木里～熊野大泊）」や「紀勢自動車道（紀伊長島～海山）」の供用開始など、幹線道路等の整備が進んだことが影響していると思われます。また、北勢地域での実感の強さ、伊賀地域での弱さについては、鉄道等の公共交通の状況が影響している可能性もあります。
- ・ 全体としては実感していない層が実感している層を上回っている状況であり、利便性だけではなく災害時の緊急輸送や代替ルートの確保にもつながる道路整備や高齢者の移動手段として重要な役割を担うバスや鉄道等の公共交通の維持・確保が求められているものと思われます。

図表2-2-31 地域や社会の状況についての実感割合（今回調査結果）（道路や公共交通機関等が整っている）



図表2-2-32 地域や社会の状況についての実感割合(第1回調査からの推移)(道路や公共交通機関等が整っている)



【備考】

- 『実感している』…『感じる』と『どちらかといえば感じる』の割合の合計
- 『実感していない』…『感じない』と『どちらかといえば感じない』の割合の合計
- 『実感している傾向が相対的に強い属性項目』…『実感している』割合が県全体に比べて高い、あるいは『実感していない』割合が低い属性項目（危険率5%未満で統計的に有意な差があるものを記載）
- 『実感している傾向が相対的に弱い属性項目』…『実感している』割合が県全体に比べて低い、あるいは『実感していない』割合が高い属性項目（危険率5%未満で統計的に有意な差があるものを記載）
- 『実感が高くなっている属性項目』…『実感している』割合が増加、あるいは『実感していない』割合が減少している属性項目（危険率5%未満で統計的に有意な差があるものを記載）
- 『実感が低くなっている属性項目』…『実感している』割合が減少、あるいは『実感していない』割合が増加している属性項目（危険率5%未満で統計的に有意な差があるものを記載）。
- 図表（第1回からの推移）中、（ ）内は対前回差、 $\langle \rangle$ 内は対第1回差を記載。いずれも、危険率5%未満で統計的に有意な差があるものには下線を付けている。

第3章 家族と幸福実感

これまでの調査結果から、家族は県民の幸福実感と密接な関連があることが明らかになってきたところです。この章では、今回調査で新たに設けた「父親の育児参画」に関する質問、「結婚」、「子ども」などの家族に関する分析を記載しています。

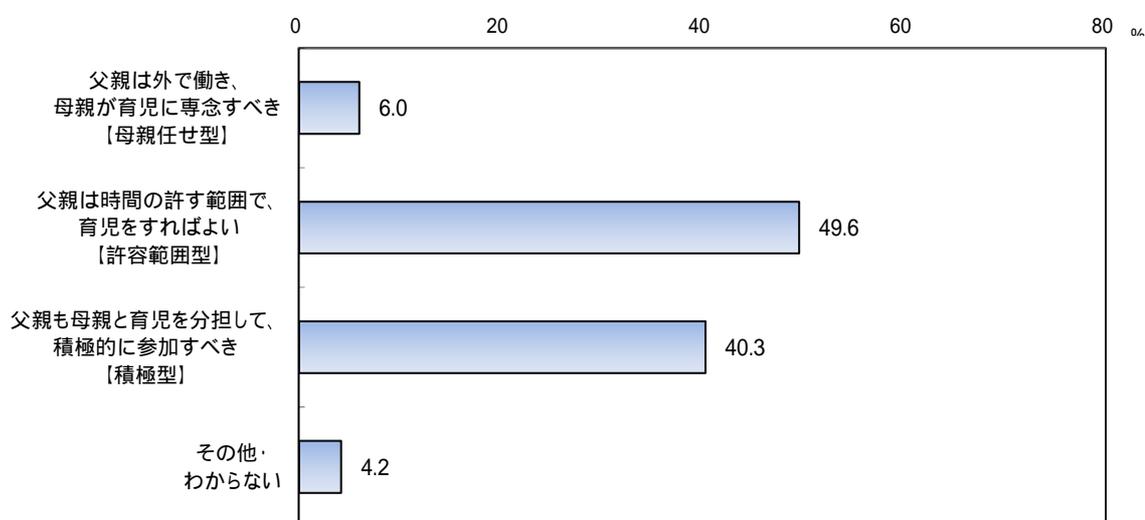
第1節 父親の育児参画

1 全体の状況

父親の育児参画についての考え方を質問したところ、「父親は時間の許す範囲内で、育児をすればよい」(以下『許容範囲型』)の割合が49.6%で最も高く、「父親も母親と育児を分担して、積極的に参加すべき」(以下『積極型』)が40.3%、「父親は外で働き、母親が育児に専念すべき」(以下『母親任せ型』)は6.0%となっています(図表3-1-1)。

なお、調査方法等が同一ではないことから単純な比較はできませんが、類似する全国調査では『積極型』(45.0%)と『許容範囲型』(44.9%)がほぼ同じ割合となっています(図表3-1-2)。

図表 3-1-1 父親の育児参画についての考え方(全体)



図表 3-1-2 参照した全国調査

父親の育児参加に関する世論調査(一般社団法人中央調査社が1999年から継続実施)

- ・2012年6月調査
- ・20歳以上の男女対象
- ・有効回答数1,289
- ・面接聴取法

(質問)父親が育児に参加することについて、この中からあなたのお考えに最も近いものを1つ選んでください。

(回答)()内は結果

- ・父親は外で働き、母親が育児に専念すべき(8.5%)
- ・父親は時間の許す範囲内で、育児に参加すればよい(44.9%)
- ・父親も母親と育児を分担して、積極的に参加すべき(45.0%)
- ・その他、わからない(1.5%)

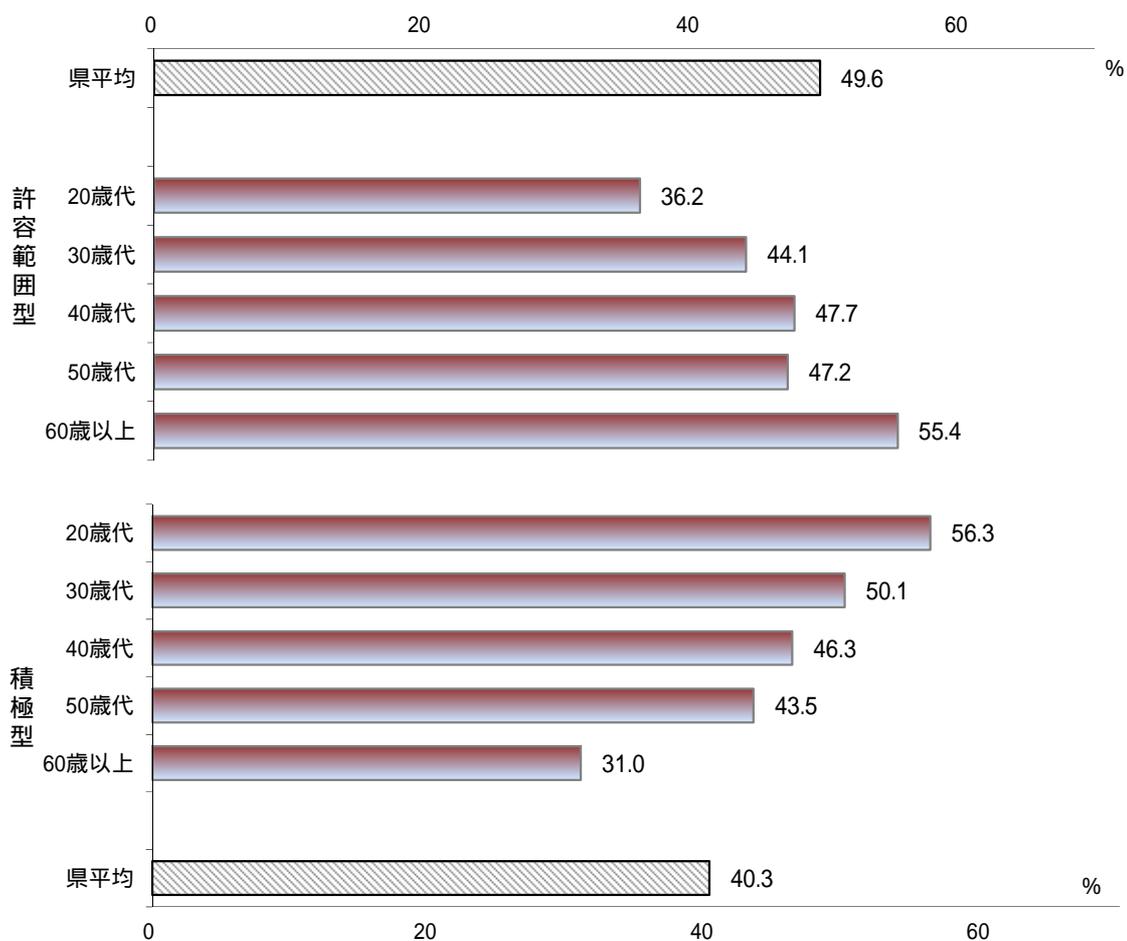
2 属性別の主な特徴

(1) 年齢別、性別の特徴

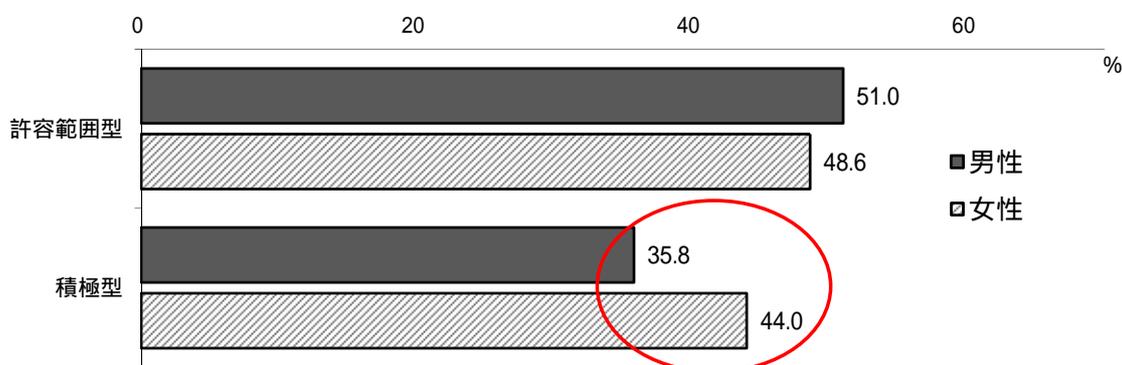
年齢別に見ると、20歳代、30歳代では「積極型」が50%を越えるなど、年齢層が低いほど「積極型」の割合が高くなる傾向となっています(図表3-1-3)。

性別に見ると、女性の「積極型」が44.0%に対し、男性は35.8%となっており、女性の方が「積極型」の割合が高くなっています(図表3-1-4)。

図表 3-1-3 父親の育児参画についての考え方(年齢別)('許容範囲型'及び'積極型')



図表 3-1-4 父親の育児参画についての考え方(性別)('許容範囲型'及び'積極型')



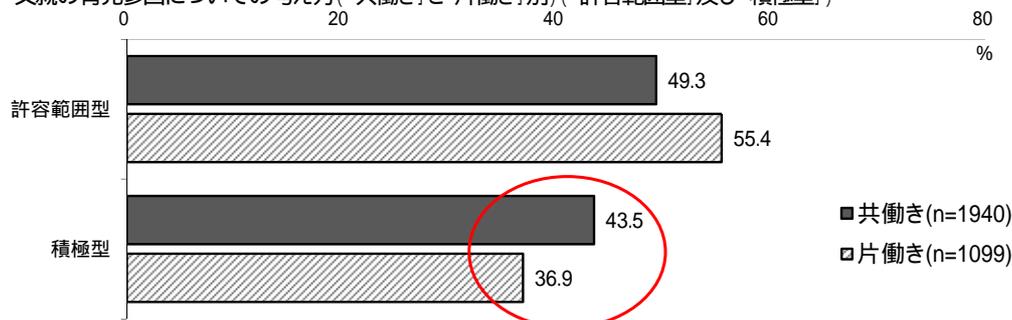
(2) 共働き世帯の意識

「共働き」と「片働き」に区分して見ると、「共働き」の方が「積極型」の割合が高くなっています(図表3-1-5)。

さらに「共働き」世帯について性別で見ると、女性は「積極型」の割合が高いのに対し、男性は「許容範囲型」の割合が高くなっています。特に、本人・配偶者が共に正規職員の場合、女性の69.0%が「積極型」であるのに対し、男性は「許容範囲型」の割合が高くなっています(図表3-1-6)。

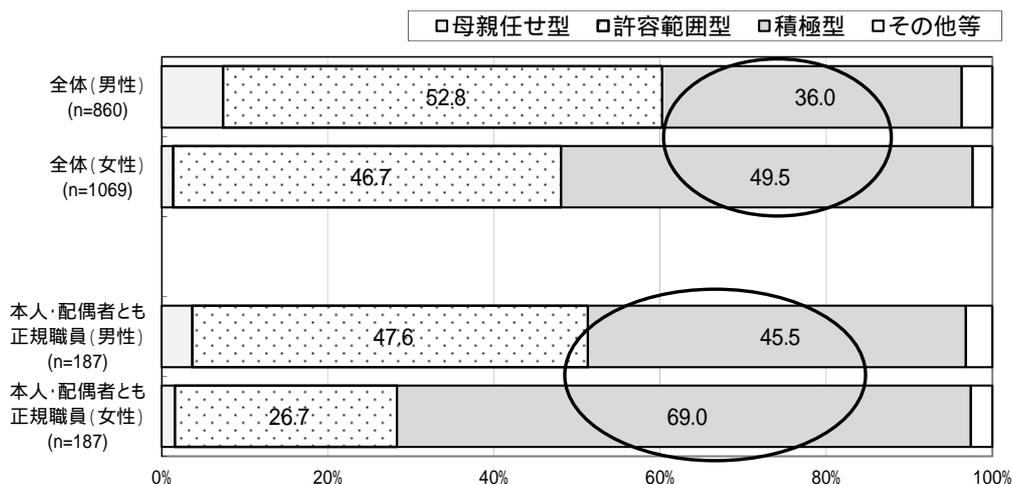
また、「片働き」世帯について性別で見ると、男女とも「許容範囲型」の割合が最も高くなっています(図表3-1-7)。

図表 3-1-5 父親の育児参画についての考え方(「共働き」と「片働き」別)(「許容範囲型」及び「積極型」)

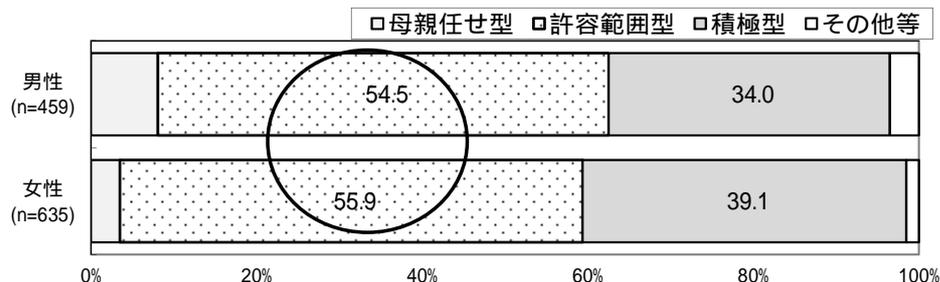


備考) 有配偶者のうち、本人及び配偶者が有業の場合に「共働き」、本人が有業で配偶者が無業、本人が無業で配偶者が有業の場合に「片働き」としている。

図表 3-1-6 父親の育児参画についての考え方(共働き世帯)(性別)



図表 3-1-7 父親の育児参画についての考え方(片働き世帯)(性別)

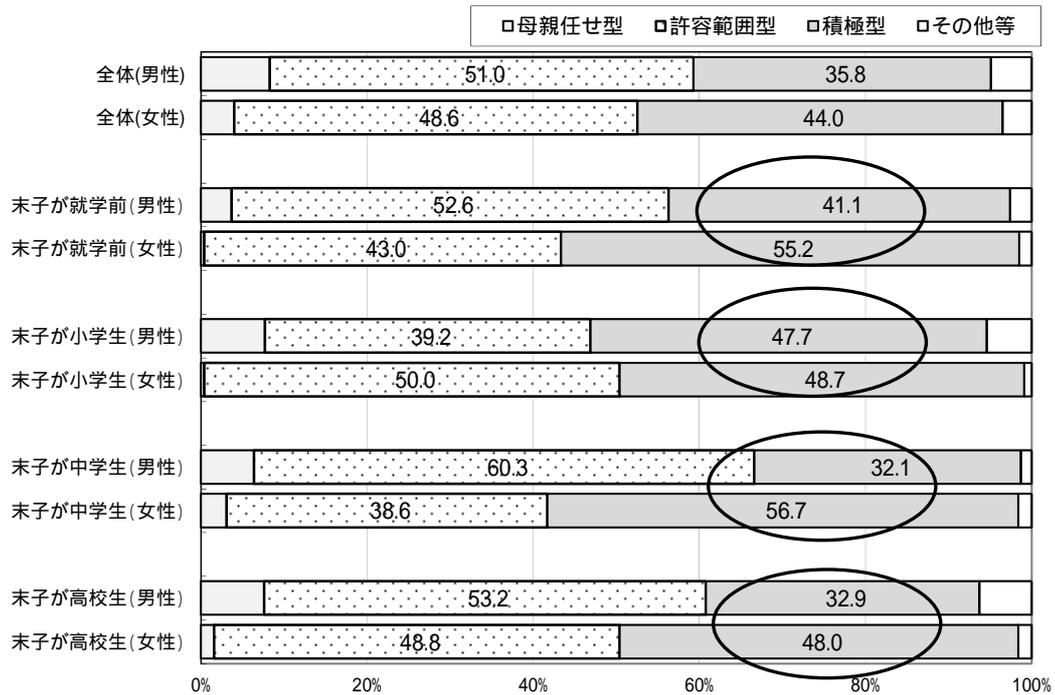


3 子育て世代の意識と現状

(1) 子育て世代の意識

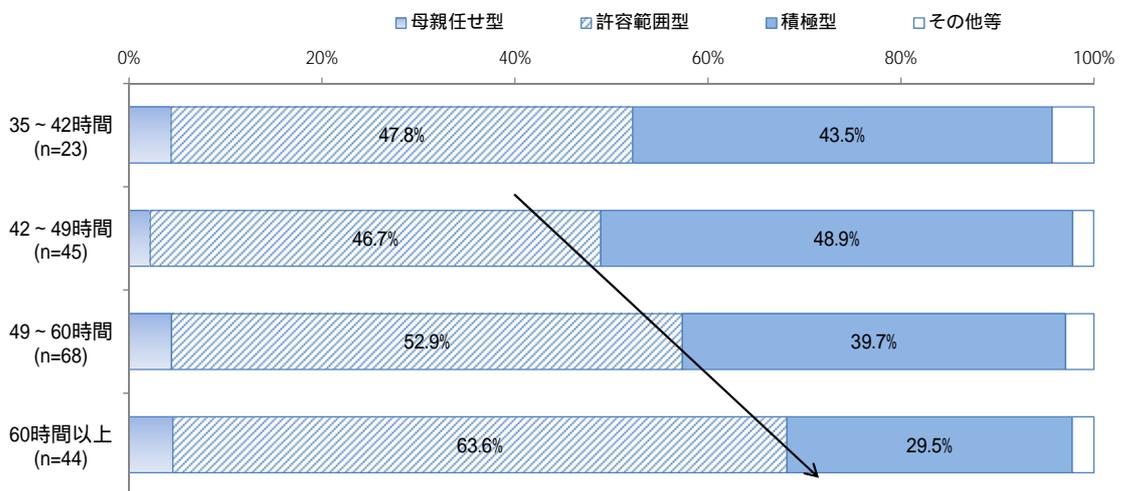
現在、高校生までの子どもがいる方について、性別で考え方をみると、どの区分においても、『積極型』の割合は女性の方が男性よりも高くなっており、性別により意識の違いが見られます（図表 3-1-8）。

図表 3-1-8 父親の育児参画についての考え方(高校生までの子どもがいる)(性別)



また、未子が就学前の男性について、父親の育児参画についての意識と見ると、就業時間が長くなると「積極型」が少なくなる傾向があります（図表 3-1-9）

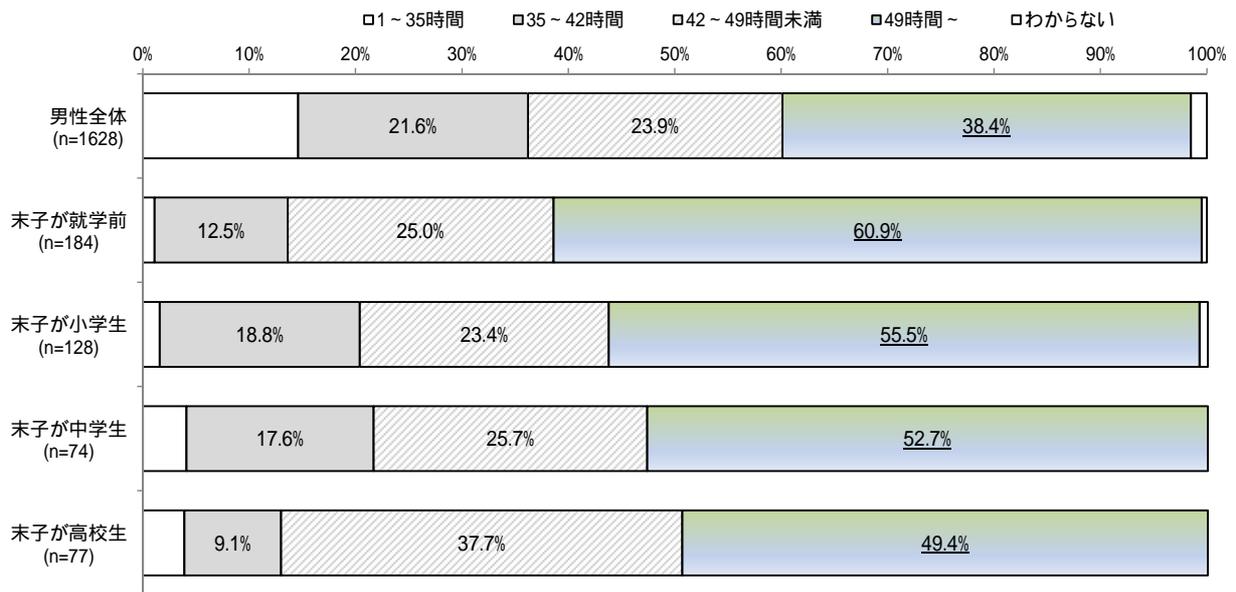
図表 3-1-9 父親の育児参画についての考え方(未子が就学前の男性)(一週間の就業時間別)



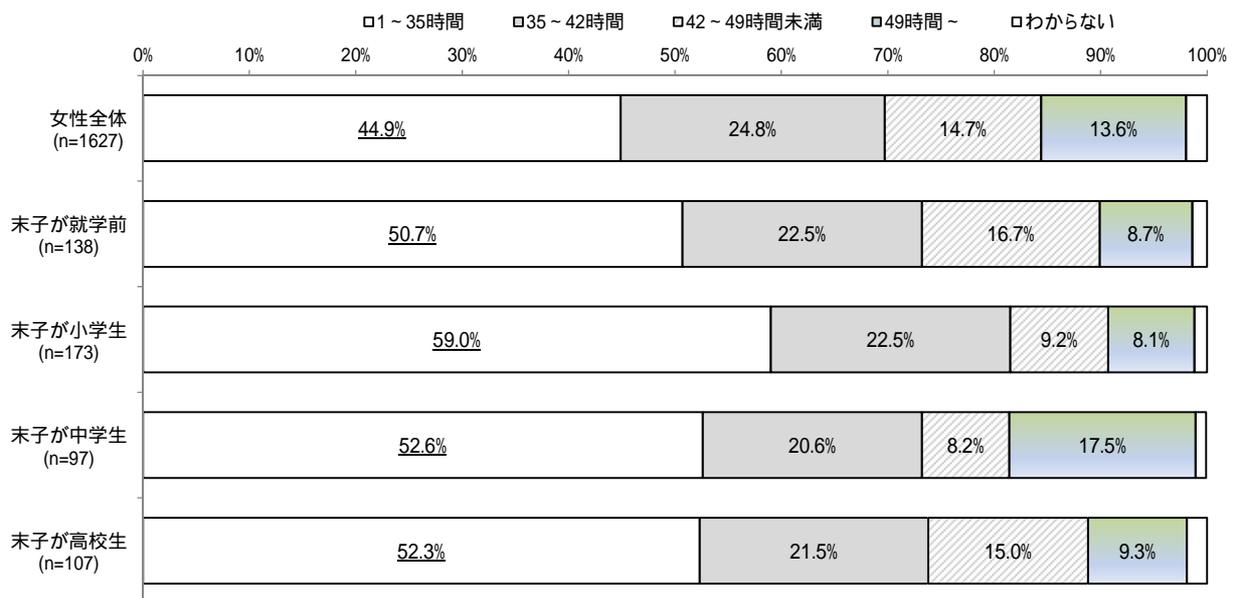
(2) 子育て世代の就業時間等

高校生までの子どもがいる方の一週間の就業時間を性別に見ると、男性は、5～6割程度が49時間以上となっており、子育て世代の男性について、長い就業時間の実態が窺えます(図表3-1-10)。一方、女性については、5～6割程度が35時間未満となっています(図表3-1-11)。

図表 3-1-10 一週間の平均就業時間(男性)(高校生までの子どもがいる)



図表 3-1-11 一週間の平均就業時間(女性)(高校生までの子どもがいる)



第2節 結婚及び子ども

1 結婚

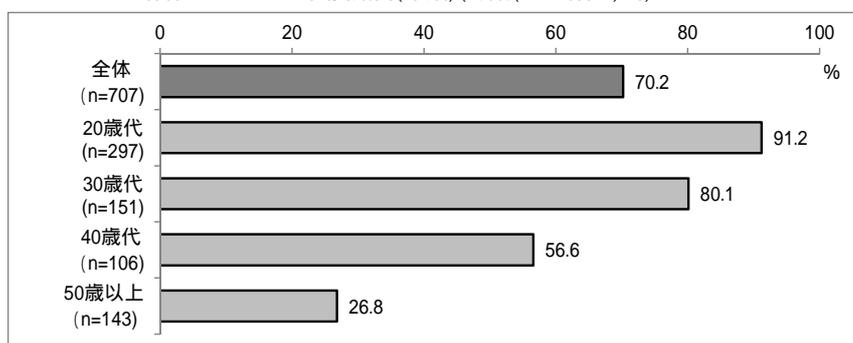
(1) 結婚に対する考え方

結婚に対する考え方を質問したところ、未婚の20歳代では「いずれ結婚するつもり」の割合が91.2%、30歳代では80.1%となっており、未婚の若年者の多くの方が結婚の意思を持っています(図表3-2-1)。

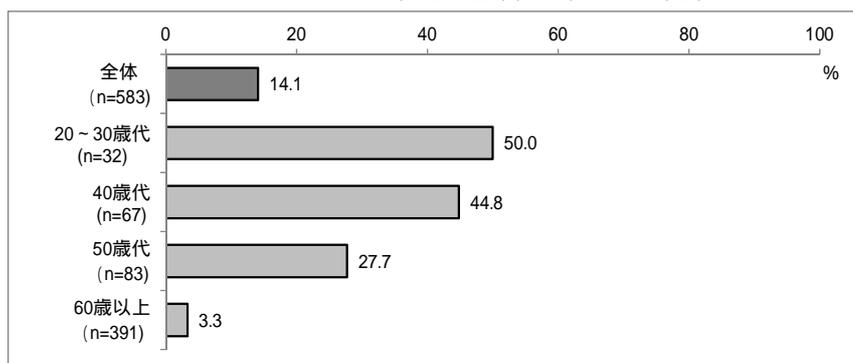
また、離別・死別の方についても、年齢層が低いほど、結婚の意思が高くなっています(図表3-2-2)。

なお、調査方法等が同一ではないことから単純な比較はできませんが、国の調査においても同様の傾向となっています(図表3-2-3)。

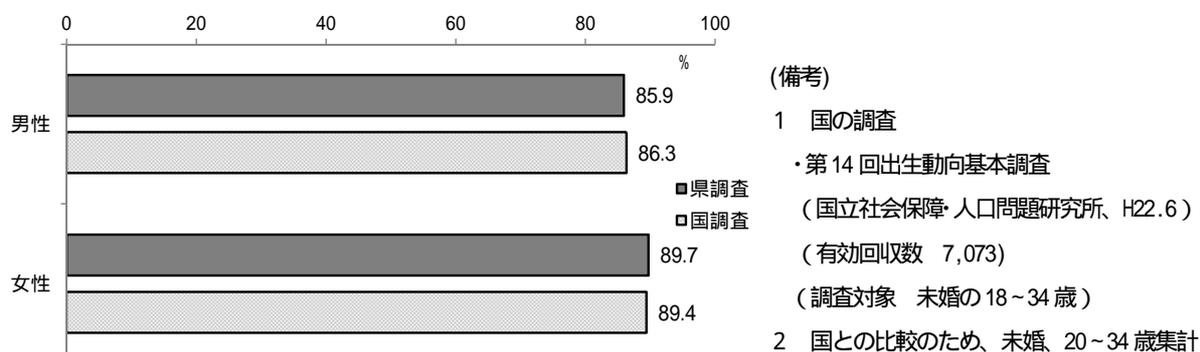
図表 3-2-1 「いずれ結婚するつもり」の回答割合(未婚)(年齢(10歳階級)別)



図表 3-2-2 「いずれ結婚するつもり」の回答割合(離別・死別)(年齢(10歳階級)別)



図表 3-2-3 「いずれ回答するつもり」の回答割合(未婚 20~34歳)(国調査との比較)



3 国調査の質問文及び選択肢は、

(問) 自分の一生を通じて考えた場合、あなたの結婚に対するお考えは次のうちどれですか。

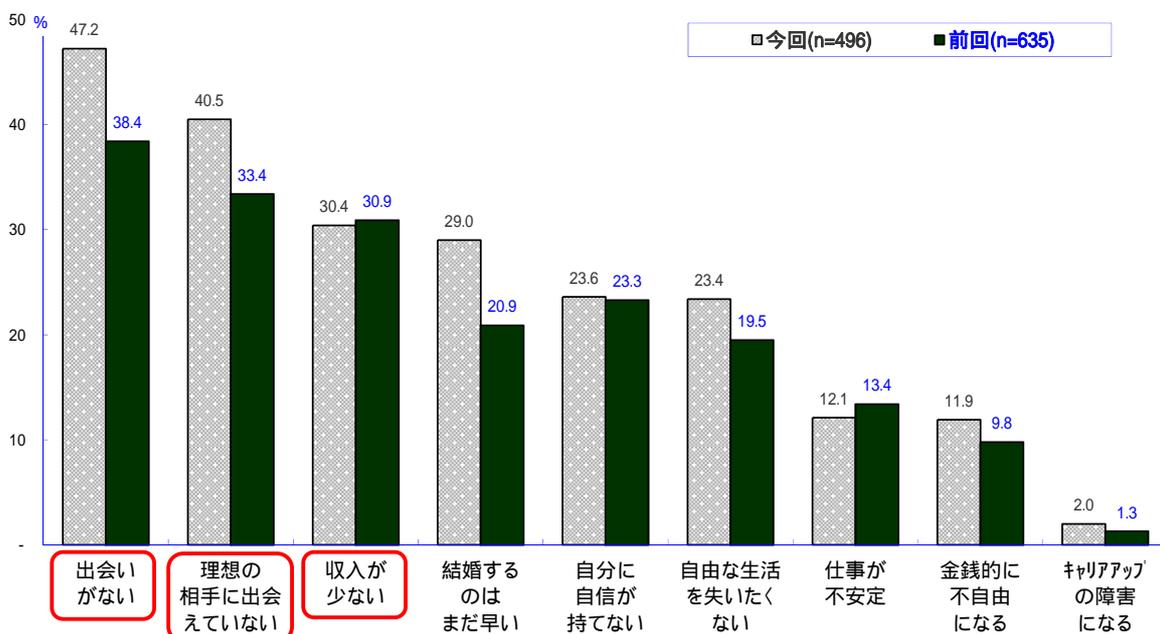
(ア) いずれ結婚するつもり (イ) 一生結婚するつもりはない

(2) 結婚していない理由

いずれ結婚するつもりと回答した方に結婚していない理由を質問したところ、全体では、「出会いがない」(47.2%)、「理想の相手に出会えていない」(40.5%)、「収入が少ない」(30.4%)の順に割合が高くなっています。前回調査とは、質問形式等が異なることから、単純な比較はできませんが、出会いに関する理由、収入に関する理由が上位という傾向は同様です(図表3-2-4)

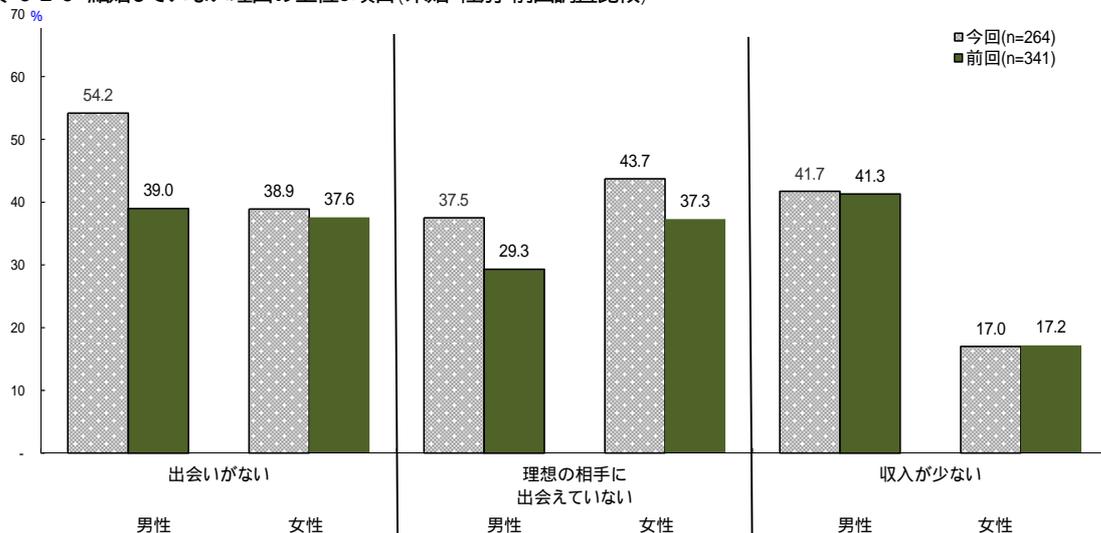
上位3項目について、性別に前回調査と比較すると、男性で出会いに関する理由の割合が高くなっています(図表3-2-5)

図表 3-2-4 結婚していない理由(未婚・前回調査比較)



- (備考) 1 前回調査では、未婚の方全員に結婚していない理由を質問、今回調査では、「いずれ結婚するつもり」の方に結婚していない理由を質問しています。
 2 理由の選択肢については、今回調査の選択肢に加え、前回調査では「結婚する気がない」という選択肢を設けています。

図表 3-2-5 結婚していない理由の上位3項目(未婚・性別・前回調査比較)



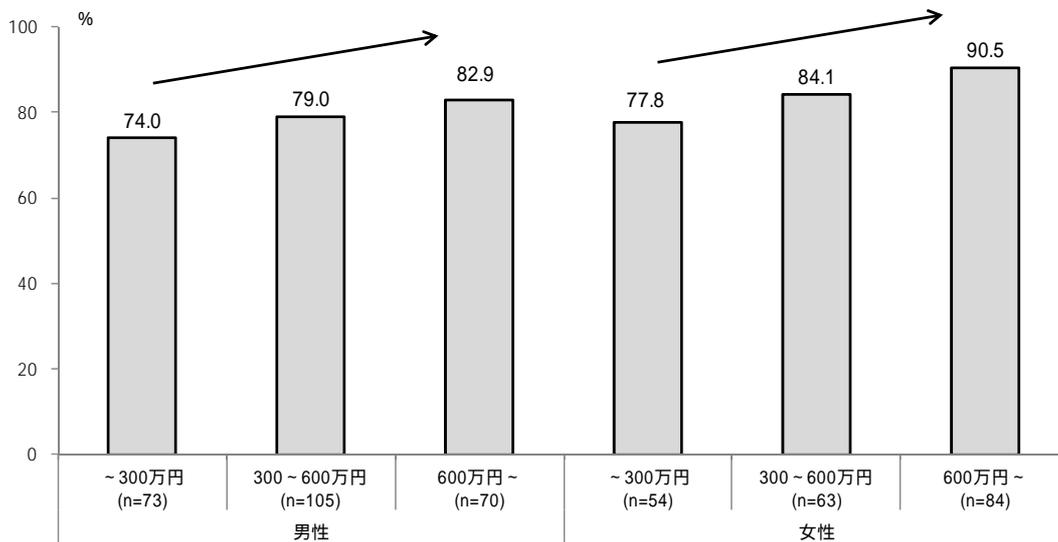
(3) 世帯年収との関係

20～40歳代で未婚の方の「いずれ結婚するつもり」の回答割合を、性・世帯収入別に見ると、男女とも世帯年収が増えるほど「いずれ結婚するつもり」の割合が高くなっています(図表3-2-6)。

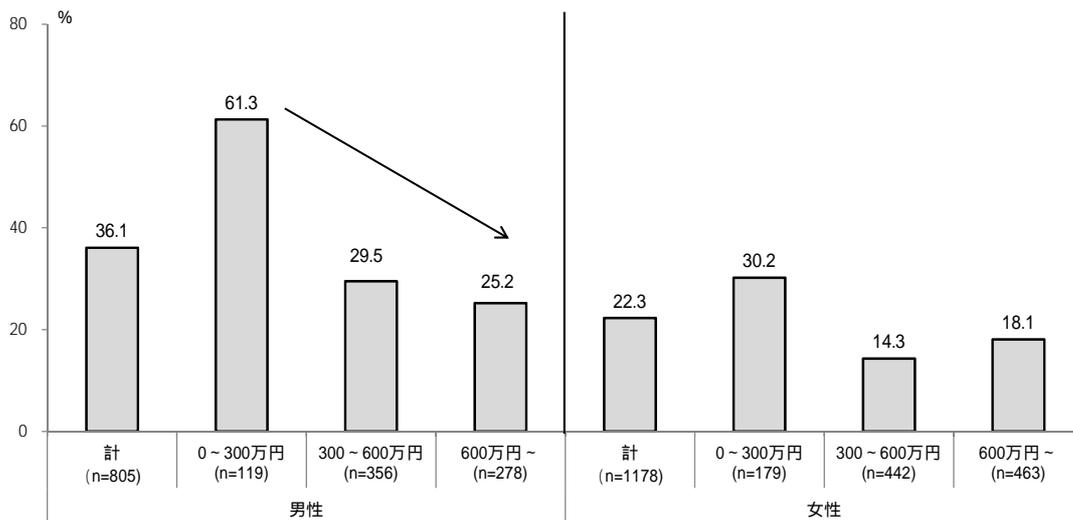
また、20～40歳代で未婚の割合を性・世帯収入別に見ると、世帯収入が低いと未婚の割合が高い傾向にあり、男性の300万円未満の層では未婚が6割以上になっています(図表3-2-7)。

これらから、経済的な要素が結婚に対する意思、あるいは結婚そのものに影響している可能性が窺えます。

図表 3-2-6 「いずれ結婚するつもり」の回答割合(未婚 20～40歳代)(性・世帯収入別)



図表 3-2-7 未婚の割合(20～40歳代)(性・世帯収入別)

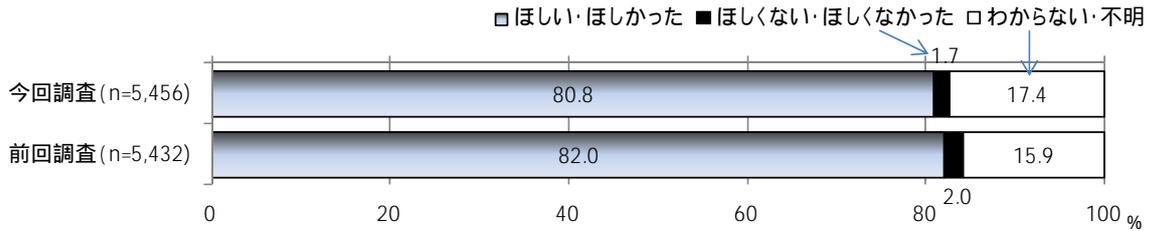


2 子ども

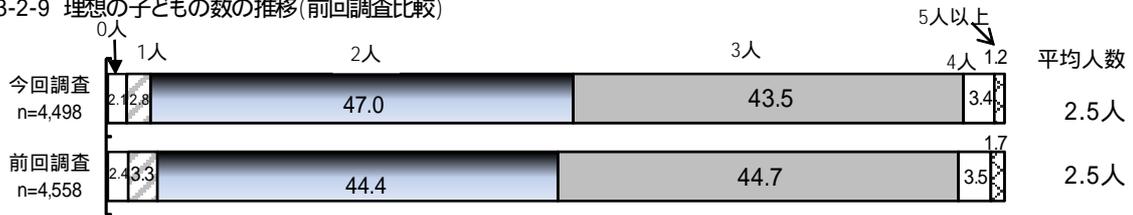
(1) 理想の子どもの数

前回調査に引き続き、理想の子どもの数を質問したところ、「子どもがほしい・ほしかった」の回答割合が80.8%、平均人数が2.5人となり、前回調査とほぼ同様の結果でした(図表3-2-8、3-2-9)。

図表 3-2-8 子どもを希望する割合(前回調査比較)



図表 3-2-9 理想の子どもの数の推移(前回調査比較)

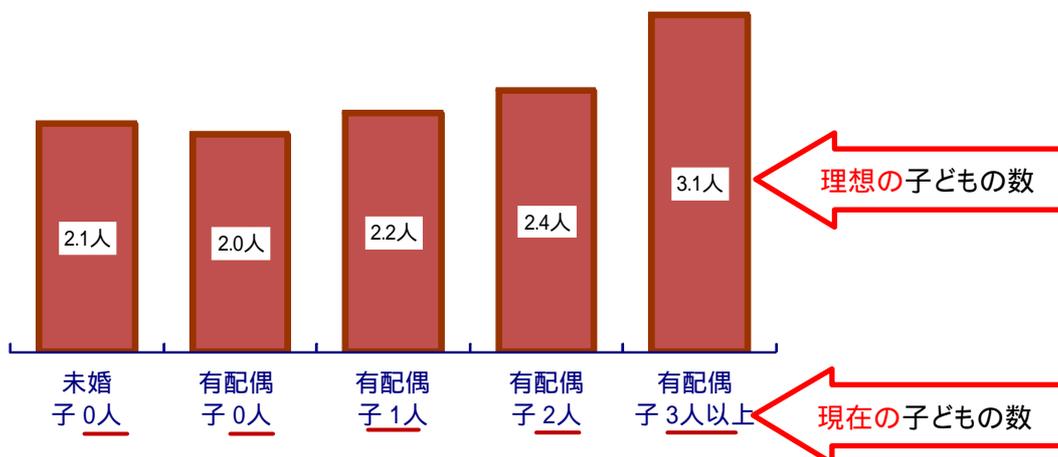


理想の子どもの人数が明記された回答、及び「ほしくない」と回答した方を対象に割合を算出しています。平均値の算出にあたっては、「ほしくない」の回答を「0人」としています。

(2) 理想の子どもの数と現実

20歳代から40歳代を対象に実際の子どもの数と理想の子どもの数の関係を見たところ、理想の子どもの数は、未婚で子どもがいない層は2.1人、有配偶で子どもがいない層は2.0人、有配偶で子ども1人の層は2.2人、有配偶で子ども2人の層は2.4人、有配偶で子ども3人以上の層は3.1人で、現在の子どもの数は理想の数より少なく、前回と同様の結果となっています(図表3-2-10)。

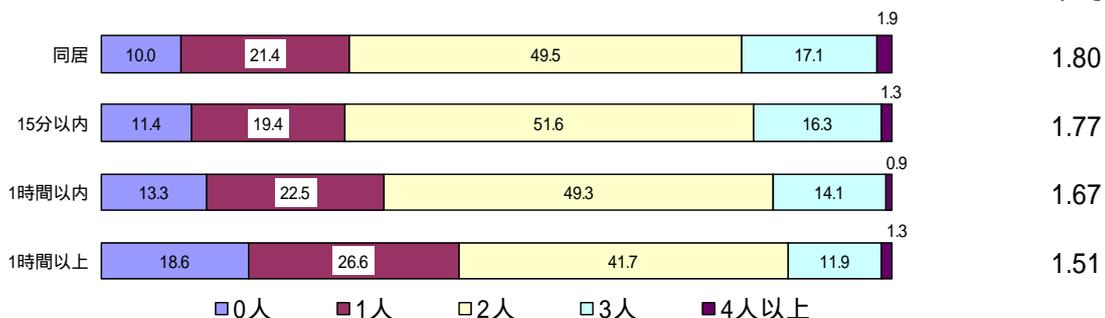
図表 3-2-10 子どもを希望する割合(20~40歳代)(今回調査)



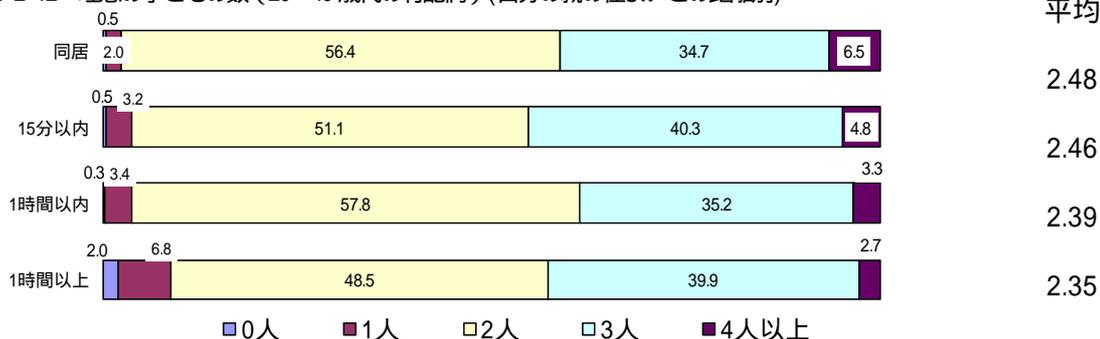
(3) 親の住む場所と子どもの数との関係

20～40歳代の有配偶を対象に、自分の親、配偶者の親との住まいの距離と実際の子どもの人数、理想の子どもの数を見たところ、実際の子どもの人数も理想の子どもの数も、親の住まいとの距離が近いほど数が増える傾向となっています（図表3-2-11～3-2-14）

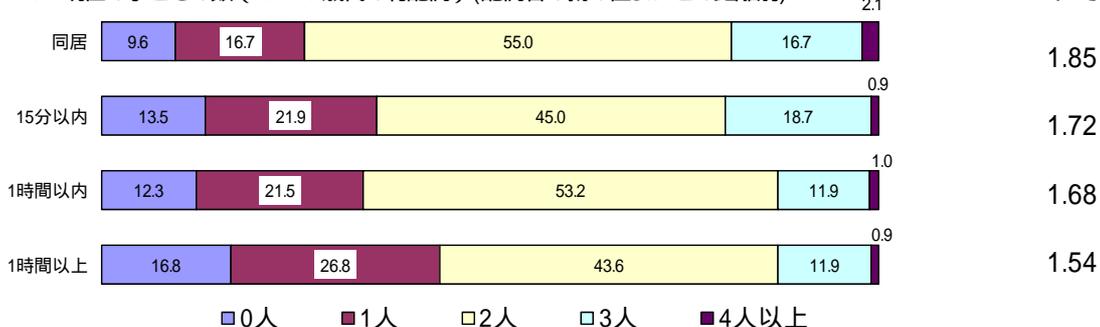
図表 3-2-11 現在の子どもの数（20～40歳代の有配偶）（自分の親の住まいとの距離別）



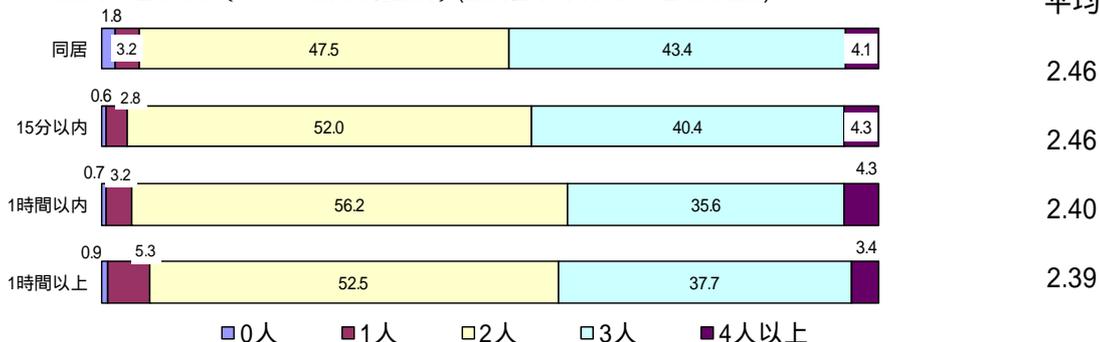
図表 3-2-12 理想の子どもの数（20～40歳代の有配偶）（自分の親の住まいとの距離別）



図表 3-2-13 現在の子どもの数（20～40歳代の有配偶）（配偶者の親の住まいとの距離別）



図表 3-2-14 理想の子どもの数（20～40歳代の有配偶）（配偶者の親の住まいとの距離別）

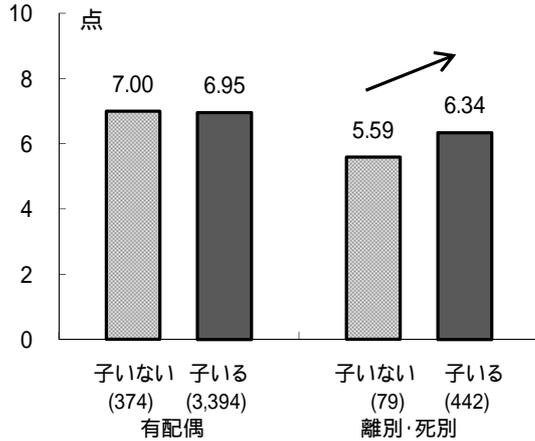


(3) 子どもを持つことと幸福感の関係

子どもの有無・配偶関係別に幸福感を見ると、有配偶ではあまり差はありませんが、離別・死別については、子どものいる層の方がいない層よりも幸福感が高くなっています(図表3-2-15)。

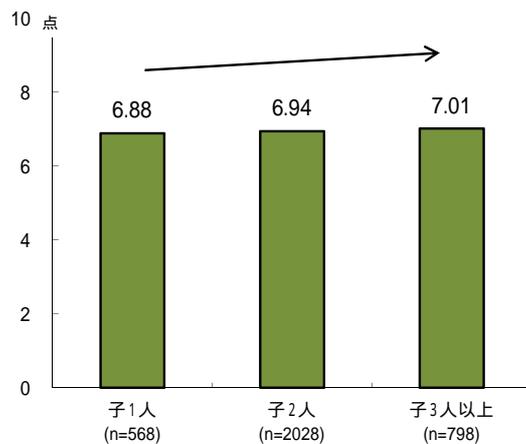
また、有配偶を対象に子どもの人数別に幸福感を見ると、子どもの人数が増えると幸福感が高くなる傾向があり(図表3-2-16)、末子の年齢別に見ると、就学前の子どもを持つ層の幸福感が特に高くなっています(図表3-2-17)。

図表 3-2-15 幸福感の平均値(配偶関係・子どもの有無別)

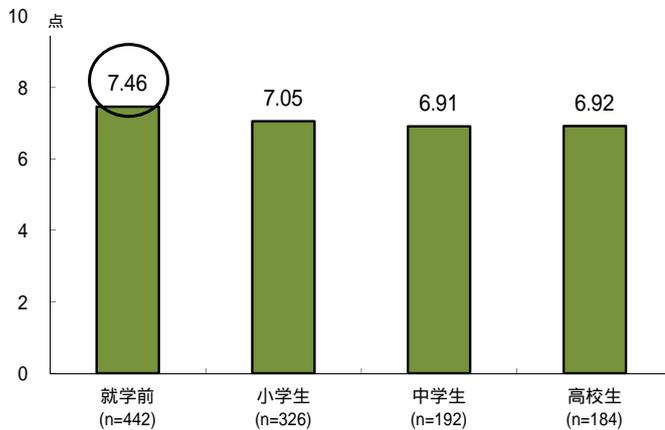


(備考) 各区分の下の数字はサンプル数。未婚についてはサンプル数が少ないため、省略。

図表 3-2-16 幸福感の平均値(有配偶)(子どもの人数別)



図表 3-2-17 幸福感の平均値(有配偶)(末子の年齢別)



第4章

地域や社会とのつながりと 幸福実感

前回調査では、近所づきあいの有無、地域や社会への貢献意欲などの傾向から、地域や社会へのつながりと幸福実感には関連があることがわかりました。この章では、「会話の頻度」、「地域活動への参画状況」の今回調査で設けた新たな質問、「地域の住みやすさ」に関する分析を記載しています。

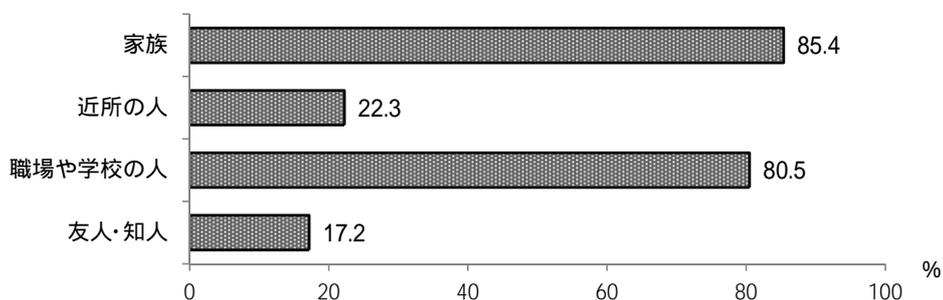
第1節 会話の頻度について

1 県全体の集計

普段、どの程度人と直接会話しているかを「家族」、「近所の人」、「職場や学校の人」、「友人、知人」に区分して質問したところ、『日常的に会話』()している割合が最も高いのは「家族」(85.4%)であり、次に「職場や学校の人」(80.5%)、「近所の人」(22.3%)、「友人や知人」(17.2%)の順になっています。また、『ふだん会話しない』割合が最も高いのは「友人や知人」(43.2%)となっています。(図表4-1-1~4-1-3)

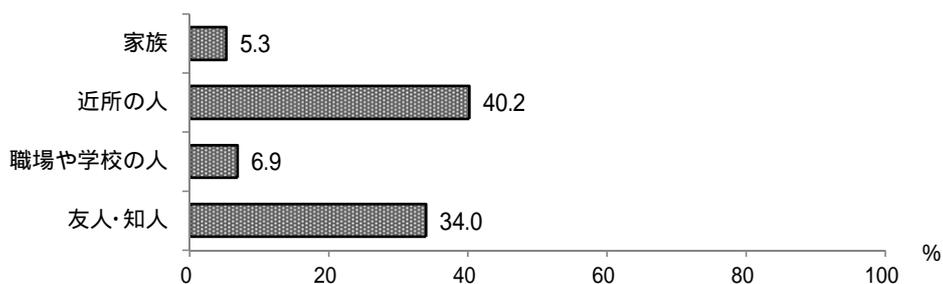
この章では『日常的に会話』(毎日~週に数回)、『ある程度会話』(週1回~月数回)、『ふだん会話しない』(月に1回~年数回、年1回、まったくない(いない)の合計)の3区分として記述をしています。

図表 4-1-1 会話の頻度(『日常的に会話』している割合)

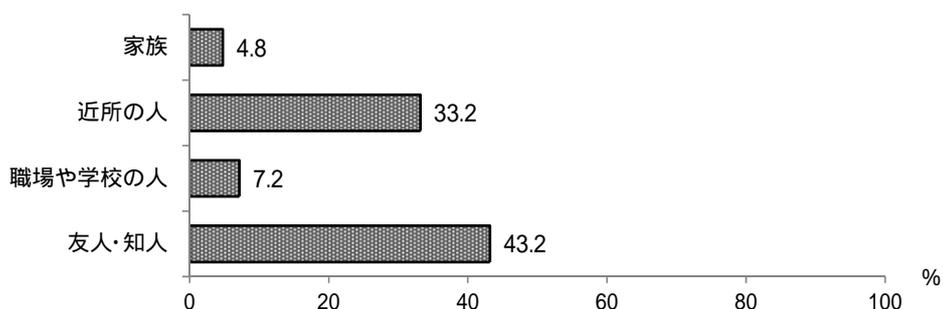


「家族」、「近所の人」、「友人・知人」は有効回答者全てを対象に集計し (n=5,456) 「職場や学校の人」は「専業主婦・主夫」、「無職」と回答した人を除いて集計しています。(n=3,431)(図表4-1-2、4-1-3も同様)

図表 4-1-2 会話の頻度(『ある程度会話』している割合)



図表 4-1-3 会話の頻度(『ふだん会話しない』割合)



2 『ふだん会話しない』層の属性別の特徴

(1) 家族と『ふだん会話しない』層の特徴

単独世帯、離別・死別、学生など家族がいない(又は同居していない)と思われる属性項目で割合が高くなっています(図表4-1-4)。

図表 4-1-4 ふだん会話しない層(家族)について特徴のある属性項目

割合が高い	割合が低い
20歳代 学生、無職 未婚、離別・死別 単独世帯 0~200万円未満	30歳~40歳代 正規職員 有配偶 一世代世帯、二世代世帯、三世代世帯 400万円以上

(備考)「割合が高い」は、『ふだん会話しない』の割合の合計が県全体より高い属性項目で、「割合が低い」は、『ふだん会話しない』割合の合計が県全体より低い属性項目で、いずれの差も統計的に有意な水準(危険率5%未満)のものを記載しています。また、金額は世帯の年間収入です。(図表4-1-5、4-1-6、4-1-7、4-1-9も同様)

(2) 近所の人と『ふだん会話しない』層の特徴

男性、20~50歳代、正規職員など、自宅にいる時間が少ないと思われる属性で割合が高くなっています(図表4-1-5)。

図表 4-1-5 ふだん会話しない層(近所の人)について特徴のある属性項目

割合が高い	割合が低い
北勢地域 男性 20~50歳代 正規職員、学生 未婚 単独世帯、二世代世帯 500万円以上	伊勢志摩地域、東紀州地域 女性 60歳以上 農林水産業、自営業・自由業、専業主婦・主夫、無職 有配偶、離別・死別 一世代世帯 0~300万円未満

(3) 職場や学校のひと『ふだん会話しない』層の特徴

農林水産業、自営業・自由業など一人の職場が多いと思われる属性で割合が高くなっています(図表4-1-6)。

図表 4-1-6 ふだん会話しない層(職場や学校のひと)について特徴のある属性項目

割合が高い	割合が低い
60歳以上 農林水産業、自営業・自由業 単独世帯、一世代世帯 0~300万円未満	20~50歳代 正規職員、パート・アルバイト・派遣 二世代世帯 600万円~1,000万円未満

(4) その他の友人・知人と『ふだん会話しない』層の特徴

男性、30~50歳代、正規職員、有配偶などで割合が高くなっています(図表4-1-7)。

図表 4-1-7 ふだん会話しない層(その他の友人・知人)について特徴のある属性項目

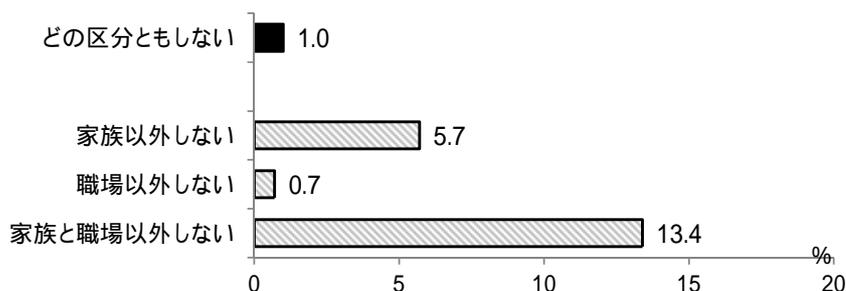
割合が高い	割合が低い
北勢地域 男性 30~50歳代 正規職員 有配偶 二世代世帯 600~800万円未満、1,000万円以上	伊勢志摩地域、東紀州地域 20歳代、70歳以上 農林水産業、自営業・自由業、学生、無職 離別・死別 単独世帯 0~200万円未満

3 誰とも『ふだん会話しない』層

家族、近所の人、職場や学校の人、その他の友人・知人のどの区分の人とも『ふだん会話しない』割合は1.0%となっています。また、家族以外とは『ふだん会話しない』が5.7%、職場や学校の人以外とは『ふだん会話しない』が0.7%、家族と職場や学校の人以外とは『ふだん会話しない』が13.4%となっています(図表4-1-8)。

なお、どの区分の人とも『ふだん会話しない』層の割合が高い属性は、60歳代、無職、単独世帯、世帯年収0~100万円未満となっています(図表4-1-9)。

図表 4-1-8 複数区分で『ふだん会話しない』割合



図表 4-1-9 複数区分で『ふだん会話しない』層について特徴のある属性項目

割合が高い	割合が低い
どの区分の人とも『ふだん会話しない』	
60歳代 無職 単独世帯 0~100万円未満	20~40歳代 正規職員、パート・アルバイト・派遣 二世帯世帯、三世帯世帯 500~600万円未満
家族以外の人と『ふだん会話しない』	
70歳以上 専業主婦・主夫、無職 一世帯世帯 0~100万円未満、200~300万円未満	伊勢志摩地域 50歳代 農林水産業、自営業・自由業、正規職員、パート・アルバイト・派遣 単独世帯、三世帯世帯 600万円以上
職場や学校の人以外の人と『ふだん会話しない』	
男性 未婚 単独世帯	女性 70歳以上 有配偶 二世帯世帯、三世帯世帯 800~1,000万円未満
家族、職場や学校の人以外の人と『ふだん会話しない』	
北勢地域 男性 20~50歳代 正規職員、パート・アルバイト・派遣 未婚 二世帯世帯 500~1,000万円未満	中南勢地域、伊勢志摩地域、東紀州地域 女性 60歳以上 農林水産業、自営業・自由業 離死別 単独世帯、一世帯世帯 0~300万円未満

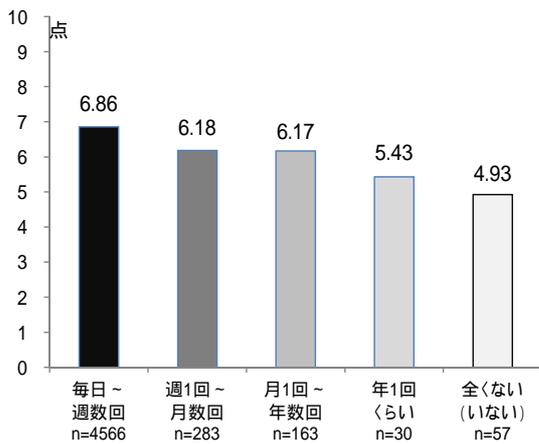
4 会話の頻度と幸福感の関係

会話の頻度と幸福感の関係を見ると、全ての区分で会話の頻度が高いほど、幸福感の平均値が高くなる傾向にあります。また、区分別に見ると、平均値の差が最も大きいのが「家族」で、次いで「友人・知人」、「近所」、「職場や学校」の順となっています(図表4-1-10~4-1-13)。

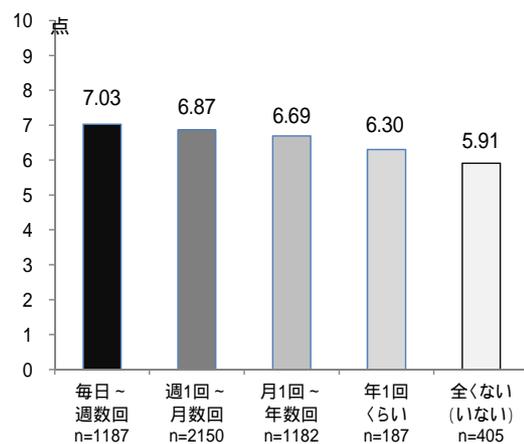
また、複数の区分での会話の頻度と幸福感の関係を見ると、『ふだん会話する』()層の幸福感の平均値が最も高くなっています(図表4-1-14)。

『ふだん会話する』は、近所の人あるいは友人や知人と『日常的に会話』、『ある程度会話する』と回答した人

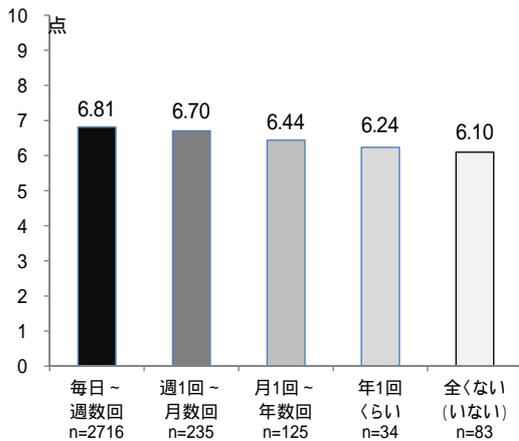
図表 4-1-10 幸福感の平均値(家族との会話頻度別)



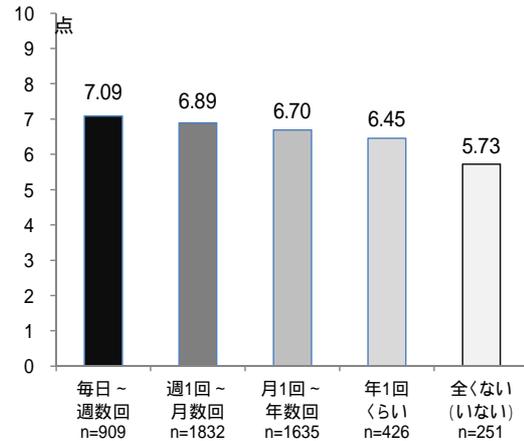
図表 4-1-11 幸福感の平均値(近所の人との会話頻度別)



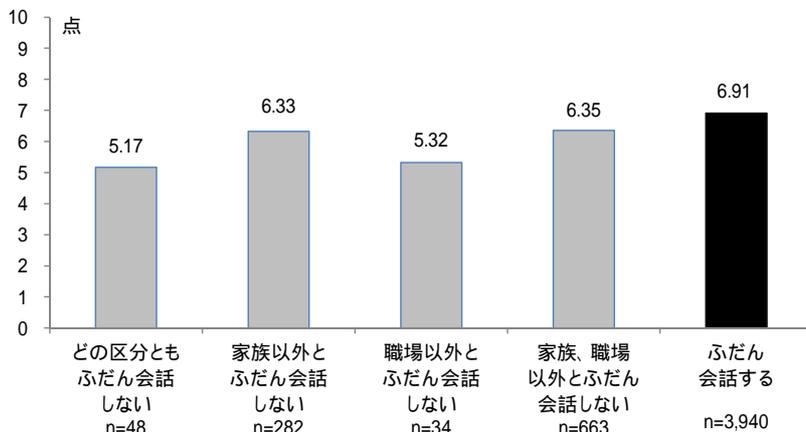
図表 4-1-12 幸福感の平均値(職場の人との会話頻度別)



図表 4-1-13 幸福感の平均値(友人知人との会話頻度別)



図表 4-1-14 幸福感の平均値(複数区分での会話頻度別)



第2節 地域活動への参画

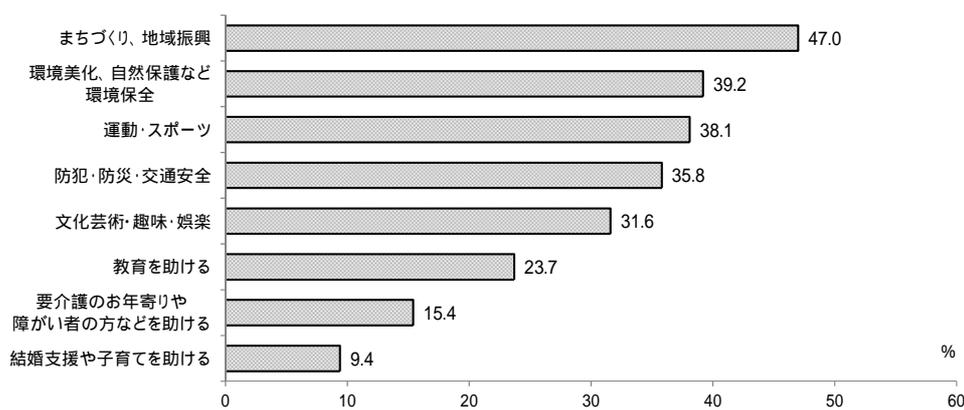
1 県全体の状況

地域活動への参加状況と意欲をみると「ふだん参加している」と「参加した経験がある」を合計した『参加経験』の割合は「まちづくり、地域振興の活動」が47.0%で最も高く、「結婚支援や子育てを助ける活動」は9.4%で最も低くなっています（図表4-2-1）。

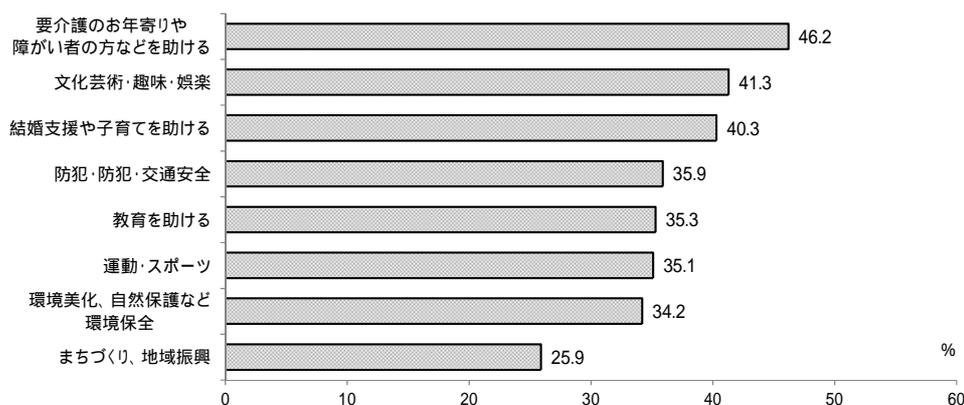
「参加したことはないが、機会があれば参加したい」（『未経験（意欲あり）』）の割合は、「要介護のお年寄りや障がい者の方などを助ける活動」が46.2%で最も高くなっています（図表4-2-2）。

「参加したことはなく、参加したいとも思わない」（『未経験（意欲なし）』）の割合は、「結婚支援や子育てを助ける活動」が42.1%で最も高くなっています（図表4-2-3）。

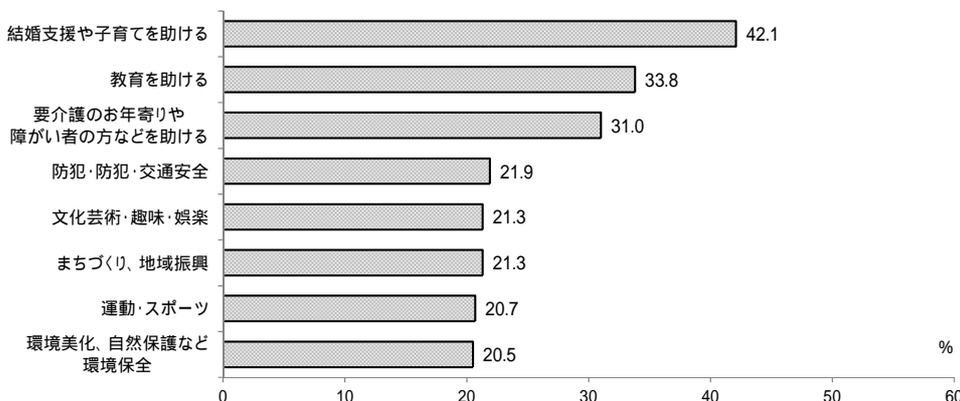
図表 4-2-1 地域活動への『参加経験』割合（項目別・割合順）



図表 4-2-2 地域活動への『未経験（意欲あり）』割合（項目別・割合順）



図表 4-2-3 地域活動への『未経験（意欲なし）』割合（項目別・割合順）



2 属性別の特徴

(1) 『参加経験』者の特徴

各活動別に見ると、伊賀地域、40～60歳代、農林水産業、自営・自由業、有配偶、三世帯世帯では、多くの活動で『参加経験』が高くなっています（図表4-2-4）。

性別に見ると、男性と女性では活動項目が異なる傾向にあり、世帯収入別では、中高所得層が高くなっています。

また、「要介護者・障がい者支援」については、20歳代と70歳以上の割合が高いなど、他の項目とは異なる特徴となっています。

図表 4-2-4 『参加経験』の割合が高い属性項目

地域活動	地域	性別	年齢	主な職業	配偶関係	世帯類型	世帯収入
教育を助ける活動	伊賀	-	40～50代	農林水産業 自営・自由業 パート・アルバイト・派遣	有配偶	三世帯	600万円～
結婚支援や子育てを助ける活動	-	女性	30～40代	農林水産業 パート・アルバイト・派遣	-	二世帯 三世帯	400～500万円
防犯・防災・交通安全の活動	伊賀 東紀州	男性	40～60代	農林水産業 自営・自由業	有配偶	三世帯	600万円～
要介護のお年寄りや障がい者の方などを助ける活動	-	女性	20代 70以上	農林水産業 学生	離死別	-	400～500万円
まちづくり、地域振興の活動	伊賀 東紀州	男性	50～60代	農林水産業 自営・自由業 パート・アルバイト・派遣	有配偶	三世帯	400～1000万円
環境美化、自然保護、リサイクル運動など環境保全の活動	伊賀	男性	50～60代	農林水産業 自営・自由業	有配偶	三世帯	1000万円～
運動・スポーツ活動	伊賀	男性	50～60代	正規職員	有配偶	三世帯	400～500万円 800万円～
文化芸術・趣味・娯楽活動	伊賀	女性	60以上	農林水産業 専業主婦 無職	有配偶	一世帯	400～500万円 800～1000万円

（備考）『参加経験』の割合が県全体より高い属性項目で、統計的に有意な差（危険率5%未満）のものを記載しています。

(2) 『未経験（意欲あり）』の特徴

多くの項目で、20歳代、30歳代の若年層、正規職員、パート・アルバイト・派遣社員などの被雇用者、未婚の割合が高くなっています（図表4-2-5）。

図表 4-2-5 『未経験（意欲あり）』の割合が高い属性項目

地域活動	地域	性別	年齢	主な職業	配偶関係	世帯類型	世帯収入
教育を助ける活動	-	-	20～30代	正規職員 パート・アルバイト・派遣	-	-	300～500万円
結婚支援や子育てを助ける活動	-	女性	20～50代	正規職員 パート・アルバイト・派遣 専業主婦	有配偶	二世帯 三世帯	500～600万円 800万円～
防犯・防災・交通安全の活動	北勢	-	20～30代 60代	正規職員	未婚	-	-
要介護のお年寄りや障がい者の方などを助ける活動	-	男性	40～60代	パート・アルバイト・派遣	有配偶	二世帯	800～1000万円
まちづくり、地域振興の活動	-	-	20～40代	正規職員	未婚	-	-
環境美化、自然保護、リサイクル運動など環境保全の活動	-	-	30～40代	パート・アルバイト・派遣	未婚	-	800～1000万円
運動・スポーツ活動	-	-	20～30代	正規職員 パート・アルバイト・派遣 学生	未婚	-	500～600万円
文化芸術・趣味・娯楽活動	-	男性	20～50代	正規職員 パート・アルバイト・派遣	未婚	二世帯	500～800万円

（備考）『未経験（意欲あり）』の割合が県全体より高い属性項目で、統計的に有意な差（危険率5%未満）のものを記載しています。

(3) 『未経験（意欲なし）』の特徴

多くの項目で、20歳代、30歳代の若年層、正規職員、未婚の割合が高くなっています(図表4-2-6)

図表 4-2-6 『未経験（意欲なし）』の割合が高い属性項目

地域活動	地域	性別	年齢	主な職業	配偶関係	世帯類型	世帯収入
教育を助ける活動	-	-	20～30代	正規職員 無職	未婚	-	-
結婚支援や子育てを助ける活動	-	男性	50代	正規職員 無職	未婚	-	600～800万円
防犯・防災・交通安全の活動	-	女性	20～30代	学生	未婚	-	-
要介護のお年寄りや障がい者の方などを助ける活動	-	男性	20～40代	正規職員	未婚	-	500～800万円 1,000万円～
まちづくり、地域振興の活動	-	女性	20～30代	専業主婦	未婚	-	-
環境美化、自然保護、リサイクル運動など環境保全の活動	-	-	20～40代	-	未婚	二世帯	-
運動・スポーツ活動	伊勢志摩	女性	30代	専業主婦 無職	未婚	-	-
文化芸術・趣味・娯楽活動	-	-	20～30代	-	未婚	-	100～200万円

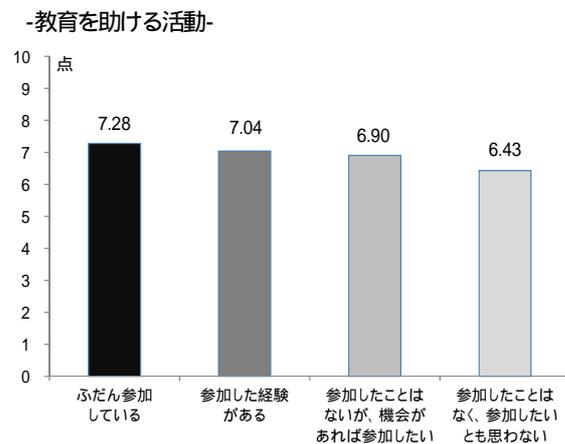
(備考) 『未経験（意欲なし）』の割合が県全体より高い属性項目で、統計的に有意な差(危険率5%未満)のものを記載しています。

3 地域活動への参画と幸福感の関係

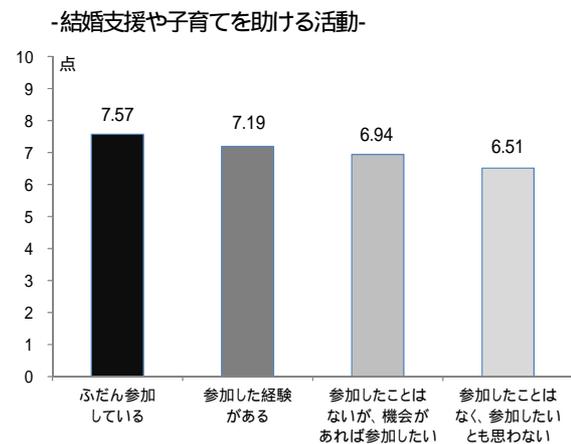
地域活動への参加状況・意欲と幸福感の関係を見ると、8項目中7項目で「ふだん参加している」方の幸福感の平均値が最も高く、すべての項目で「参加したくない」と回答した方の幸福感の平均値が最も低くなっており、全体的に地域活動への参加度合や意欲が高まるにつれ、幸福感の平均値も高まる傾向があります(図表4-2-7～図表4-2-14)

なお、「ふだん参加している」と「参加したくない」の平均値の差は、「結婚支援や子育てを助ける活動」が最も大きく(1.06点)なっています(図表4-2-8)

図表 4-2-7 幸福感の平均値(参加状況・意欲別)

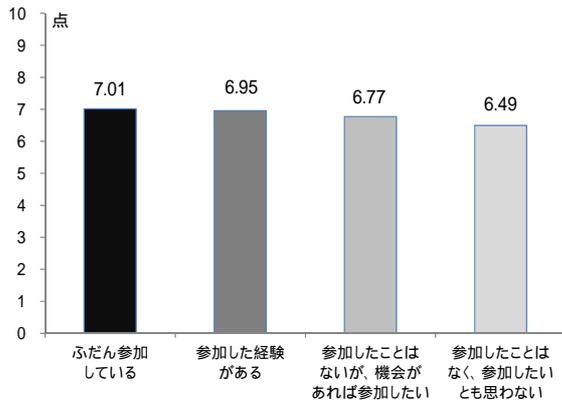


図表 4-2-8 幸福感の平均値(参加状況・意欲別)



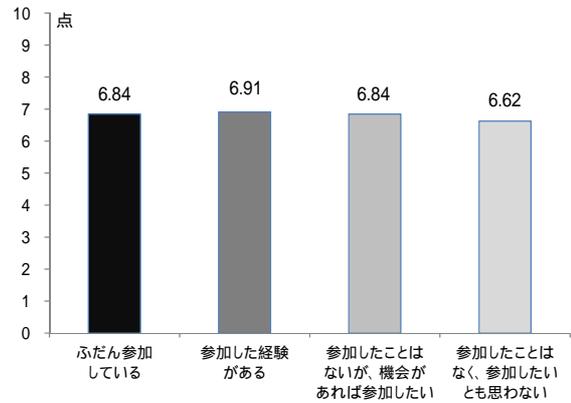
図表 4-2-9 幸福感の平均値(参加状況・意欲別)

-防犯・防災・交通安全の活動-



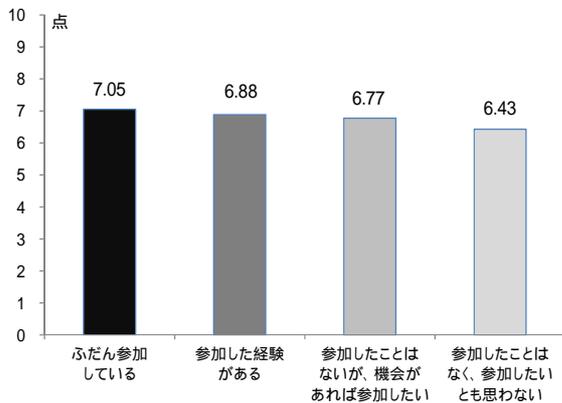
図表 4-2-10 幸福感の平均値(参加状況・意欲別)

-要介護のお年寄りや障がい者の方などを助ける活動-



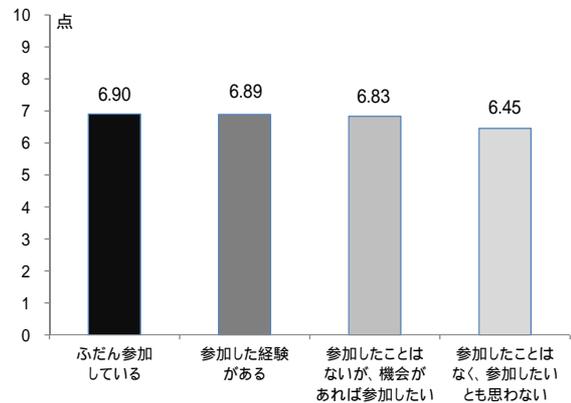
図表 4-2-11 幸福感の平均値(参加状況・意欲別)

-まちづくり、地域振興の活動-



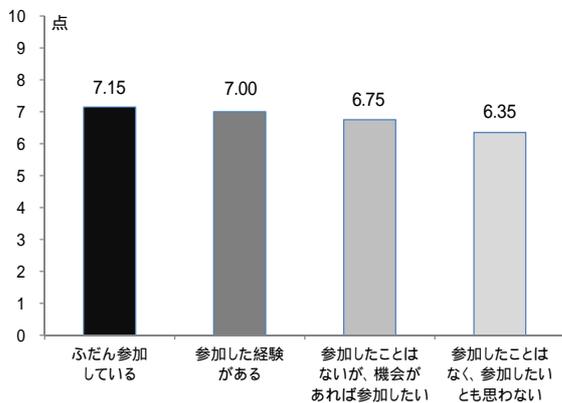
図表 4-2-12 幸福感の平均値(参加状況・意欲別)

-環境美化、自然保護、リサイクル運動など環境保全の活動-



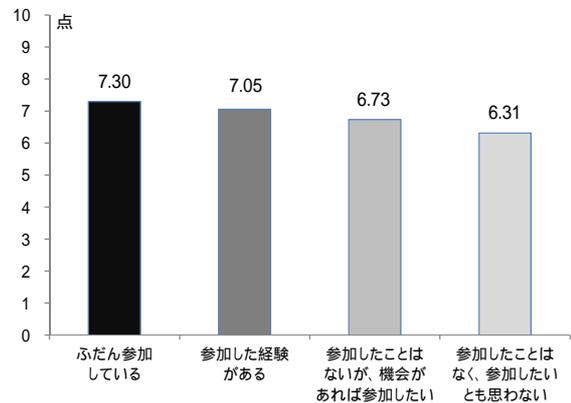
図表 4-2-13 幸福感の平均値(参加状況・意欲別)

-運動・スポーツ活動-



図表 4-2-14 幸福感の平均値(参加状況・意欲別)

-文化芸術・趣味・娯楽活動-

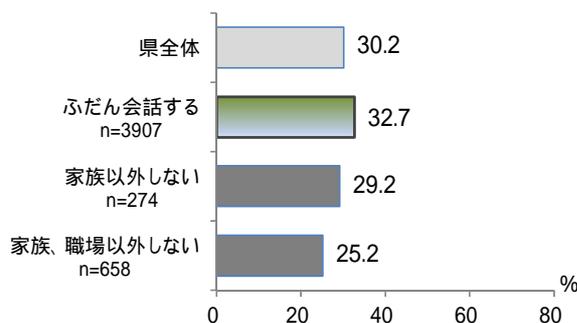


第3節 16の幸福実感指標との関係について

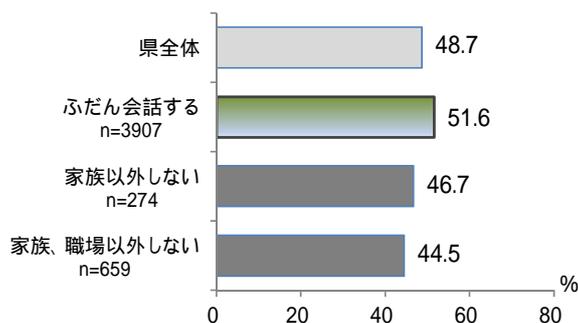
1 会話の頻度と幸福実感指標との関係

会話の頻度と各幸福実感指標の『実感している』割合の関係を見ると、16の幸福実感指標のすべてで『ふだん会話する』層が県全体よりも『実感している』割合が高くなっています(図表4-3-1~4-3-16)。県全体との差が最も大きいのは「自分の住んでいる地域に愛着があり、今後も住み続けたい」で、『ふだん会話』する層の実感が県全体を5.6ポイント上回っています(図表4-3-10)。

図表 4-3-1 会話の頻度別の「実感している」割合
(災害等の危機への備えが進んでいる)

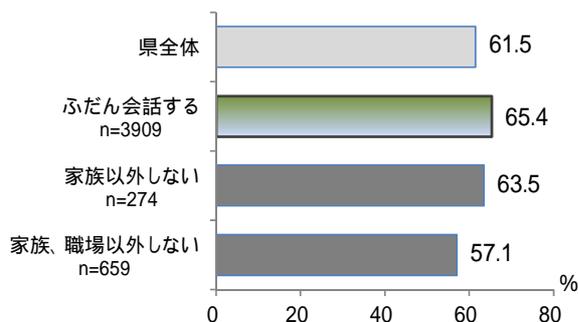


図表 4-3-2 会話の頻度別の「実感している」割合
(必要な医療サービスが利用できている)

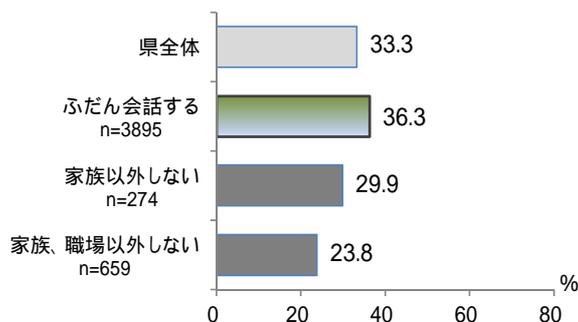


(備考) 「どの区分ともしない」、「職場以外しない」についてはサンプル数が少ないため、表記していません。

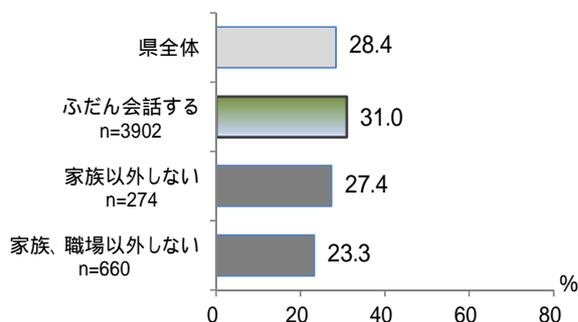
図表 4-3-3 会話の頻度別の「実感している」割合
(犯罪や事故が少なく安全に暮らせている)



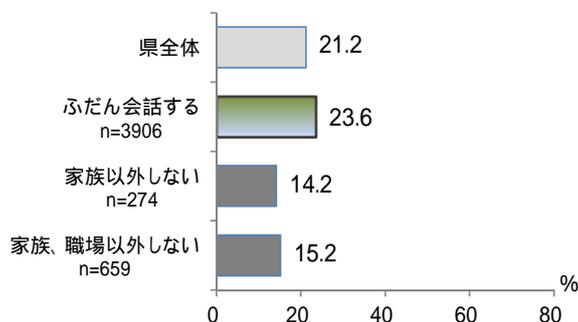
図表 4-3-4 会話の頻度別の「実感している」割合
(必要な福祉サービスが利用できている)



図表 4-3-5 会話の頻度別の「実感している」割合
(身近な自然や環境を守る取組が広がっている)

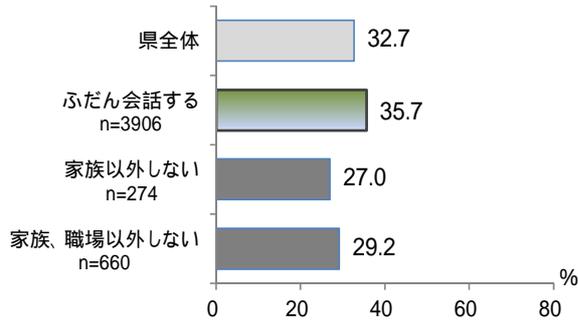


図表 4-3-6 会話の頻度別の「実感している」割合
(一人ひとりが尊重され、誰もが社会に参画できている)



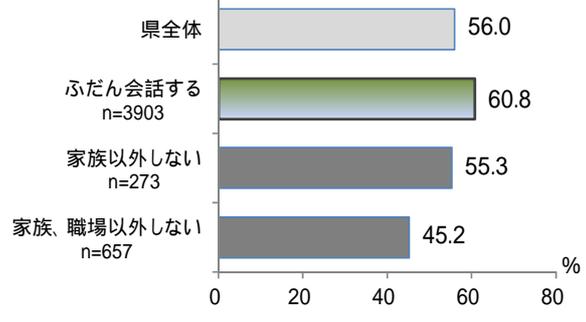
図表 4-3-7 会話の頻度別の「実感している」割合

(子どものためになる教育が行われている)



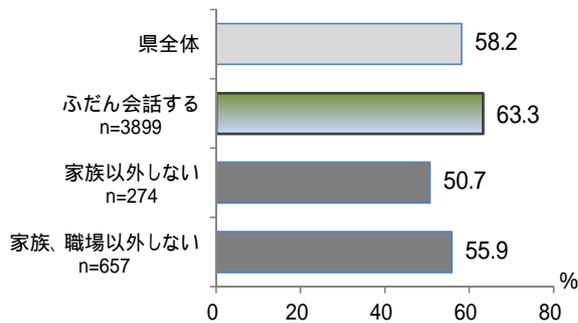
図表 4-3-8 会話の頻度別の「実感している」割合

(地域社会の見守りの中で、子どもが元気に育っている)



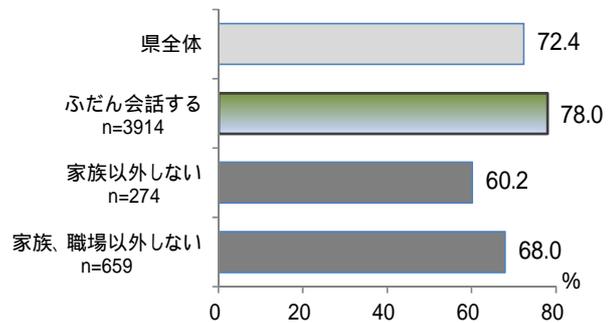
図表 4-3-9 会話の頻度別の「実感している」割合

(スポーツを通じて夢や感動が育まれている)



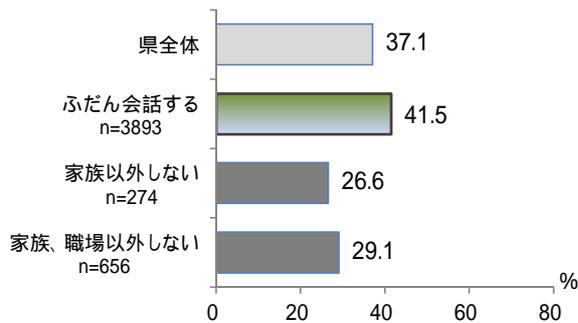
図表 4-3-10 会話の頻度別の「実感している」割合

(自分の住んでいる地域に愛着があり、今後も住み続けたい)



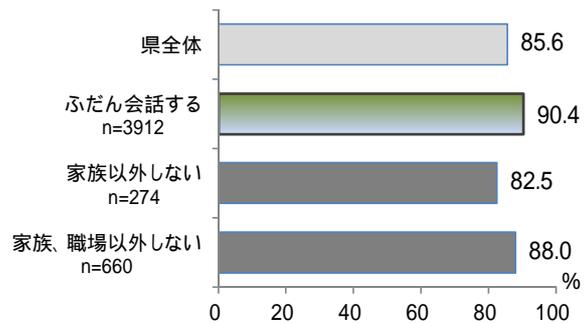
図表 4-3-11 会話の頻度別の「実感している」割合

(文化芸術や地域の歴史等について、学び親むことができる)



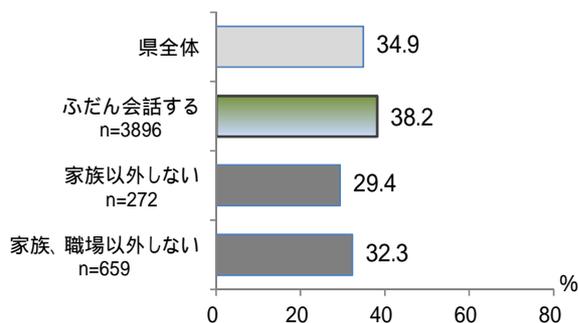
図表 4-3-12 会話の頻度別の「実感している」割合

(三重県産の農林水産物を買いたい)



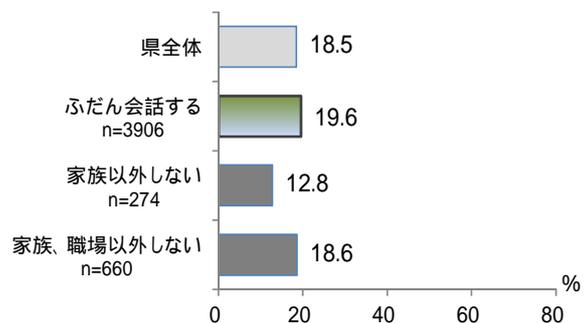
図表 4-3-13 会話の頻度別の「実感している」割合

(県内の産業活動が活発である)

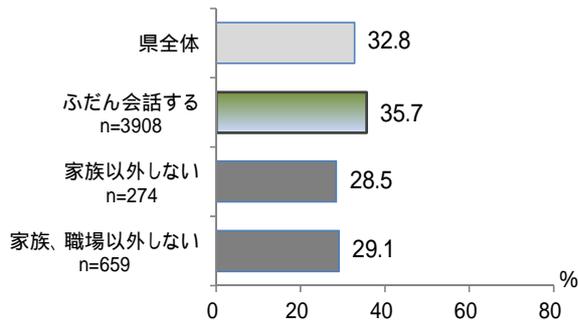


図表 4-3-14 会話の頻度別の「実感している」割合

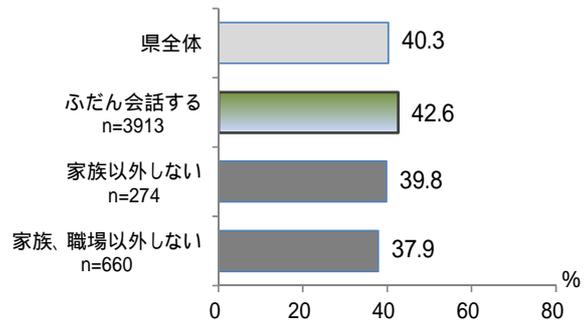
(働きたい人が仕事に就き、必要な収入を得ている)



図表 4-3-15 会話の頻度別の「実感している」割合
(国内外に三重県の魅力が発信され、交流が進んでいる)



図表 4-3-16 会話の頻度別の「実感している」割合
(道路や公共交通機関が整っている)



2 幸福実感指標と地域活動への参加状況との関係

16 の幸福実感指標の『実感している層』と『実感していない層』それぞれが、関連があると思われる地域活動にどの程度参加しているか、参加意欲があるのかをクロス集計したところ、すべての項目で『実感している層』の『参加経験』が『実感していない層』よりも高くなっています(図表 4-3-17 ~ 4-3-26)

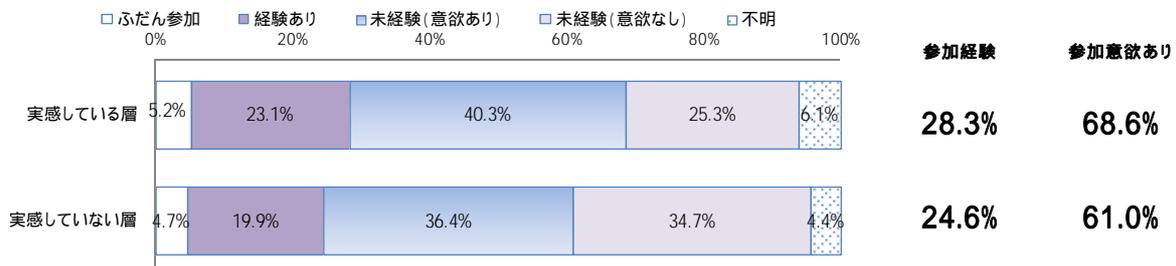
最も差が大きいのは「文化芸術や地域の歴史等について、学ぶ親しむことができる」の実感別の「文化芸術・趣味・娯楽活動」への参加経験で、実感している層と実感していない層で 16.7 ポイントの差があり(図表 4-3-26)、次いで「自分の住んでいる地域に愛着があり、今後も住み続けたい」の実感別の「まちづくり、地域振興の活動」への参加経験(13.5 ポイント差)となっています(図表 4-3-23)。

また、『参加意欲あり』()についても、すべての項目で『実感している層』が『実感していない層』よりも高くなっています(図表 4-3-17 ~ 4-3-26)。

『参加意欲あり』...『参加経験』に『未経験(意欲あり)』を加えた割合

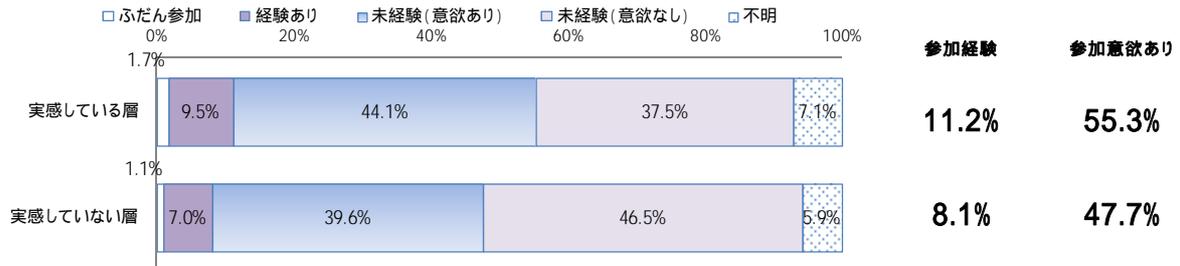
(1) 「子どものためになる教育が行われている」と「教育を助ける活動」

図表 4-3-17 幸福実感指標「子どものためになる教育が行われている」の実感別の「教育を助ける活動」への参加割合



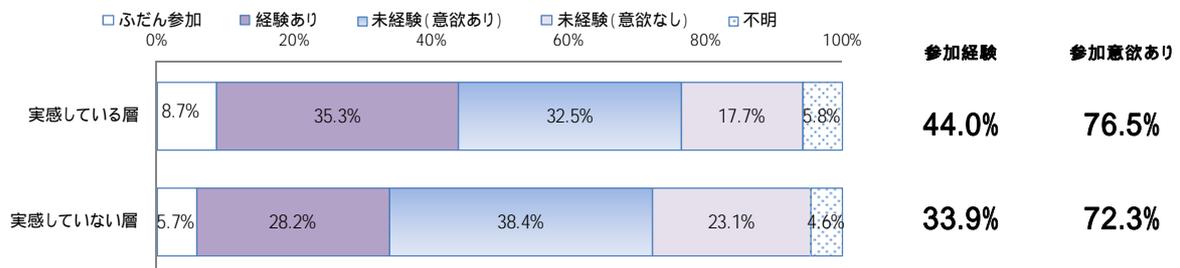
(2) 「地域社会の見守りの中で、子どもが元気に育っている」と「結婚支援や子育てを助ける活動」

図表 4-3-18 幸福実感指標「地域社会の見守りの中で、子どもが元気に育っている」の実感別の「結婚支援や子育てを助ける活動」への参加割合



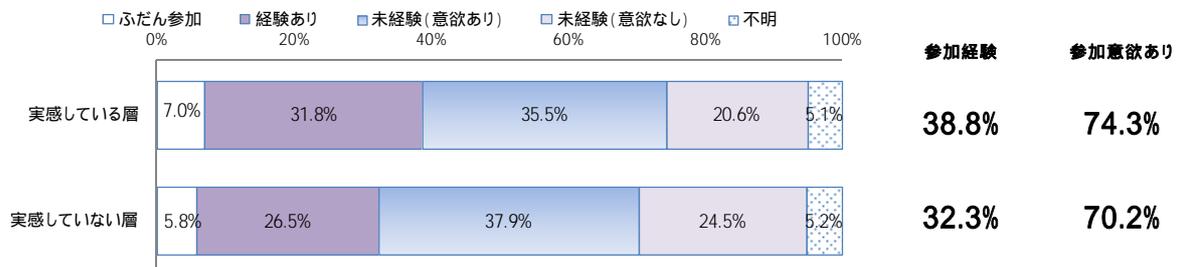
(3) 「災害等の危機への備えが進んでいる」と「防犯・防災・交通安全の活動」

図表 4-3-19 幸福実感指標「災害等の危機への備えが進んでいる」の実感別の「防犯・防災・交通安全の活動」への参加割合



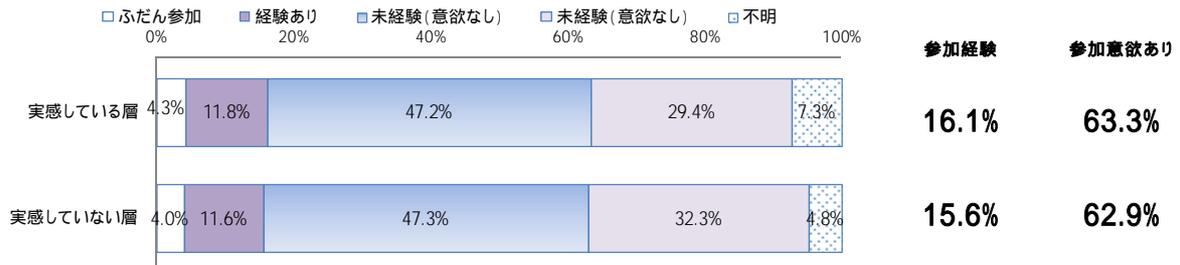
(4) 「犯罪や事故が少なく、安全に暮らせている」と「防犯・防災・交通安全の活動」

図表 4-3-20 幸福実感指標「犯罪や事故が少なく、安全に暮らせている」の実感別の「防犯・防災・交通安全の活動」への参加割合



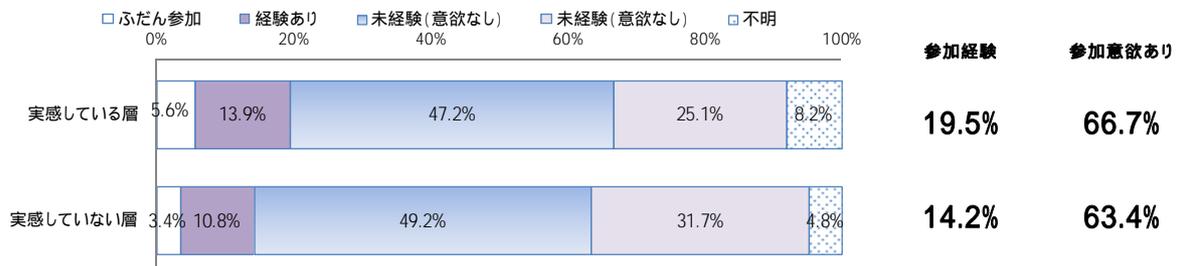
(5) 「必要な医療サービスが利用できている」と「要介護のお年寄りや障がい者の方などを助ける活動」

図表 4-3-21 幸福実感指標「必要な医療サービスが利用できている」の実感別の「要介護のお年寄りや障がい者の方などを助ける活動」への参加割合



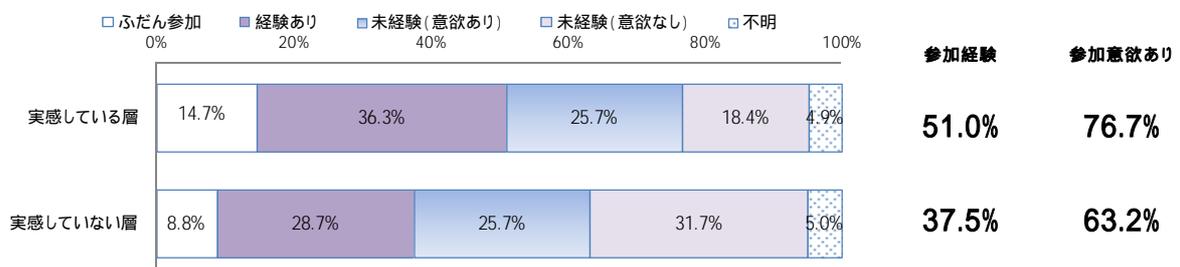
(6) 「必要な福祉サービスが利用できている」と「要介護のお年寄りや障がい者の方などを助ける活動」

図表 4-3-22 幸福実感指標「必要な福祉サービスが利用できている」の実感別の「要介護のお年寄りや障がい者の方などを助ける活動」への参加割合



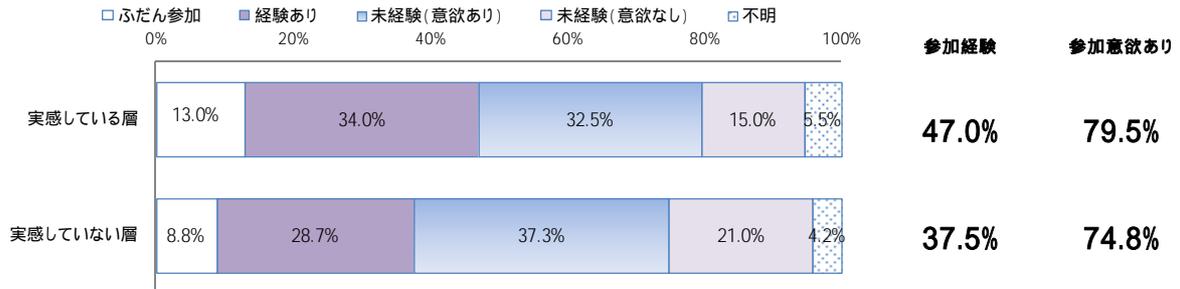
(7) 「自分の住んでいる地域に愛着があり、今後も住み続けたい」と「まちづくり、地域振興の活動」

図表 4-3-23 幸福実感指標「自分の住んでいる地域に愛着があり、今後も住み続けたい」の実感別の「まちづくり、地域振興の活動」への参加割合



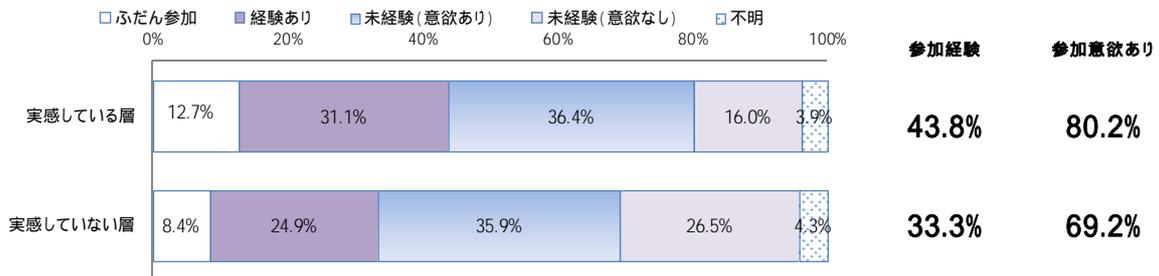
(8) 「身近な自然や環境を守る取組が広がっている」と「環境美化、自然保護、リサイクル運動など環境保全の活動」

図表 4-3-24 幸福実感指標「身近な自然や環境を守る取組が広がっている」の実感別の「環境美化、自然保護、リサイクル運動など環境保全の活動」への参加割合



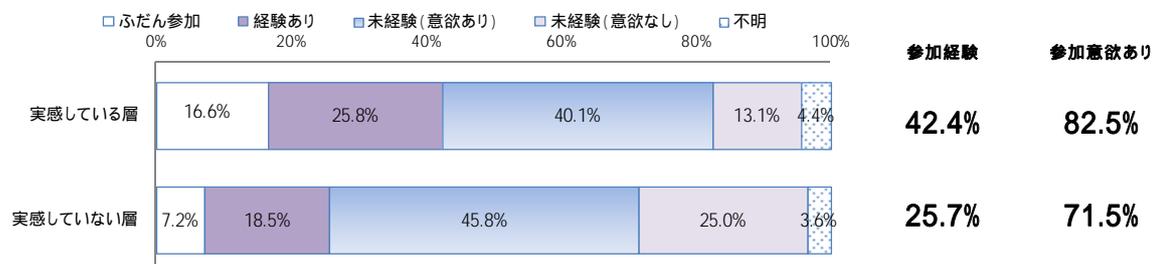
(9) 「スポーツを通じて夢や感動が育まれている」と「運動・スポーツ活動」

図表 4-3-25 幸福実感指標「スポーツを通じて夢や感動が育まれている」の実感別の「運動・スポーツ活動」への参加割合



(10) 「文化芸術や地域の歴史等について、学び楽しむことができる」と「文化芸術・趣味・娯楽活動」

図表 4-3-26 幸福実感指標「文化芸術や地域の歴史等について、学び楽しむことができる」の実感別の「文化芸術・趣味・娯楽活動」への参加割合



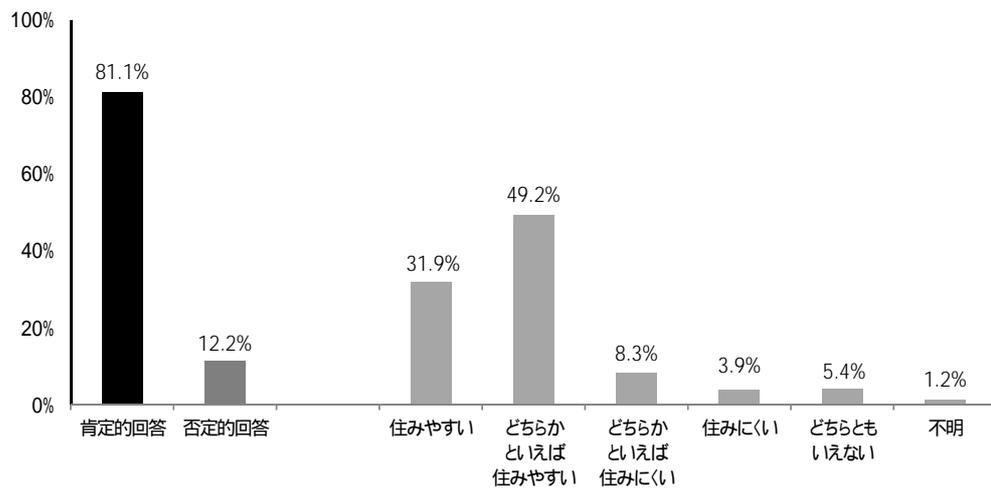
第4節 地域の住みやすさについて

1 県全体の傾向

地域の住みやすさについて質問したところ、県全体では、「住みやすい」が31.9%、「住みやすい」と「どちらかといえば住みやすい」を合計した『肯定的回答』が81.1%となっています(図表4-4-1)。

また、属性別に全体との差を見ると、地域や世帯収入など属性により、肯定的回答の割合に差が見られます(図表4-4-2)。

図表 4-4-1 地域の住みやすさについて(全体)



図表 4-4-2 「肯定的回答」の回答割合の特徴がある属性項目

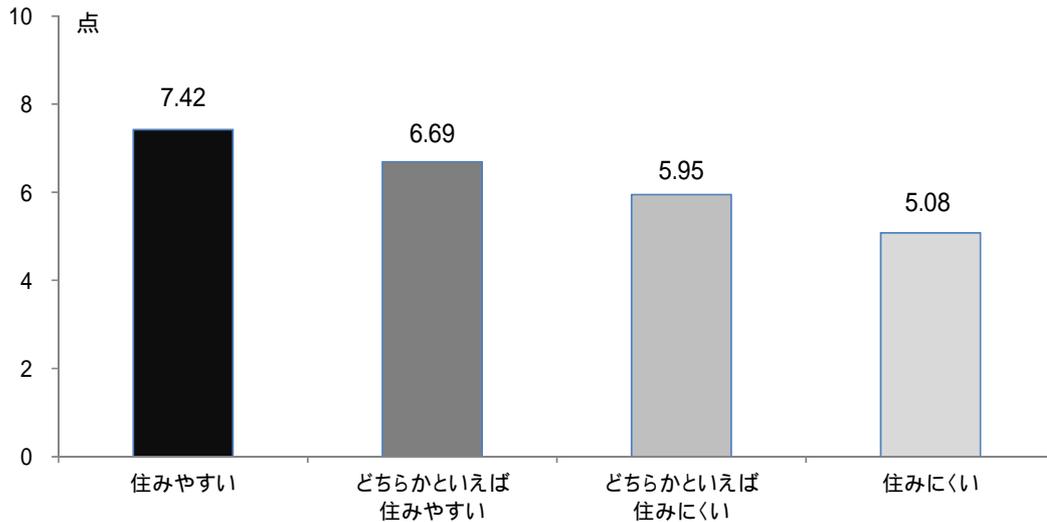
割合が高い	割合が低い
北勢地域 男性 自営業・自由業、正規職員 500万円～	伊賀地域、伊勢志摩地域、東紀州地域 40歳代 無職 離別・死別 単独世帯 0～200万円

(備考)「割合が高い」は、『肯定的回答』の割合が県全体より高い属性項目で、「割合が低い」は、『肯定的回答』の割合が県全体より低い属性項目で、いずれの差も統計的に有意な水準(危険率5%未満)のものを記載しています。また、金額は世帯の年間収入です。

2 地域の住みやすさと幸福感との関係

地域の住みやすさについての回答別に幸福感との関係を見ると、肯定的な回答をした方が幸福感の平均値が高くなっています（図表4-4-3）。

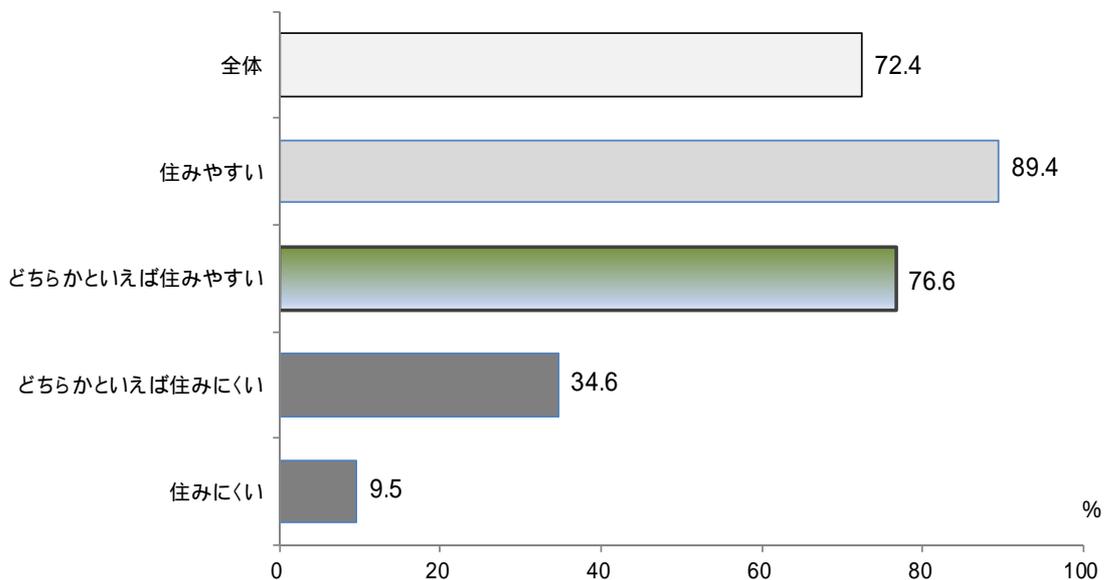
図表 4-4-3 幸福感の平均値（地域の住みやすさの回答別）



3 地域の住みやすさと幸福実感指標との関係

地域の住みやすさについての回答と幸福実感指標「地域に愛着があり、今後も住み続けたい」との関係を見ると、地域の住みやすさに肯定的な回答をされた方ほど、実感している割合が高くなる傾向が見られます（図表4-4-4）。

図表 4-4-4 地域の住みやすさの回答別「実感している」割合



第5章

働き方と幸福実感

この章では、「女性の就労」や「希望の就業時間と実際の就業時間」など、幸福実感との関連が一定あると考えられる働き方に関する質問の分析、また、働き方に関連して、通勤時間や生活に関わる悩みや不安等についての分析を記載しています。

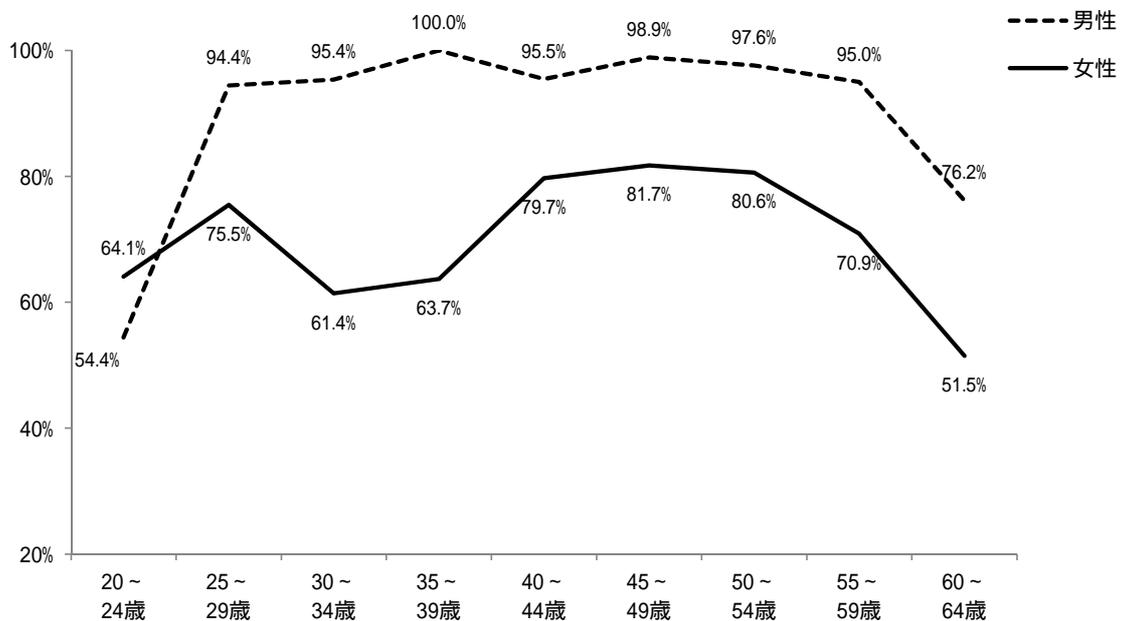
第1節 女性の就労

1 女性の就業状況

20～64歳を対象に年齢(5歳階級)別有業率を見ると、男性は20代後半から50代まで90%を超える台形型、女性は30代を底とするいわゆるM字型となっています(図表5-1-1)。

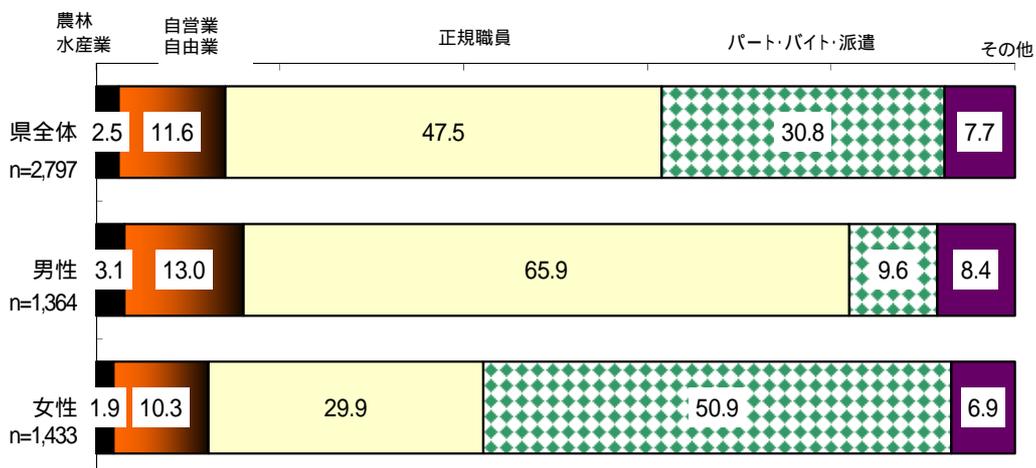
また、有業者の職業別割合を見ると、男性では「正規職員」(65.9%)が最も高いのに対し、女性では「パート・アルバイト・派遣社員など」(50.9%)が最も高くなっています(図表5-1-2)。

図表 5-1-1 性別有業率(年齢(5歳階級)別)



(備考) 農林水産業、自営業・自由業、正規職員、パート・アルバイト・派遣社員など、その他職業を有業とした。

図表 5-1-2 有業者の性別・職業別割合(20～64歳)



2 女性就労についての考え方

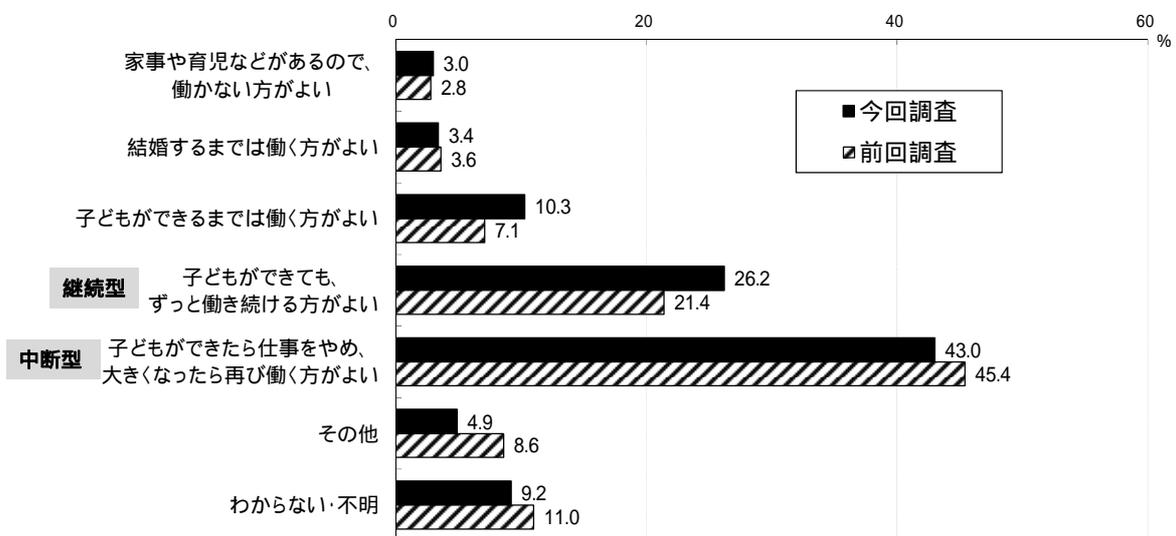
(1) 全般的事項

前回調査に続いて、女性就労に対する考え方について「女性が働く（収入のある仕事をする）ことについてどう思うか」質問したところ、「子どもができたら仕事をやめ、大きくなったら再び働くほうがよい」の『中断型』が43.0%と最も高く、次いで「子どもができて、ずっと働き続けるほうがよい」の『継続型』（26.2%）と、前回調査と同様に『中断型』の割合が『継続型』よりも高くなっています（図表5-1-3）。

『継続型』と『中断型』の違いはあっても、子どもができて以降も働く方がよいという考え方が前回も今回も圧倒的に多い結果と考えられます。

なお、調査方法等が同一ではないことから、単純な比較はできませんが、国の調査では『継続型』の割合が最も高くなっています。（図表5-1-4）

図表 5-1-3 女性就労についての考え方(県全体・前回調査との比較)



図表 5-1-4 参照した国の調査

男女共同参画社会に関する世論調査（内閣府、平成24年10月、有効回収数3,033、個別面接聴取法）
 （質問）一般的に女性が職業をもつことについて、あなたはどのようにお考えですか。
 （回答）（ア）女性は職業をもたない方がよい（3.4%）
 （イ）結婚するまでは職業をもつ方がよい（5.6%）
 （ウ）子どもができるまでは、職業をもつ方がよい（10.0%）
 （エ）子どもができて、ずっと職業を続ける方がよい（47.5%）
 （オ）子どもができたら職業をやめ、大きくなったら再び職業をもつ方がよい（30.8%）
 その他（1.4%） わからない（1.3%）

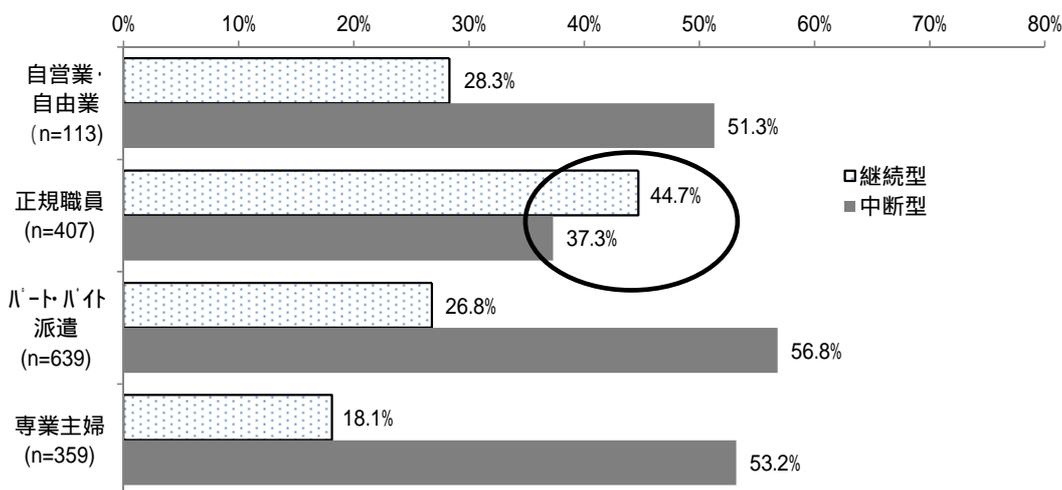
(2) 実際に働いている女性等の考え方

本人の職業別の考え方

20～59歳の女性について、本人の職業別に女性就労に対する考え方を見ると、正規職員は『継続型』が『中断型』よりも高い割合となっています（図表5-1-5）。

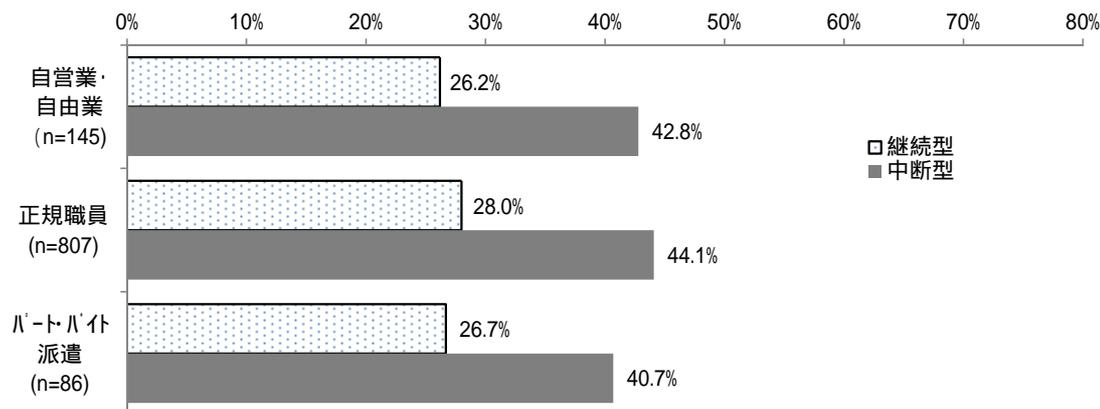
なお、20～59歳の男性について、本人の職業別に見ると、すべて『中断型』が『継続型』を上回っています（図表5-1-6）。

図表 5-1-5 女性（20～59歳）の女性就労についての考え方（本人の職業別）



- (備考) 1 nは全体のサンプル数を示し、割合は表記を省略した他の回答や不明を含めて算出しています。
 2 上記以外の区分については、サンプル数が少ないため、表記を省略しています。

図表 5-1-6 男性（20～59歳）の女性就労についての考え方（本人の職業別）



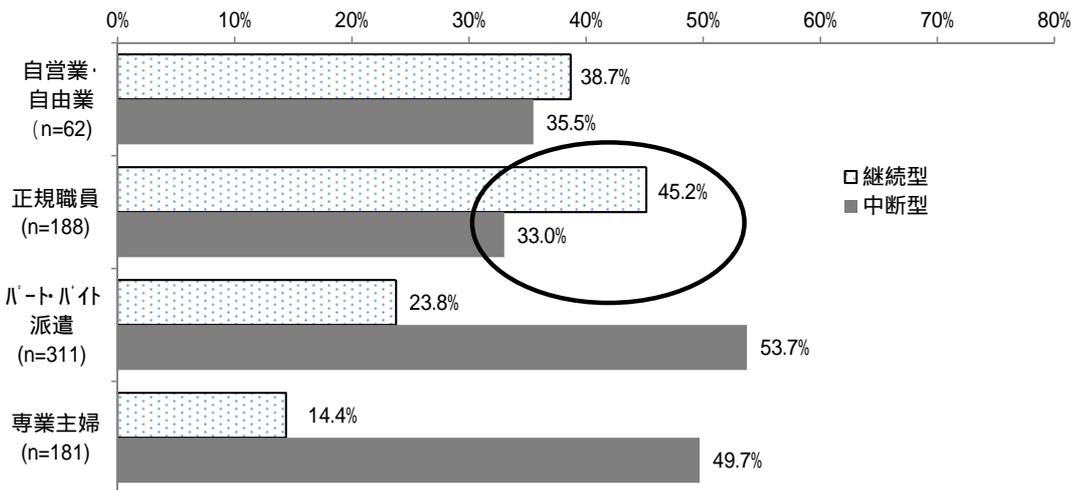
- (備考) 1 nは全体のサンプル数を示し、割合は表記を省略した他の回答や不明を含めて算出しています。
 2 上記以外の区分については、サンプル数が少ないため、表記を省略しています。

配偶者の職業別の考え方

20～59歳の男性について、配偶者の職業別に女性就労に対する考え方を見ると、配偶者が正規職員、自営業・自由業の場合は『継続型』が『中断型』よりも高い割合となっています(図表5-1-7)。

また、20～59歳の女性について、配偶者の職業別に見ると、配偶者がパート・アルバイト・派遣社員など、無職の場合には『中断型』と『継続型』が近い割合になっています(図表5-1-8)。

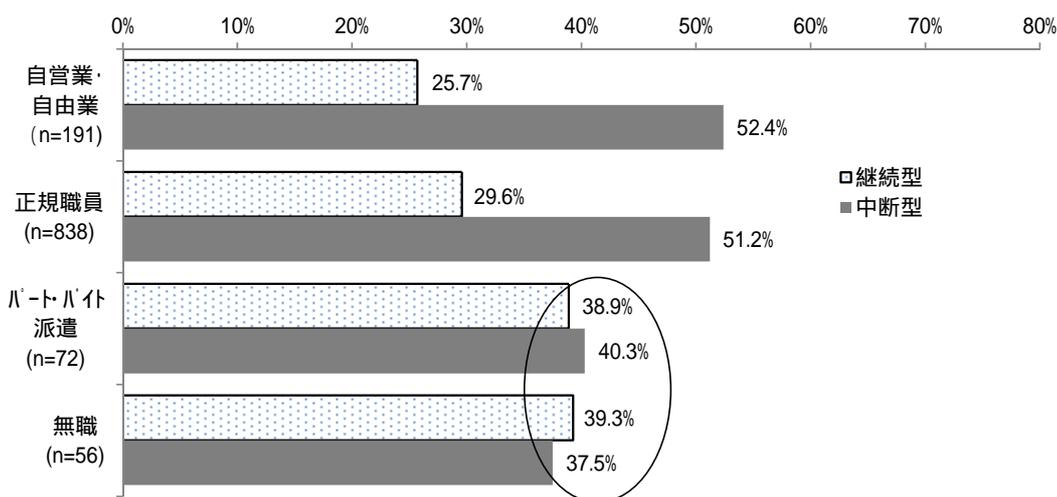
図表 5-1-7 男性(20～59歳)の女性就労についての考え方(配偶者の職業別)



(備考) 1 nは全体のサンプル数を示し、割合は表記を省略した他の回答や不明を含めて算出しています。

2 上記以外の職業については、サンプル数が少ないため、表記を省略しています。

図表 5-1-8 女性(20～59歳)の女性就労についての考え方(配偶者の職業別)

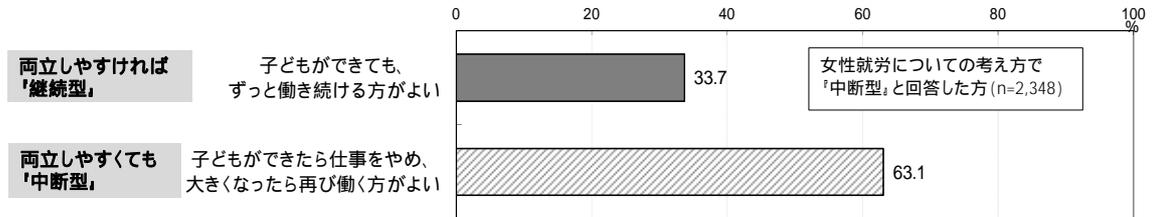


(3) 仕事と子育てが両立しやすい場合の考え方

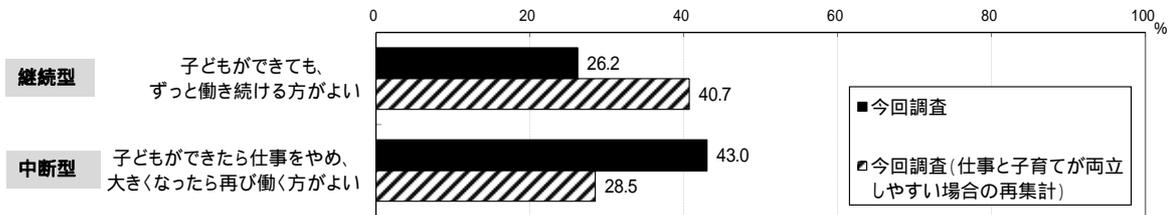
今回調査では新たに『中断型』と回答した方を対象に「もし現在よりも、仕事と子育ての両立がしやすい環境にあるとするならば、『継続型』と『中断型』のどちらを選択するかを質問しています。その結果、両立しやすければ『継続型』という回答が33.7%、両立しやすくても『中断型』という回答が63.1%でした(図表5-1-9)

なお、再質問の結果を当初回答に含めて再集計すると『継続型』が40.7%(+14.5ポイント)、『中断型』が28.5%(-14.5ポイント)という結果になっています(図表5-1-10)

図表 5-1-9 女性就労についての考え方(仕事と子育てが両立しやすい場合)



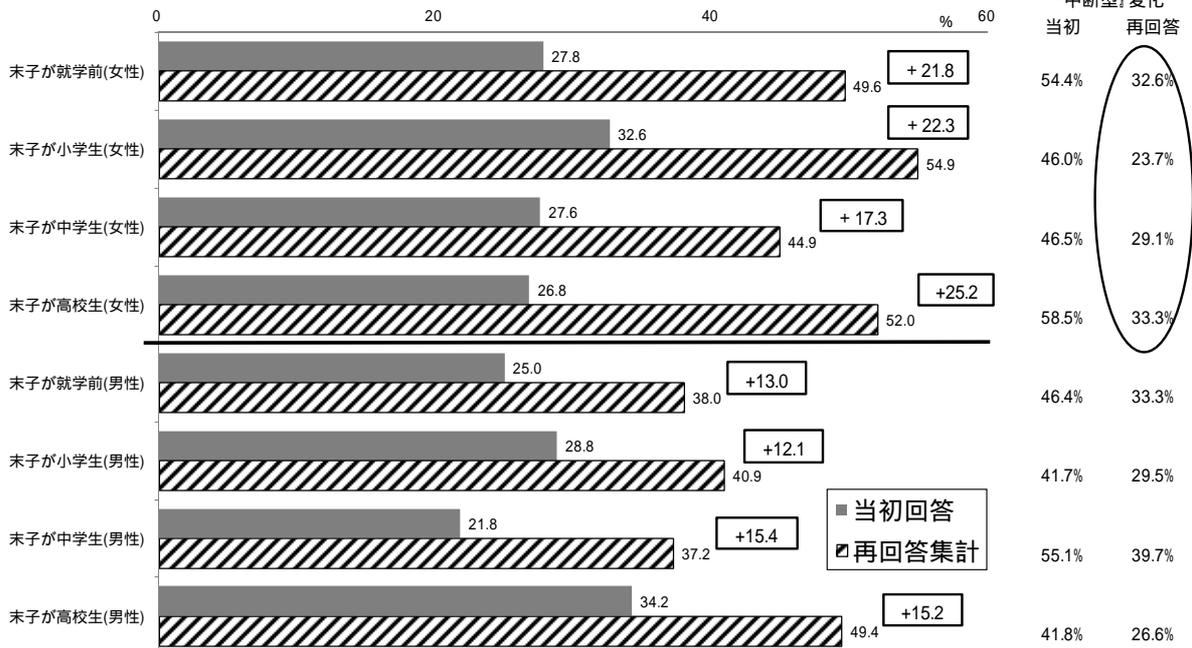
図表 5-1-10 女性就労についての考え方(仕事と子育てが両立しやすい場合の再質問を含めた集計・全体)



子育て世代の割合の変化

現在、子どもをお持ちの方について、性別に再集計結果を見ると、男女とも継続型の割合が増加していますが、高校生までの子どもを持つ女性については、県全体(14.5ポイント増)よりも大きく『継続型』の割合が増加しています。一方、両立しやすくても『中断型』という回答が、再集計後で23.7%~33.3%の割合でした(図表5-1-11)

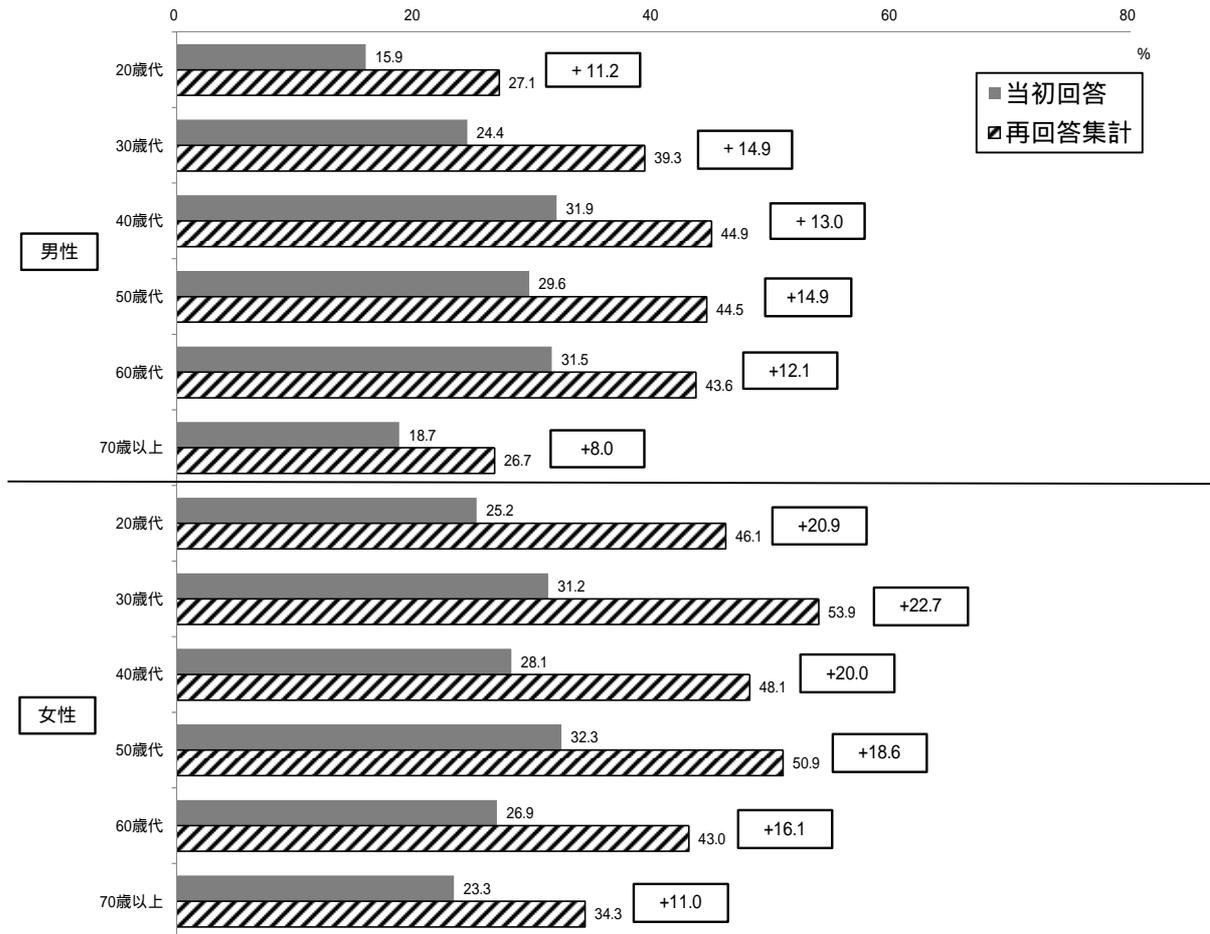
図表 5-1-11 子どもがいる方の再質問による『継続型』の割合変化(性別)



『継続型』割合の変化の特徴

子育て世代に限らず、性・年齢別の再質問による『継続型』の割合変化を見ると、男性の増加幅が8.0ポイントから14.9ポイントであるのに対し、女性は20～40歳代で20ポイント以上増加するなど、各年齢層において女性の増加幅が男性よりも大きくなっています（図表5-1-12）。

図表 5-1-12 再質問による『継続型』の割合変化（性別・年齢（10歳階級）別）



第2節 現実の働き方と希望する働き方

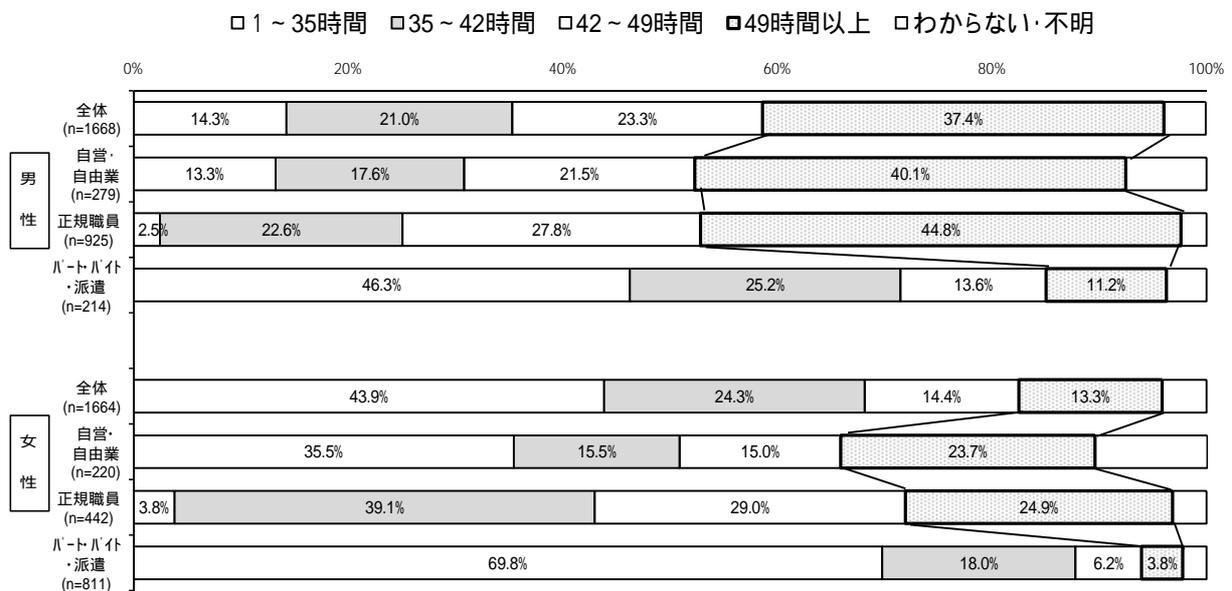
1 就業時間の特徴

(1) 長時間労働の状況

一週間の平均的な就業時間を性別で見ると、男性では「49時間以上」(37.4%)の割合が最も高く、女性では「1~35時間未満」(43.9%)が最も高くなっており、男女で就業時間に差がみられます。さらに性・職業別に見ると、男性の自営業・自由業及び正規職員では、49時間以上が4割を超え、長時間労働の割合が高くなっています(図表5-2-1)。

また、49時間以上と回答された割合が高い属性についても、男性、20~40歳代、正規職員、未婚などとなっています(図表5-2-2)。

図表 5-2-1 一週間の平均的な就業時間(性・主な職業別)



- (備考) 1 各区分の割合について、10%未満については、記入を省略しています。
 2 農林水産業については、サンプル数が少ないため、記載をしていません。

図表 5-2-2 実際の就業時間について特徴のある属性項目

35時間未満		35~42時間未満		42~49時間未満		49時間以上	
割合が低い	割合が高い	割合が低い	割合が高い	割合が低い	割合が高い	割合が低い	割合が高い
男性 20~30、50代	女性 60以上	30代、70~	60代	女性 40代、60~	男性 20~30、50代	女性 60~	男性 20~40代
自営、正規	農林、パート等	自営、パート等	正規	農林、パート等	正規	農林、自営、パート等	正規
未婚	有配偶		未婚		未婚		未婚
単独	一世代					単独	
600万円~	~300万円	~100万円	1000万円~	100~200万円		~300万円	600~800万円、1000万円以上

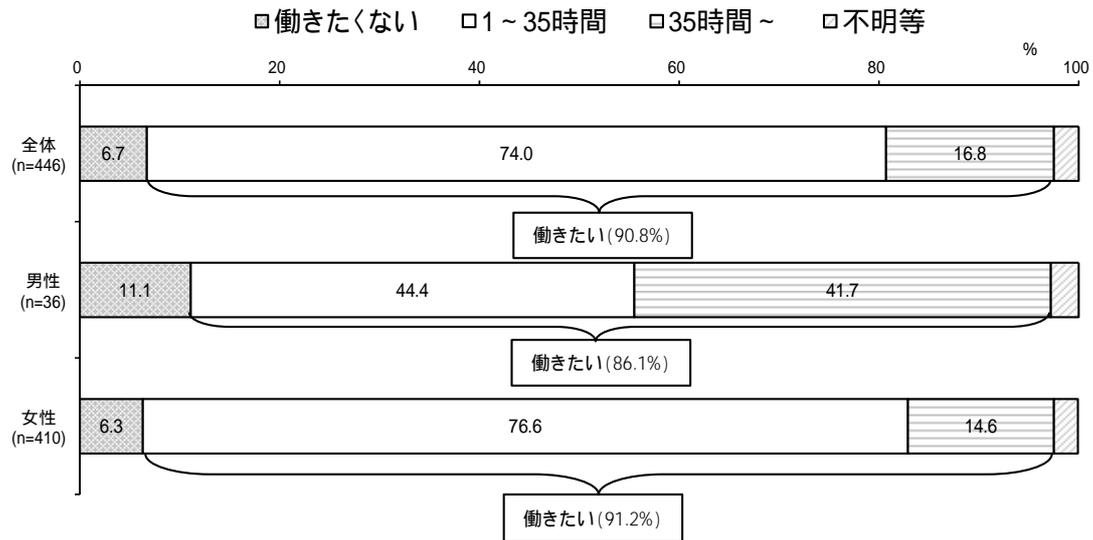
- (備考) 1 「割合が低い」は、各就業時間の回答割合が県全体より低い属性項目で、「割合が高い」は、各就業時間の回答割合が県全体より高い属性項目で、いずれの差も統計的に有意な水準(危険率5%未満)のものを記載しています。
 2 金額は世帯の年間収入です。

2 現在収入のある仕事に就いていない方の就労希望

(1) 60歳までの就労希望

20～50歳代で、現在は収入のある仕事に就いていない方の希望する就業時間を見ると、全体では90.8%、男性の86.1%、女性の91.2%が働きたいという回答がありました。なお、希望する時間は女性の76.6%が「1～35時間未満」のパートタイム相当の時間となっています(図表5-2-3)。

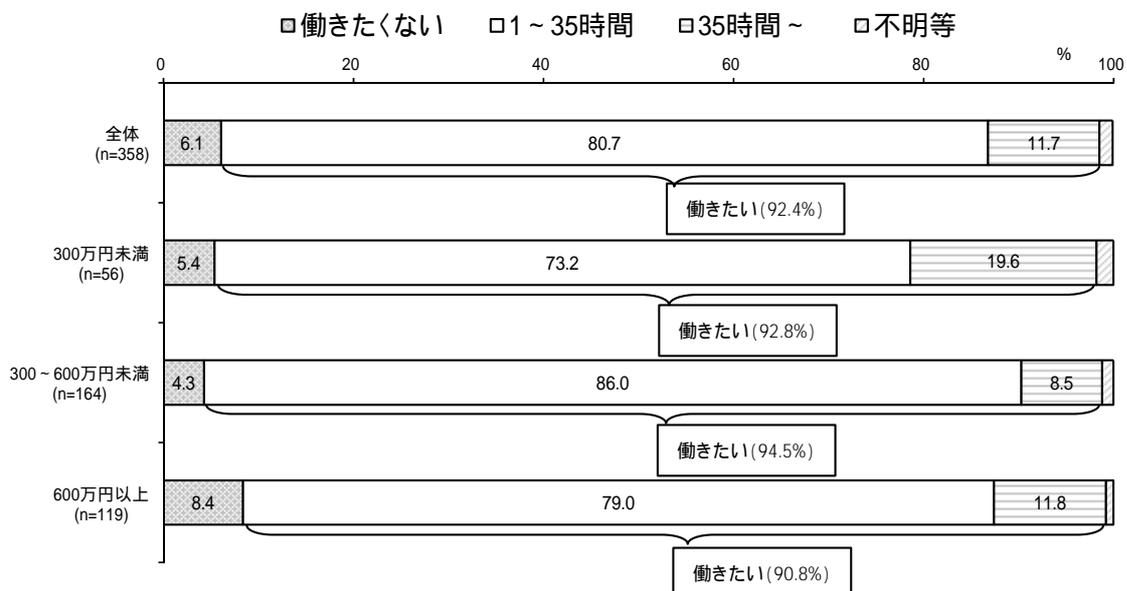
図表 5-2-3 20～50歳代の収入のある仕事に就いていない方の希望就業時間(性別)



(備考) 専業主婦・主夫及び無職を対象に集計しています。

また、そのうち、専業主婦に相当する有配偶の女性について世帯年収別に希望就業時間を見ると、300万円未満の層でフルタイム相当の35時間以上の希望が多くなっています。また、600万円以上の層でも90.8%が働くことと希望しています(図表5-2-4)。

図表 5-2-4 有配偶の女性で収入のある仕事に就いていない方の希望就業時間(20～59歳)(世帯年収別)

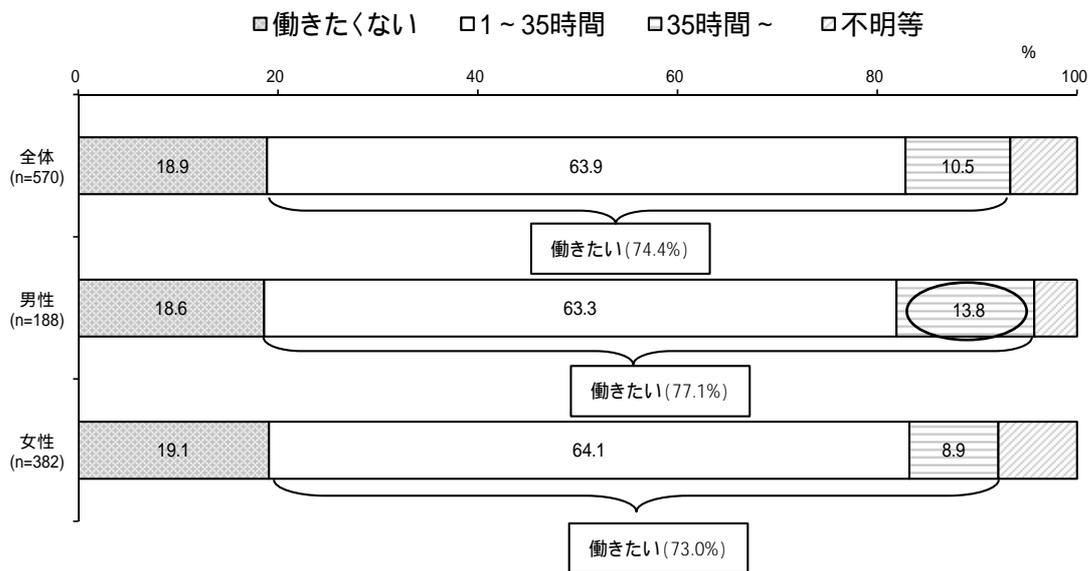


(2) 高齢者の就労希望

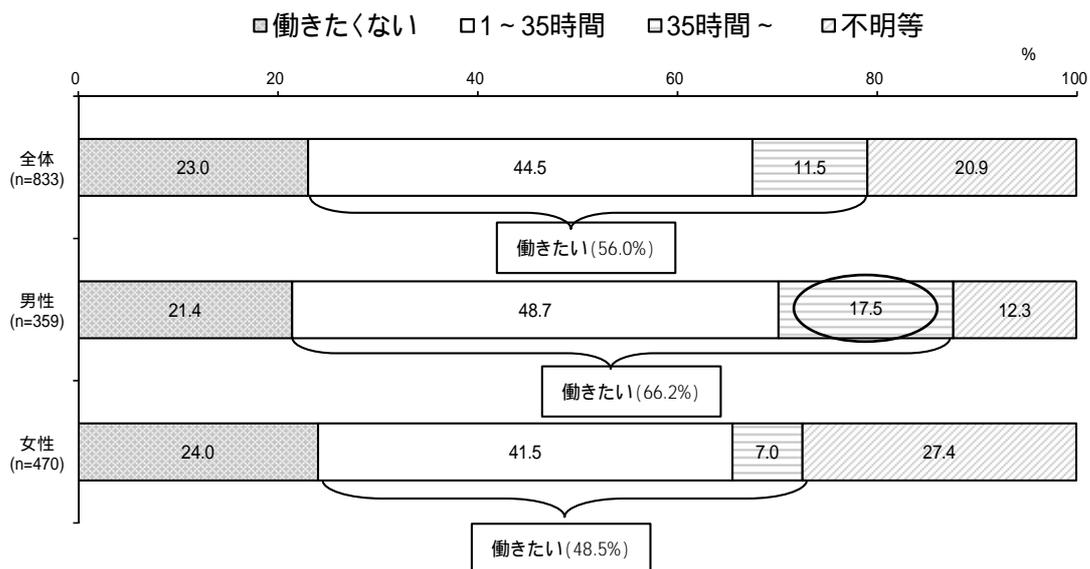
60歳代で現在は収入のある仕事に就いていない方の希望する就業時間を見ると、全体では74.4%、男性の77.1%、女性の73.0%が働きたいという回答があり、男性の13.8%は35時間以上のフルタイム相当の時間を希望しています(図表5-2-5)

また、同様に70歳以上の希望する就業時間を見ると、全体では56.0%、男性の66.2%、女性の48.5%が働きたいという回答であり、男性の17.5%はフルタイム相当の時間を希望しています(図表5-2-6)

図表 5-2-5 60歳代の収入のある仕事に就いていない方の希望就業時間(性別)



図表 5-2-6 70歳以上の収入のある仕事に就いていない方の希望就業時間(性別)



3 就労に関する平均時間

(1) 平均希望就業時間

希望する就業時間の平均値を性別に見ると、男性が33.0時間、女性が25.1時間となっており、特に、就学前の子ども、学齢期の子どもを持つ層において、男女差が大きくなっています。

また、年齢別に見ると、男性の平均希望就業時間は20歳代から50歳代までほぼ変わりありませんが、女性の30歳代から50歳代までは男性よりも10時間程度少なくなっています(図表5-2-7)。

図表 5-2-7 平均希望就業時間(性別)

単位:時間

		男性	女性	計
1	全体	33.0	25.1	28.5
2	実際の就業時間別			
	就業していない	19.5	17.1	17.9
	1~35時間(パートタイム相当)	25.3	24.4	24.5
	35時間以上(フルタイム相当)	39.3	35.4	37.8
3	末子の年齢別			
	就学前	40.4	26.6	32.3
	学齢期(小学生~高校生)	40.6	29.1	33.4
	上記以外	31.0	24.0	27.2
4	年齢(10歳階級)別			
	20歳代	38.8	35.1	36.7
	30歳代	39.8	28.2	33.0
	40歳代	40.7	29.5	33.8
	50歳代	37.9	28.3	32.5
	60歳代	28.6	20.5	24.2
	70歳以上	21.9	15.5	18.6

(備考) 1 平均希望就業時間の算出にあたっては、希望する就業時間の各区分の中間値を使用して平均値を算出しています。その際に、「働きたくない」は0、「60時間以上」は65としています。

2 実際の就業時間別の「就業していない」は「専業主婦・主夫」及び「無職」の合計です。

(2) 平均就業時間

現在、実際に収入のある仕事に就いている方の就業時間の平均値を性別に見ると、男性が45.1時間、女性が34.1時間となっています。特に、就学前の子ども、学齢期の子どもを持つ層において、男女差が大きくなっており、20時間程度の差があります。

また、年齢別に見ると、男性の平均就業時間は20歳代から50歳代までほぼ変わりありませんが、女性の30歳代から50歳代までは男性よりも15時間程度少なくなっています(図表5-2-8)。

図表 5-2-8 平均就業時間(性別)

単位: 時間				
		男性	女性	計
1	全体	45.1	34.1	39.6
2	末子の年齢別			
	就学前	52.2	32.3	43.8
	学齢期(小学生～高校生)	50.5	31.8	39.8
	上記以外	42.6	35.1	38.9
3	年齢(10歳階級)別			
	20歳代	47.6	41.9	44.6
	30歳代	50.1	35.1	43.0
	40歳代	51.3	33.6	41.1
	50歳代	47.4	34.7	40.9
	60歳代	37.2	31.1	34.6
	70歳以上	32.1	28.9	30.8

(備考) 1 平均就業時間の算出にあたっては、現在の就業時間の各区分の中間値を使用して平均値を算出しています。

なお、60時間以上については、65として計算しています。

2 平均値の算出にあたっては、現在働いていない人や「わからない」という回答は含めていません。

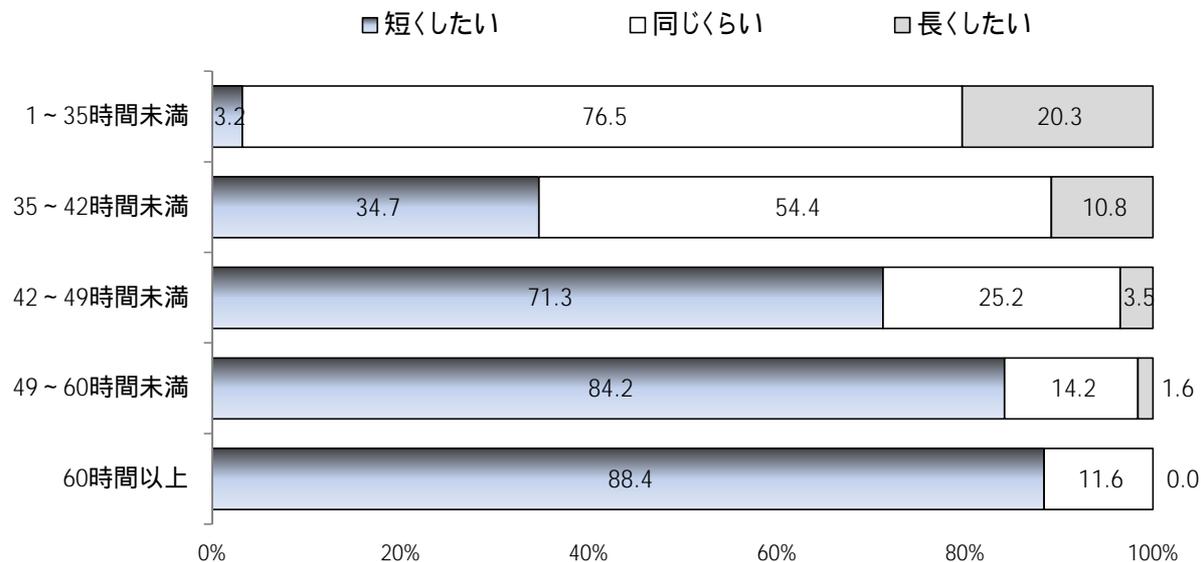
4 就業時間の希望と実際

(1) 希望する就業時間と現在の就業時間の関係

現在、収入のある仕事に就いている方について、希望と現在の就業時間を比較したところ、現在の就業時間が長くなるほど、就業時間を短くしたいと希望する割合が増加傾向にあります（図表 5-2-9）

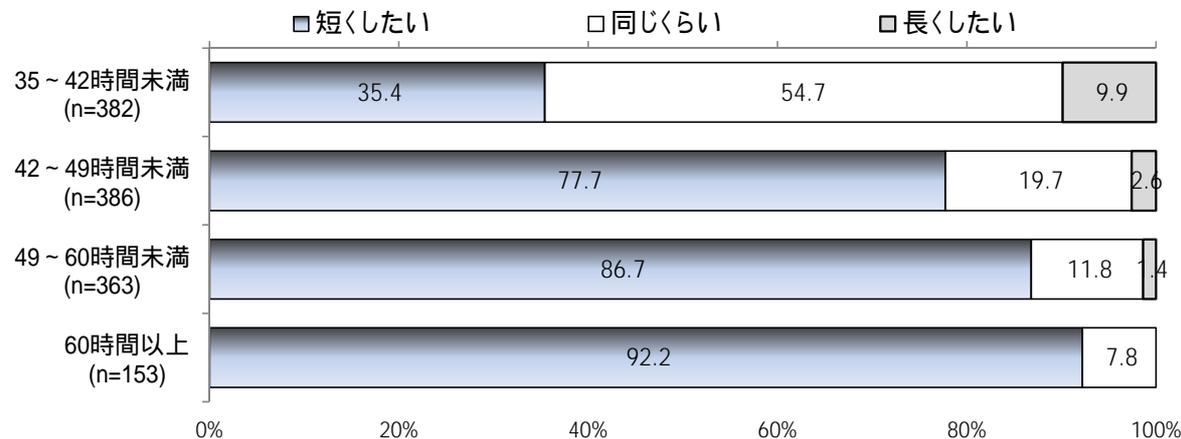
また、正規職員についても同様の傾向があり、特に 60 時間以上働いている方の 9 割以上が就業時間を短くしたいと希望しています（図表 5-2-10）

図表 5-2-9 希望する就業時間(現在の就業時間別)



- (備考) 1 主な職業が農林水産業、自営業・自由業、正規職員、パート・アルバイト・派遣社員、その他の職業のいずれかで、かつ現在と希望の就業時間のいずれにも「わからない」以外の回答があったものを対象に集計。(n=3,165)
- 2 短くしたい…希望する就業時間で回答した選択肢が、現在の就業時間で回答した選択肢より短い区分の場合
 同じくらい…希望する就業時間で回答した選択肢が、現在の就業時間で回答した選択肢と同じ区分の場合
 長くしたい…希望する就業時間で回答した選択肢が、現在の就業時間で回答した選択肢より長い区分の場合

図表 5-2-10 希望する就業時間(正規職員)(現在の就業時間別)



- (備考) 実際の就業時間が 1～16 時間 (n=10)、16～35 時間 (n=29) については、サンプル数が少ないため、省略している。

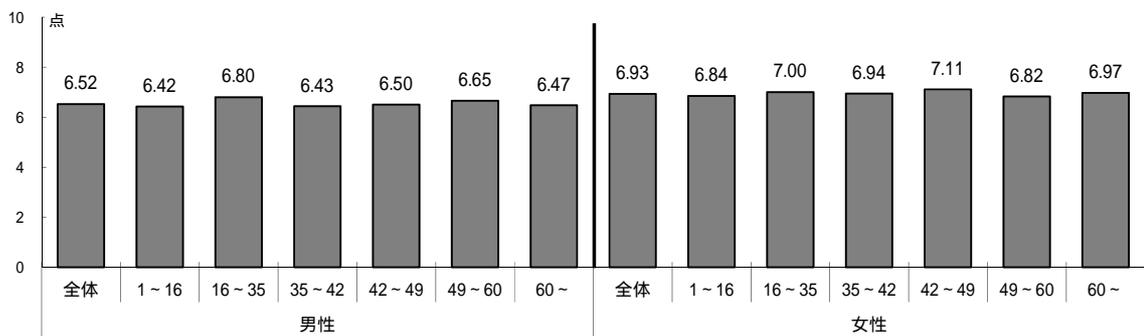
(2) 就業時間の希望と現実と幸福感との関係

一週間の平均就業時間の長さや幸福感の平均値を性別に区分して見たところ、就業時間が長い方が、あるいは短い方が幸福感が高い、といった特徴は男女とも見られません(図表5-2-11)

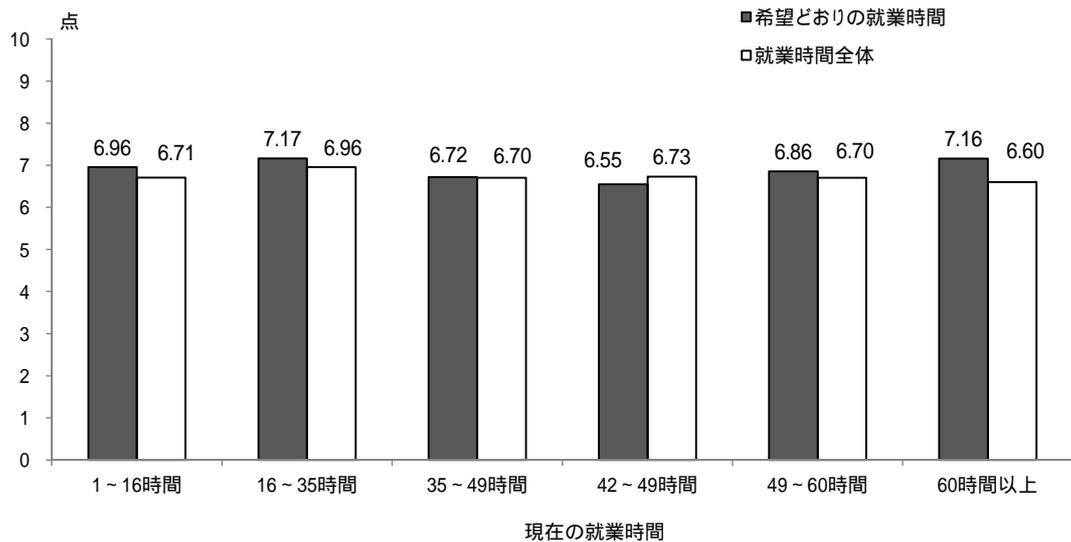
一方、現在の就業時間別の幸福感の平均値と、希望どおりの就業時間の方の幸福感の平均値を比較すると「42～49 時間未満」の層を除き、希望どおりの就業時間の方の幸福感の平均値が各就業時間別の幸福感の平均値を上回っています(図表5-2-12)

実際の就業時間の長短よりは、就業時間が希望どおりかどうかの方が、幸福感に影響をしている可能性が考えられます。

図表 5-2-11 一週間の平均就業時間による幸福感(性別)



図表 5-2-12 幸福感の平均値(現在の就業時間別)(希望どおりの就業時間と就業時間全体)



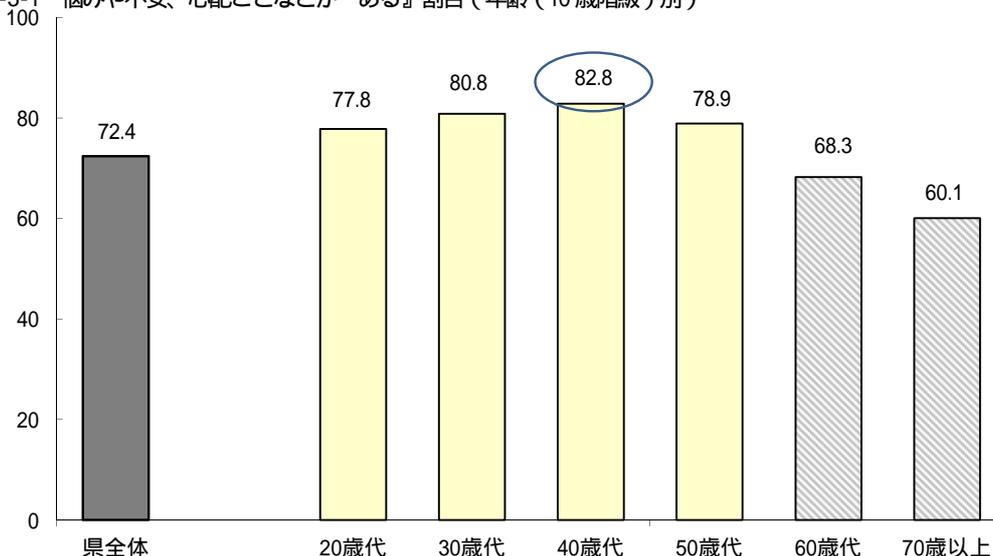
第3節 仕事と生活に関すること

1 悩みや不安、心配ごとなどについて

(1) 年齢別の特徴

「悩みや不安、心配ごとなどはあるか」の質問に『ある』（「ある」と「どちらかといえばある」の合計）と答えた方の割合は、県全体では72.4%となっており、年齢別に見ると、20～50歳代では『ある』の割合が高く、60歳以上では低くなっています。特に40歳代では82.8%と最も高い割合となっています。（図表5-3-1）。

図表 5-3-1 悩みや不安、心配ごとなどが『ある』割合（年齢（10歳階級）別）



また、年齢別に、悩みや不安、心配ごとなどの原因を見ると、40～50歳代を境目に、若年層では仕事、職場、子どもに関する項目の割合が高く、高年層では自分や家族の健康状態、介護に関する項目の割合が高くなっています。また、収入や家計については、30～50歳代での割合が高くなっています（図表5-3-2）。

図表 5-3-2 悩みや不安、心配ごとなどの原因別割合（年齢（10歳階級）別）

単位：%

原因	全体	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳以上
収入や家計	52.6	55.6	64.8	58.7	56.9	○ 49.2	○ 34.2
自分の健康状態	44.0	○ 20.7	○ 28.0	○ 34.6	43.8	53.0	65.5
家族の健康状態	40.3	○ 20.7	○ 26.5	38.2	45.8	46.3	47.3
子どもの将来	27.4	○ 6.1	○ 22.6	38.8	41.7	27.4	○ 11.5
高齢者や病人などの介護	23.1	○ 5.1	○ 9.6	22.5	36.9	27.9	○ 20.3
仕事や勉強	21.9	57.3	36.5	31.9	22.4	○ 6.9	○ 2.0
家族関係	17.8	15.9	18.2	20.8	17.9	16.1	16.7
職場や学校での人間関係	13.3	33.6	19.5	19.7	16.2	○ 4.1	○ 0.4
子どもの教育	11.6	○ 7.1	30.8	26.3	○ 6.0	○ 1.4	○ 1.0
近所づきあい	10.0	○ 5.4	9.8	11.5	9.9	10.3	9.9
親せきづきあい	9.3	7.8	○ 7.0	9.2	10.1	9.2	10.9
育児、子どもの世話	6.7	11.5	25.4	9.1	○ 1.5	○ 0.8	○ 0.9
通勤・通学・通院などの移動	4.6	9.2	5.5	5.1	4.0	○ 3.3	3.7

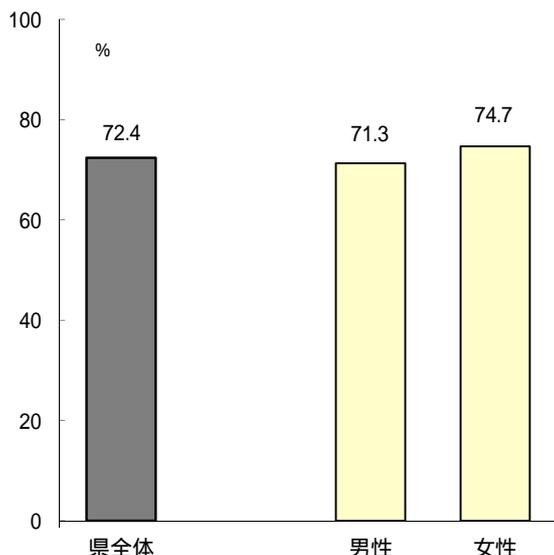
（備考） ...県全体との割合の差が有意に高い（危険率5%未満）

○...県全体との割合の差が有意に低い（危険率5%未満）

(2) 性別の特徴

悩みや不安、心配ごとなどについて、性別に特徴を見ると、『ある』の割合は、女性が男性よりも高くなっていますが、大きな差は見られません(図表5-3-3)。

図表 5-3-3 悩みや不安、心配ごとなどが『ある』割合(性別)



なお、性別に、悩みや不安、心配ごとなどの原因を見ると、男性については「仕事や勉強」の割合が高く、女性は、「子どもの教育」、「育児、子どもの世話」の子どもに関することと「家族の健康状態」、「家族関係」の家族に関することの割合が高くなっています(図表5-3-4)。

図表 5-3-4 悩みや不安、心配ごとなどの原因別割合(性別) 単位: %

原因	全体	男性	女性
収入や家計	52.6	53.9	51.6
自分の健康状態	44.0	45.9	42.5
家族の健康状態	40.3	○ 36.8	42.8
子どもの将来	27.4	25.7	28.7
高齢者や病人などの介護	23.1	22.2	23.7
仕事や勉強	21.9	30.1	○ 15.9
家族関係	17.8	○ 14.6	20.1
職場や学校での人間関係	13.3	14.7	12.2
子どもの教育	11.6	○ 8.5	13.9
近所づきあい	10.0	8.9	10.8
親せきづきあい	9.3	○ 6.9	11.0
育児、子どもの世話	6.7	○ 4.1	8.7
通勤・通学・通院などの移動	4.6	4.4	4.7

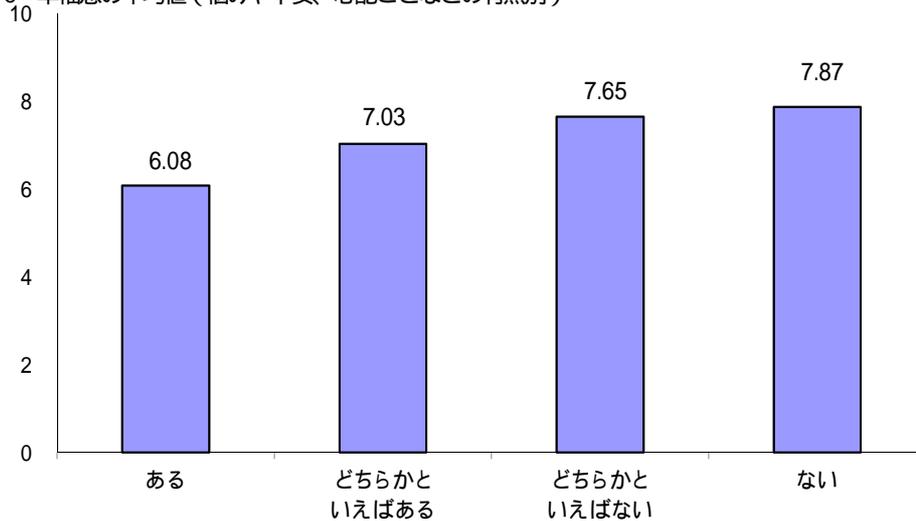
(備考) ...県全体との割合の差が有意に高い(危険率5%未満)

○...県全体との割合の差が有意に低い(危険率5%未満)

(3) 幸福感との関係

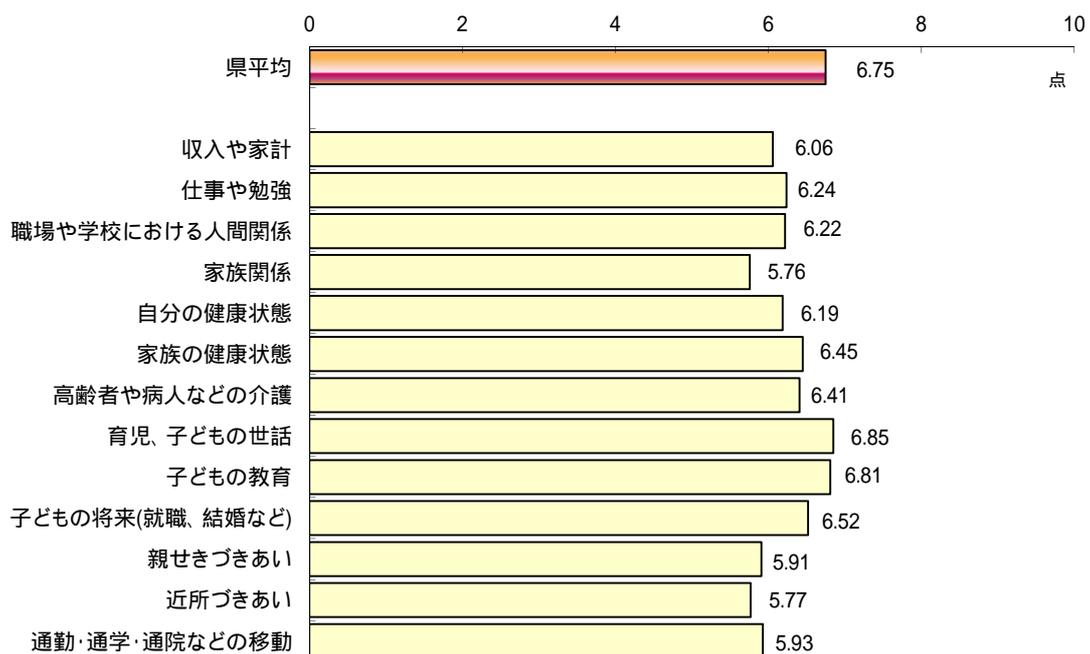
「悩みや不安、心配ごとなど、精神面で負担となっていることはあるか」の回答別に幸福感の平均値を集計したところ、「ない」と回答した人は7.87点と最も高く、「どちらかといえばない」が7.65点「どちらかといえばある」が7.03点で県平均(6.75点)よりも高くなっており、悩みや不安、心配ごとの有無と幸福感との間には関連が見られます(図表5-3-5)。

図表 5-3-5 幸福感の平均値(悩みや不安、心配ごとなどの有無別)



また、悩みや不安、心配ごとなどの『ある』人にその原因を質問したところ、「家族関係」と回答した人の幸福感の平均値は5.76点と最も低く、「近所づきあい」と回答した人が5.77点となっています(図表5-3-6)。

図表 5-3-6 幸福感の平均値(悩みや不安、心配ごとなどの原因別)

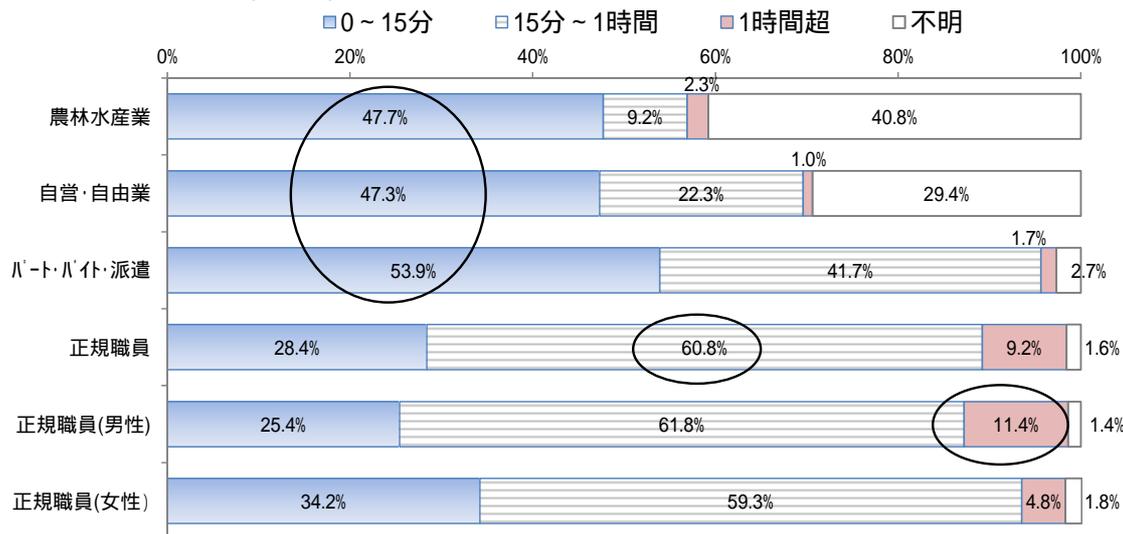


2 通勤など仕事に関わる時間について

(1) 通勤時間

通勤時間の割合を職業別に見ると、農林水産業、自営・自由業、パート・バイト・派遣社員などでは「15分以内」が最多となっていますが、正規職員では「15分～1時間」が最も多くなっています。また、正規職員を性別に見ると、男性の正規職員では1割以上が「1時間超」となっており、就業時間の長さに加えて通勤時間も長くなっています(図表5-3-7)。

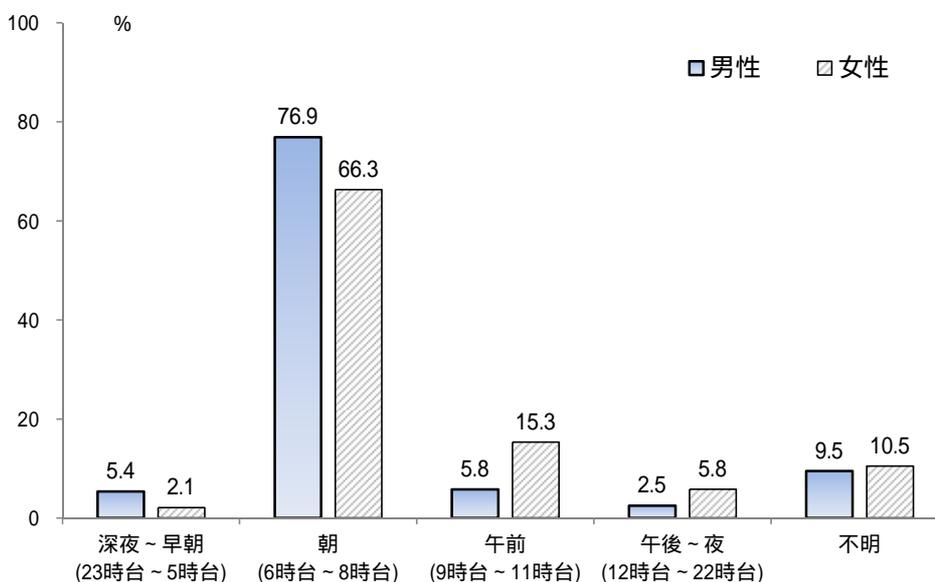
図表 5-3-7 通勤時間の状況(職業別)



(2) 出勤時刻

出勤時刻の状況を性別に見ると、男女とも朝(6～8 時台)に集中していますが、女性は午前(9～11 時台)も 15%程度あります。また、1 割未満ですが、夜、深夜、早朝等の出勤も見られます(図表5-3-8)。

図表 5-3-8 出勤時刻の状況(性別)

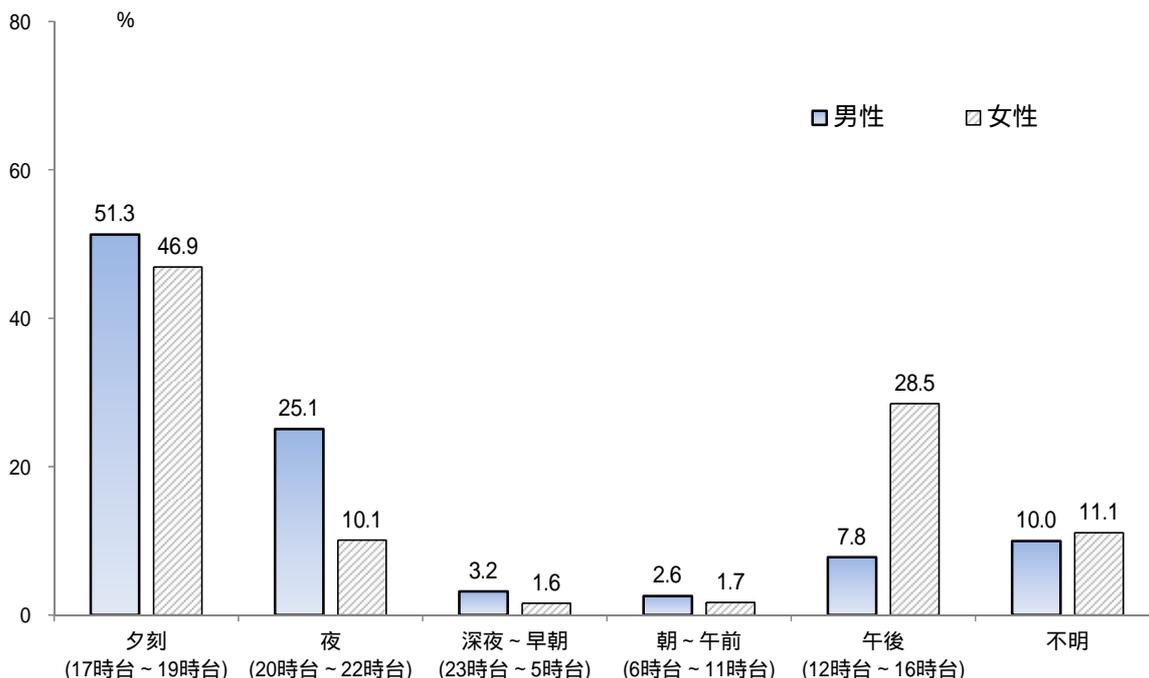


(3) 帰宅時刻

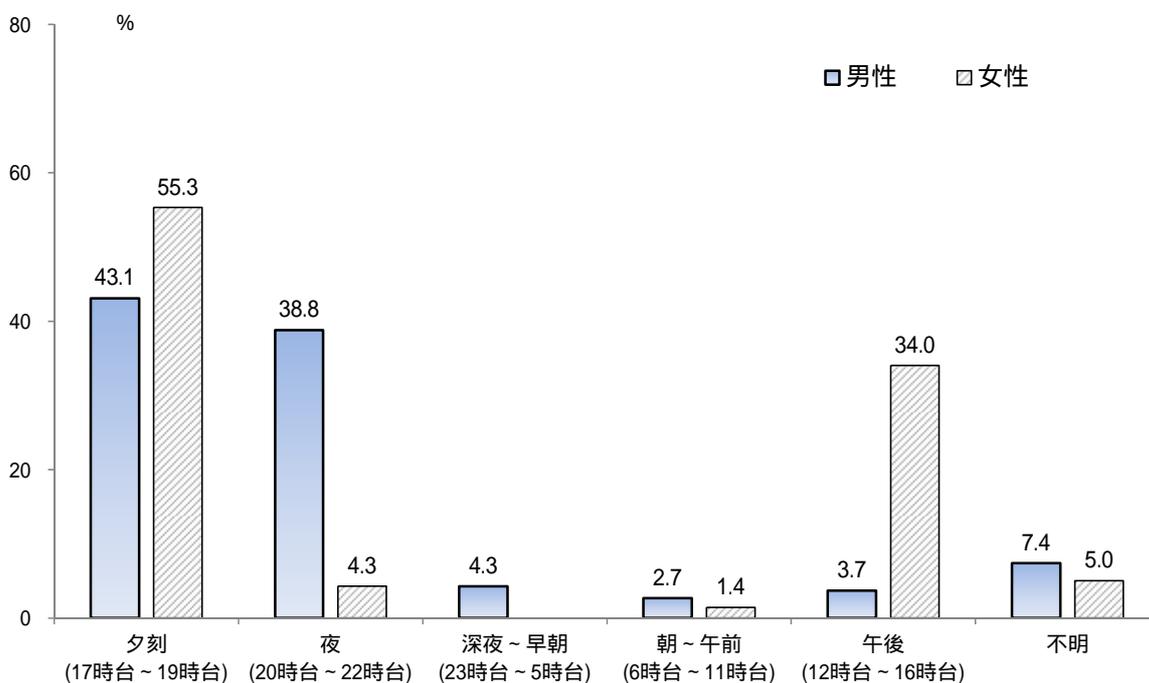
帰宅時刻の状況を性別に見ると、男女とも夕刻(17～19時台)が最多ですが、男性は夜(20～22時台)、女性は午後(12～16時台)も多く見られます。また、少数ですが、その他の時間帯も見られます(図表5-3-9)。

また、末子が就学前の方を対象に同様の集計をすると、全体よりも男性の帰宅時刻が遅く、女性の帰宅時刻が早くなる傾向が見られます(図表5-3-10)。

図表 5-3-9 帰宅時刻の状況(性別)



図表 5-3-10 末子が就学前の人の帰宅時刻の状況(性別)



第6章 まとめ （県民の幸福実感向上のために）

県民の主観的な幸福実感などを把握し、県政運営に活用することを目的として開始したみえ県民意識調査も今回で3回目を迎えました。これまでの調査の分析結果については、少子化対策に関する議論の材料とされるなど、活用を図ってきたところです。

この第6章では、県民の主観的な幸福実感の特徴や傾向をもとに、県民の幸福実感と関連があるものは何かを整理し、県民の幸福実感向上のためにはどのように取り組んでいくべきか等について考察を行い、仮説も含めまとめています。もとより、「みえ県民意識調査」の分析結果の範囲内で考察したものであり、今後は、庁内の関係部局等において様々な機会を通じて把握に努めている現場のニーズや他の統計調査の結果等と合わせ、県民の幸福実感の向上と政策のあり方等を議論、検討する材料の一つとして活用していくことをめざしています。

今回の調査では、これまでに県民の幸福実感に関連があるものとして把握できた「家族」、「就労や収入」、「地域や社会とのつながり」について、経年変化の分析に加え、新たな質問項目による分析を行いました。このことにより、県民の幸福実感とそれぞれの項目について、これまで以上に複合的な考察ができたと考えています。また、さらなる分析は必要ですが、人口減少に関する課題を検討するうえで、「働く場」、「暮らす場」の議論につながる内容も含まれていると思われます。

なお、データ比較を行う際には、単純に平均値や割合などの数字の大小により判断するのではなく、数字の差に統計的な有意性があるかについての確認作業に努めました。アンケート調査の結果は社会経済情勢など様々な要因に左右される可能性があることから、今後も調査を継続し、経年変化を見ていくことが重要であると考えています。

第1節 県民の幸福実感と密接な関連があるもの

1 家族

第1回及び前回調査において、家族は県民の幸福実感と密接な関連があることがわかりました。

今回の調査においても、幸福感を判断する際に最も重視した事項は3回連続で「家族関係」^{14頁}であり、幸福感を高める有効な手立てについても前回調査に引き続き「家族との助け合い」を挙げる割合が最も高くなっています^{16頁}。

また、悩みや不安、心配ごとの原因項目として「家族関係」を挙げた方の幸福感、他の原因項目を挙げた方よりも低くなっています^{104頁}。

これらのことから、家族は県民の幸福実感と密接な関連があることが改めて確認できました。

家族の形は様々ですが、これまで、「結婚」と「子どもを持つこと」に焦点をあてた分析をしてきたところです。今回の調査においても、結婚や子どもに関連した質問を継続するとともに、新たな質問も追加して分析を行っています。

（結婚）

これまで3回の調査を通じて、有配偶の方は未婚や離別・死別の方よりも幸福感が高く、専業主婦・主夫の幸福感も高くなっています^{7頁}。

これらのことから、結婚は県民の幸福実感と密接な関連があると考えられます。

また、今回の新たな質問項目である結婚に対する考え方の回答を見ると、20歳代の未婚者が9割を超える方が、30歳代の未婚者でも8割を超える方が、それぞれ「いずれ結婚するつもり」と回答し、結婚に対する意思を示しています^{62頁}。

今回の調査により、若い方の多くが結婚を望んでいることも確認できました。

一方、20～40歳代未婚者の「いずれ結婚するつもり」と回答した割合は、世帯年収が減少するに従い低くなる傾向がみられます^{64頁}。また、20～40歳代の未婚の割合について、世帯年収が300万円未満の層で多くなり、その傾向は男性でより顕著にあらわれています。こうしたことから、経済的な要素が結婚に対する意思、結婚そのものに影響を与えている可能性があります^{64頁}。

（子どもを持つこと、育てること）

子どもを持つことについては、前回及び今回調査において、有配偶で就学前の子どもを持つ人の幸福感が特に高いこと、また、有配偶で子どもの数が増えるほど幸福感が高くなる傾向があることがわかりました^{67頁}。

これらのことから、子どもを持つことは県民の幸福実感と密接な関連があると考えられます。

今回の新たな質問項目である父親の育児参画についての考え方をみると、全体では「許容範囲型¹」が49.6%と「積極型¹」の40.3%を上回っていますが、20歳代、30歳代では「積極型」が50%を超え、年齢層が低くなるほど「積極型」の割合が高くなる傾向が見られました^{58頁}。また、女性の方が男性よりも「積極型」の割合が高く、性別で意識の差が見られます^{58頁}。

また、今回の調査では、親の住まいに関する質問も追加していますが、20～40歳代の有配偶では親の住まいが近くにあるほど、実際の子どもの数も理想の子どもの数も多くなる傾向にあることがわかりました^{66頁}。

一方で、これまで3回の調査とも、単独世帯の幸福感は低くなっています^{7頁}。また、子どものいない離別・死別の方の幸福感も低くなっています^{67頁}。これらのことから、家族と県民の幸福実感との密接な関連が窺われます。

県民の幸福実感における家族の重要性を踏まえると、結婚や出産、育児などについて行政として積極的に支援していくことが求められていると考えられます。

1 「父親が育児をすることについてどう思うか」という質問に対し、「父親は時間の許す範囲内で、育児をすればよい」が「許容範囲型」。同質問に対し、「父親も母親と育児を分担して、積極的に参加すべき」が「積極型」。

2 就労や収入

第1回及び今回調査において、世帯収入が高くなると幸福感が高くなる傾向が見られました^{8頁}。また、今回調査では60歳未満の男性において、有業の方の幸福感は無業の方よりも高くなっています^{11頁}。なお、女性は、有業と無業の幸福感に大きな差は見られず、有配偶の女性では、自営業・自由業、正規職員、専業主婦の幸福感が高くなっています^{11頁}。

これらのことから、就労や収入と県民の幸福実感は関連があり、男性の方がより関連が強いと考えられます。

一方、専業主婦や高齢者などの、現在収入のある仕事に就いていない方の就労希望を見ると、60歳未満の専業主婦で9割以上、70歳以上男性の7割弱など、高い就労希望があります^{96, 97頁}。また、60歳未満の専業主婦の方の就労希望は世帯年収が600万円以上の層でも9割を超えています^{96頁}。

女性の就労については、前回及び今回調査とも「中断型²」が「継続型²」を上回っていますが^{90頁}、子育て期などに中断するか継続するかの違いはあっても、前回及び今回調査で7割近くの方が、子どもができてからも働くことが望ましいとする考え方を持っています^{90頁}。さらに、今回調査で、仕事と子育てが両立しやすい環境にあるとするならば、という条件を付したところ「継続型」が「中断型」を上回る結果となっています^{93頁}。

こうしたことから、収入の側面とは別に、就労と幸福実感との関連は一定ある可能性があります。

また、16の幸福実感指標のうち「働きたい人が仕事に就き必要な収入を得ている」について実感している層の割合が年々高くなってはいますが、これまで3回の調査とも最も低くなっています^{21頁}。

これらを踏まえると、必要な収入に結びつく安定した就労の確保に加え、ライフステージやそれぞれの希望や状況に応じた柔軟で多様な働き方を選択できる社会の実現が望ましいと考えられます。

2 「女性が働くことについてどう思うか」という質問に対し、「子どもができたなら仕事をやめ、大きくなったら再び働く方がよい」が「中断型」。同質問に対し、「子どもができて、ずっと働き続ける方がよい」が「継続型」。

3 地域や社会とのつながり

前回調査では、地域や社会とのつながりと幸福実感には関連があることがわかりました。

今回は、「地域や社会とのつながり」に関する新たな質問を追加し、地域活動への参加状況、他者との会話の頻度と幸福実感との関係を分析しました。

地域活動への参加経験と幸福感の関係を見たところ、「教育を助ける活動」など8つの地域活動全てについて、参加経験のある層の幸福感は参加経験のない層よりも高くなっています^{77, 78頁}。また、幸福実感指標のうち「自分の住んでいる地域に愛着があり、今後も住み続けたい」と実感している層は、「まちづくり、地域振興の活動」への参加経験の割合が実感していない層よりも高いなど、地域活動への参加状況と幸福実感指標には一定の関連が見られました^{81~84頁}。

「孤立無業³」の考え方を参考に、新たに会話の頻度についての質問をしたところ、会話の頻度が高いほど、幸福感が高い傾向が見られました^{74頁}。

こうしたことから、地域や社会とのつながりと幸福実感は密接に関連していると考えられます。

3 孤立無業^{スネップ} (SNEP, Solitary No-Employed Persons) の定義：20歳以上59歳以下の在学中を除く未婚無業者のうち、ふだんずっと一人か、一緒にいる人が家族以外にはいない人々。（「孤立無業 (SNEP)」 玄田有史 日本経済新聞出版社）

第2節 県民の幸福実感の向上に向けて

1 結婚を望む人のために

これまでの調査を通じて、県民の幸福実感と結婚とは密接な関連があることがわかりました。また、若者の大多数が結婚を望んでいることも明らかになりました。

結婚しない理由として最も多いのが「出会いがない」で、次に多いのが「理想の相手に出会っていない」となっており、男性では半数以上の方が「出会いがない」を理由に挙げています^{63頁}。

これらのことから、県民の幸福実感向上のためには、結婚を望む人のために、引き続き、行政としても出会いの機会を増やす取組の支援などが求められていると考えられます。

一方、結婚しない理由として、男性の4割以上が「収入が少ない」を挙げています^{63頁}。また、20～40歳代未婚者において、世帯年収が減少するに従い結婚する意思が低くなる傾向もみられます^{64頁}。さらに、若年者の完全失業率と非正規雇用割合は全年齢を上回る水準で推移し、30～34歳の男性ではパート・アルバイト・派遣の有配偶率は正社員の半分以下となっています⁴。

これらのことから、結婚を望む方を後押しするためにも、若年者層の就労支援など経済的な基盤を確保するための支援が求められていると考えられます。

4 「平成25年度少子化の状況及び少子化への対処施策の概況（少子化社会対策白書）」

2 望む人が子どもを持つことができるために

これまでの調査を通じて、県民の幸福実感と子どもを持つこととは密接な関連があることがわかりました。

一方で、実際の子どもの数は理想の子どもの数より少ないこともわかりました^{66頁}。理想と現実のギャップの理由については様々であると思われませんが、経済的な理由などが考えられます⁵。

これらのことから、県民の幸福実感向上のためには、望む人が子どもを持つことができるよう、引き続き、行政の支援が必要であると考えられます。

5 国立社会保障・人権問題研究所「第14回出生動向基本調査（夫婦調査）」（2011年）では、理想の子ども数を持たない理由として「子育てや教育にお金がかかるから」（60.4%）という経済的理由の割合が最も高く、次いで「高齢で生むのはいやだから」（35.1%）、「欲しいけれどもできないから」（19.3%）の順となっています。

3 安心して子育てができるために

今回の調査における父親の育児参画についての考え方では、全体では「積極型」が40.3%となっていますが、20歳代、30歳代で50%を超えるなど年齢層が低くなるほど「積極型」の割合が高くなる傾向が見られます^{58頁}。

一方、性別で見ると「積極型」の割合が女性の44.0%に対して、男性は35.8%となり、男女で意識の差が見られます^{58頁}。性別による差は、子育て世代や共働き世帯でも同様に女性の方が男性よりも「積極型」の割合が高くなっています^{59、60頁}。また、悩みや不安、心配ごとの原因項目では、「育児・子どもの世話」、「子どもの教育」について、女性の割合が高く、男性の割合が低くなっています^{103頁}。

なお、自分の親又は配偶者の親の住まいが近くにあるほど、実際の子どもの数も理想の子どもの数も多くなる傾向にあるということもわかりました^{66頁}。

これらのことから、子育てをする女性が不安や負担感を感じている可能性が窺えます。県民の幸福実感向上のためには、安心して子育てができるよう、家族と地域社会全体で子育てを支えていくという取組が求められていると考えられます。

4 長時間労働と父親の育児参画

父親の育児参画について、男女で意識の差がある一方、実際の就業時間についても、男女で差が見られることが今回の調査で明らかになりました^{95頁}。末子が就学前の男性の6割以上が一週間に49時間以上働いており^{61頁}、帰宅時刻が20時以降の割合が4割程度になっています^{106頁}。

しかしながら、実際の就業時間と希望する就業時間の関係を見ると、週49時間以上働いている人の約8割以上は、就業時間を短くしたいと希望しています^{100頁}。

また、男性の父親の育児参画に関する意識については、「積極型」は女性よりも少なくなっていますが、「許容範囲型」も合わせると9割近くの男性は父親も育児に関わるべきと考えています^{58頁}。

これらのことから、県民の幸福実感向上のためには、ワーク・ライフ・バランスのための取組も含め、それぞれの実状に応じた父親の育児参画を支援することが求められていると考えられます。

5 女性のライフステージに応じた柔軟な働き方

女性の就労についての考え方をみると、全体では「中断型」が43.0%と「継続型」の26.2%を上回っていますが^{90頁}、仕事と子育てが両立しやすい環境にあるとするならば、という条件を付したところ「継続型」が40.7%と「中断型」の28.5%を上回る結果となりました^{93頁}。

女性就労に関する意識を詳細に見ると、女性の正規職員は、全体の傾向とは異なり、「継続型」が45.2%と「中断型」の33.0%を上回っています^{92頁}。また、両立しやすい場合の「継続型」の増加幅は、どの年齢層においても女性の方が男性よりも高く^{94頁}、特に子育て世代で高くなっています^{93頁}。

これらのことから、県民の幸福実感向上のためには、働き続けたいと考える子育て中の女性が仕事と家庭の両立を図りながら働ける仕組みが求められていると考えられます。

一方で、両立しやすい場合でも「中断型」を選択する割合が、高校生までの子どもを持つ女性で2~3割程度ありました^{93頁}。その理由は、それぞれの価値観や経済的な事情など個々の置かれた状況によるものもあり、今回調査からは分析できませんが、子育てが一段落すれば働くことを望む女性に対する再就職の支援も重要と考えられます。

6 多様な働き方が選択できる社会に向けて

今回の調査における、現在は収入のある仕事をしていない人の就労希望を見ると、60歳未満では、90.8%、そのうち専業主婦（有配偶の女性）では92.4%の方が就労を希望しています^{96頁}。また、60歳代で74.4%、70歳以上でも56.0%となっており、高齢者の就労希望も高くなっています^{97頁}。ただし、専業主婦や高齢者の就労希望の多くは、35時間未満のパートタイム相当の時間となっています^{96、97頁}。

前回調査では65歳を超えても働きたいと考える人に働く理由を確認したところ、「経済的ゆとりがほしい」が6割を超えるなど、経済的な要因の割合が高くなっていますが、「地域とのつながり・交流がほしい」や「生きがいほしい」の割合も3割から4割程度ありました。

これらのことから、県民の幸福実感向上のためには、働く意思を持つ人が、望むような形で働くことができる社会が望ましいと考えられます。

7 地域や社会での活動の実現のために

これまでの調査から、地域や社会のつながりと県民の幸福実感には密接な関連があることがわかりました。

また、「地域の住みやすさ」については肯定的な回答が8割以上あり、幸福感との関連が見られます^{85、86頁}。幸福実感指標の「地域に愛着があり、今後も住み続けたい」についても、7割以上が実感しており、地域の住みやすさとの関連も見られます^{86頁}。さらに、会話の頻度、地域活動への参加状況と幸福感にも関連があることがわかりました^{74、77、78頁}。

一方、ふだん誰とも会話しない層の幸福感は、ふだん会話する層と比べ大きく下回っています^{74頁}。ふだん誰とも会話しない層は、全体の1%ですが、家族、職場や学校の人とだけふだん会話する層は13.4%となっており、これらの層は将来的に、孤立する可能性もあると考えられます^{73頁}。

また、地域活動について「参加したことはないが、機会があれば参加したい」と考える層は、各活動項目で4分の1～半分程度を占めており^{75頁}、特に、20～30歳代の若年層、正規職員やパート・バイト・派遣社員などの被雇用者などで高い割合となっています^{76頁}。

これらのことを踏まえると、県民の幸福実感向上のためには、孤立を防ぐためにも、地域活動への参加を促していくなど、地域社会全体としてサポートしていくことが求められていると考えられます。

第3節 調査・分析についての今後の検討課題

1 経年変化の把握

アンケート調査の結果は社会経済情勢など様々な要因に左右される可能性に留意する必要があることから、今後も調査を継続し、経年変化を見ていくことが重要であると考えられます。

2 幸福実感と家族との関連

これまでの調査で、家族と県民の幸福実感には密接な関連が見られることがわかりました。家族の形は様々であり、これまで、主に結婚、子どもという面から分析をしてきましたが、例えば、高齢者介護の問題など、異なる視点から分析をしていくことも検討課題であると考えています。

3 幸福実感と就労や収入との関連

これまでの調査で就労や収入と県民の幸福実感には関連があり、収入と結婚の関連、高齢者や専業主婦の高い就労希望なども見られました。今後は就労と収入それぞれがどのように幸福実感と関連するかなど、人口減少に関する課題である「働く場」に関する議論に資するような分析も必要と考えています。

4 幸福実感と地域や社会とのつながりとの関連

これまでの調査から、地域社会のつながりと県民の幸福実感には密接な関連があることがわかりましたが、一方では地域活動への参加意欲はあるものの実際には活動に参加されていない方もみえます。今後、地域活動に参加されていない理由を探るなど、地域や社会とのつながりと幸福実感との関連について分析を深めていくことは、人口減少に関する課題である「暮らす場」の議論を進める上でも有効であると考えられます。

5 より効果的な調査の設計及び分析

より多くの県民の皆さんに回答していただけるよう、調査票の設計について専門家の意見も聞きながら改善を続けるとともに、これまでの調査結果から得られた様々な仮説を検証できるような質問も加えていく必要があると考えられます。また、回答していただいた貴重なデータについては詳細な分析を行い、行政へのニーズがどこにどれだけあるかを探るなど、県政の運営に最大限活用していく必要があります。また、この意識調査の結果だけでなく、地域や社会の状況などについて複眼的に見ていくことが必要であり、国などが実施する調査データなども十分に活用していく必要があります。

6 幸福実感指標の活用

「みえ県民力ビジョン」では、「幸福実感日本一」の三重をめざすことから、政策分野ごとの16の「幸福実感指標」を設定し、「県民指標」に加えて、「幸福実感指標」の推移を把握することで、行動計画全体としての進行管理に努めることとしています。

このため、第2章で属性クロス分析による特徴や傾向、これまでの3回の調査結果の推移を把握するとともに、第4章では地域活動とのクロス分析を実施しました。引き続き、県として注力していくべき課題を考える際の手掛かりにできるよう取り組んでいくことが必要と考えられます。

その他（資料等）

その他(資料等)

1. 日ごろ感じている幸福感についておききします

問1-1 現在、あなたはどの程度幸せですか。「とても幸せ」を10点、「とても不幸」を0点とすると、何点くらいになると思いますか。いずれかの数字を1つだけで囲んでください。（は1つだけ）

とても 不 幸												とても 幸 せ
0点	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10点		

問1-2 幸福感を判断する際に、重視した事項は何ですか。次の中からあてはまるものすべてにをつけてください。（はいくつでも）

1 家計の状況（所得・消費）	8 趣味、社会貢献などの生きがい
2 就業状況（仕事の有無・安定）	9 家族関係
3 健康状況	10 友人関係
4 自由な時間	11 職場の人間関係
5 充実した余暇	12 地域コミュニティとの関係
6 仕事の充実度	13 政治、行政
7 精神的なゆとり	

問1-3 あなたの幸福感を高めるために有効な手立ては何ですか。次の中から、あなたのお考えにもっとも近いものに2つまでをつけてください。（は2つまで）

1 自分自身の努力	4 社会（地域住民、NPO等）の助け合い
2 家族との助け合い	5 職場からの支援
3 友人や仲間との助け合い	6 国や地方の政府からの支援

2. 地域や社会の状況について、あなたの実感をおききします

問2 次の（1）から（16）までの16の質問それぞれについて、あなたの実感にもっとも近いものを1つだけ選んでください。（ はそれぞれ1つずつ）

	1 感じる	2 どちらかといえば感じる	3 どちらかといえば感じない	4 感じない	9 わからない
（1）災害等の危機への備えが進んでいると感じますか。	1	2	3	4	9
（2）必要な医療サービスが利用できていると感じますか。	1	2	3	4	9
（3）犯罪や事故が少なく、安全に暮らせていると感じますか。	1	2	3	4	9
（4）必要な福祉サービスが利用できていると感じますか。	1	2	3	4	9
（5）身近な自然や環境を守る取組が広がっていると感じますか。	1	2	3	4	9
（6）一人ひとりが尊重され、誰もが社会に参画できていると感じますか。	1	2	3	4	9
（7）子どものためになる教育が行われていると感じますか。	1	2	3	4	9

	1 感じる	2 どちらかといえば感じる	3 どちらかといえば感じない	4 感じない	9 わからない
(8) 地域社会の見守りの中で、子どもが元気に育っていると感じますか。	1	2	3	4	9
(9) スポーツを通じて夢や感動が育まれていると感じますか。	1	2	3	4	9
(10) 自分の住んでいる地域に愛着があり、今後も住み続けたいと感じますか。	1	2	3	4	9
(11) 文化芸術や地域の歴史等について、学び親しむことができると感じますか。	1	2	3	4	9
(12) 三重県産の農林水産物を買いたいと感じますか。	1	2	3	4	9
(13) 県内の産業活動が活発であると感じますか。	1	2	3	4	9
(14) 働きたい人が仕事に就き、必要な収入を得ていると感じますか。	1	2	3	4	9
(15) 国内外に三重県の魅力が発信され、交流が進んでいると感じますか。	1	2	3	4	9
(16) 道路や公共交通機関等が整っていると感じますか。	1	2	3	4	9

3. 生活や仕事のことについておききします

問3 もしあなたが希望する時間だけ働く（収入のある仕事をする）ことができるとすれば、あなたは一週間に何時間くらい働きたいですか。現在働いている方も、そうでない方も全員お答えください。（ は1つだけ）

- | | |
|--------------|--------------|
| 1 働きたくない | 5 42～49 時間未満 |
| 2 1～16 時間未満 | 6 49～60 時間未満 |
| 3 16～35 時間未満 | 7 60 時間以上 |
| 4 35～42 時間未満 | 8 わからない |

問4 女性が働く（収入のある仕事をする）ことについて、あなたはどう思いますか。あなたのお考えにもっとも近いものを1つだけ選んでください。（ は1つだけ）

- | |
|----------------------------------|
| 1 家事や育児などがあるので、働かない方がよい |
| 2 結婚するまでは働く方がよい |
| 3 子どもができるまでは働く方がよい |
| 4 子どもができて、ずっと働き続ける方がよい |
| 5 子どもができたなら仕事をやめ、大きくなったら再び働く方がよい |
| 6 その他（ ） |
| 7 わからない |

問4で「5」に をつけた方におききします。

問4-2 もし現在よりも、仕事と子育ての両立がしやすい環境にあるとするならば、どのように考えますか。（ は1つだけ）

- | |
|----------------------------------|
| 1 子どもができて、ずっと働き続ける方がよい |
| 2 子どもができたなら仕事をやめ、大きくなったら再び働く方がよい |
| 3 わからない |

問5 あなたの主な職業は何ですか。（ は1つだけ）

- | | | |
|---|-----------------------|------------|
| 1 | 農林水産業（家族従事者も含みます） | } 次ページの問6へ |
| 2 | 自営業、自由業（家族従事者も含みます） | |
| 3 | 企業、役所、団体などの正規職員 | |
| 4 | パート、アルバイト、派遣社員など | |
| 5 | その他、収入のある仕事 | |
| 6 | 学生（アルバイト等をしている方も含みます） | |
| 7 | 専業主婦、専業主夫 | |
| 8 | 無職 | |

問5で「1」から「5」に をつけた方におききします。

問5-2 通常、一週間に働く時間（残業時間を含み、通勤時間は除く）はどのくらいですか。

1	1～16 時間未満	5	49～60 時間未満
2	16～35 時間未満	6	60 時間以上
3	35～42 時間未満	7	わからない
4	42～49 時間未満		

問5-3 通常、仕事のために家を出る時刻、家に帰る時刻、通勤時間はどのくらいですか。

(1) 家を出る通常の時刻 午前か午後に をつけたあと時刻を記入	午前	時	分
	午後		
(2) 家に帰る通常時刻 午前か午後に をつけたあと時刻を記入	午前	時	分
	午後		
(3) 通常の通勤時間	(片道)		分

次ページの問6へ

4. 地域や社会とのつながりについておききします

すべての方におききします

問6 あなたにとって、現在お住まいの地域は住みやすいですか。次の中からあてはまるものを1つだけ選んでください。（は1つだけ）

- | |
|-----------------|
| 1 住みやすい |
| 2 どちらかといえば住みやすい |
| 3 どちらかといえば住みにくい |
| 4 住みにくい |
| 5 どちらともいえない |

問7 あなたは、ご家族やご近所、職場や学校の方、友人や知人の誰かと、ふだんの程度、直接会って会話をしていますか。（電話やメールなどの対面ではない場合は除きます。また店での注文など、知らない人との会話も除きます。）（は1つずつ、合計4つ）

	1 毎日 ↳ 週に数回くらい	2 週に一回 ↳ 月に数回くらい	3 月に一回 ↳ 年に数回くらい	4 年に一回くらい	5 まったくしていない (もしくははいない)
(1) ご家族の方	1	2	3	4	5
(2) ご近所の方	1	2	3	4	5
(3) 職場や学校の方	1	2	3	4	5
(4) その他の友人や知人	1	2	3	4	5

問8 あなたは、今までに、自治会やボランティア、サークル、団体などで行う次のような活動に参加したことがありますか。また、今後参加したいと思いますか。あてはまるものを1つずつ選んでください。（ はそれぞれ1つずつ、合計8つ）

	1 ふだん参加している	2 参加した経験がある	3 参加したことはないが、 機会があれば参加したい	4 参加したことはなく 参加したいとも思わない
(1) 教育を助ける活動 (学校支援ボランティアを含みます)	1	2	3	4
(2) 結婚支援や子育てを助ける活動	1	2	3	4
(3) 防犯・防災・交通安全の活動	1	2	3	4
(4) 要介護のお年寄りや障がい者の方 などを助ける活動	1	2	3	4
(5) まちづくり、地域振興の活動 (祭りや地域の行事を含みます)	1	2	3	4
(6) 環境美化、自然保護、リサイクル 運動など環境保全の活動	1	2	3	4
(7) 運動・スポーツ活動 (健康づくりのための活動を含みます)	1	2	3	4
(8) 文化芸術・趣味・娯楽活動 (団体やサークルに所属する人たちの 楽しみや研さんなどが目的の活動)	1	2	3	4

5. 家族や精神的なゆとりについておききします

問9 あなたは子どもを何人くらいほしいですか。あるいは、ほしかったですか。
理想の子どもの人数をお答えください。（ は1つだけ。「1」に をつけた方は
（ ）に人数も記入してください。）

- 1 () 人くらいほしい(ほしかった)
- 2 ほしくない(ほしくなかった)
- 3 わからない

問10 父親が育児をすることについて、あなたはどう思いますか。あなたのお考えに
もっとも近いものを1つだけ選んでください。（ は1つだけ）

- 1 父親は外で働き、母親が育児に専念すべき
- 2 父親は時間の許す範囲内で、育児をすればよい
- 3 父親も母親と育児を分担して、積極的に参加すべき
- 4 その他()
- 5 わからない

問11 お子さんは何人いらっしゃいますか。いない方は「0」とご記入ください。

人

お子さんがいらっしゃる方へ

問11-2 現在、お子さんはいくつですか。年齢をご記入ください。

また、通っている学校等に該当するものがあれば をつけてください。

子どもが5人以上いる場合には、年齢が上の4人についてお答えください。

一番上の子 ()歳	→	保育園や幼稚園、	小学校、	中学校、	高校
二番目の子 ()歳	→	保育園や幼稚園、	小学校、	中学校、	高校
三番目の子 ()歳	→	保育園や幼稚園、	小学校、	中学校、	高校
四番目の子 ()歳	→	保育園や幼稚園、	小学校、	中学校、	高校

問12 あなたはこれまでに結婚をしたことはありますか。(は1つだけ)

- | | | |
|--------------------------|---|--------------|
| 1 未婚(結婚したことはない) | } | 問13 へ |
| 2 既婚・死別(結婚したことはあるが、死別した) | | |
| 3 既婚・離別(結婚したことはあるが、離別した) | | |
| 4 既婚・配偶者あり(現在、夫または妻がいる) | → | 問14 へ |

現在、夫または妻がいない方(問12で「1」~「3」を選んだ方)におききします。

問13 今後の人生を通して考えた場合、あなたの結婚に対するお考えは、次のうちどちらですか。(は1つだけ)

- | |
|--------------|
| 1 いずれ結婚するつもり |
| 2 結婚するつもりはない |

問13で「1」を選んだ方におききします。

問13-2 現在、結婚していない理由は何ですか。次の中からあてはまるものすべてにをつけてください。(はいくつでも)

- | | |
|-----------------|-----------------|
| 1 結婚するのはまだ早い | 6 自由な生活を失いたくない |
| 2 出会いがない | 7 仕事が不安定 |
| 3 理想の相手に出会えていない | 8 金銭的に不自由になる |
| 4 収入が少ない | 9 キャリアアップの障害になる |
| 5 自分に自信が持てない | 10 その他() |

次ページの**問15**へ

現在、夫または妻がいる方(問12で「4」を選んだ方)におききします。

問14 あなたの配偶者の主な職業は何ですか。(は1つだけ)

- | | |
|-----------------------|---------------|
| 1 農林水産業(家族従事者も含みます) | 5 その他、収入のある仕事 |
| 2 自営業、自由業(家族従事者も含みます) | 6 学生 |
| 3 企業、役所、団体などの正規職員 | 7 専業主婦、専業主夫 |
| 4 パート、アルバイト、派遣社員など | 8 無職 |

次ページの**問15**へ

すべての方におききします

問15 親ごさんは現在どこにお住まいですか。

ご両親が別々にお住まいの場合は、近くにお住まいの親ごさんについてお答えください。

すべての方 あなたの親	夫または妻がいる方のみ 配偶者の親
1 両親とも死亡	1 両親とも死亡
2 同居または同じ敷地内の別の住宅	2 同居または同じ敷地内の別の住宅
3 片道15分未満の場所	3 片道15分未満の場所
4 片道1時間未満の場所	4 片道1時間未満の場所
5 片道1時間以上の場所	5 片道1時間以上の場所

問16 あなたは、悩みや不安、心配ごとなど、精神面で負担となっていることはありますか。次の中からあてはまるものを1つだけ選んでください。（は1つだけ）

- | |
|--------------|
| 1 ある |
| 2 どちらかといえばある |
| 3 どちらかといえばない |
| 4 ない |
| 5 どちらともいえない |

問16で「1」または「2」に をつけた方におききします。

問16-2 その原因としてあてはまるものは何ですか。次の中からあてはまるものすべてに をつけてください。（はいくつでも）

- | | |
|-------------------|--------------------|
| 1 収入や家計 | 8 育児、子どもの世話 |
| 2 仕事や勉強 | 9 子どもの教育 |
| 3 職場や学校などにおける人間関係 | 10 子どもの将来（就職、結婚など） |
| 4 家族関係 | 11 親せきづきあい |
| 5 自分の健康状態 | 12 近所づきあい |
| 6 家族の健康状態 | 13 通勤・通学・通院などの移動 |
| 7 高齢者や病人などの介護 | 14 その他（ ） |

さいごに、ご自身の現在のことについておききします

お答えいただきました内容は、統計的に処理されますので、個人が特定されることはありません。安心してお答えください。

問17 あなたの性別を次の中から選んでください。（ は1つだけ）

1 男性	2 女性
------	------

問18 あなたは現在、おいくつですか。

満 歳

問19 あなたの世帯構成はどれにあたりますか。次の中からあてはまるものを1つだけ選んでください。（ は1つだけ）

1	単身世帯（ひとり暮らしなど）
2	一世代世帯（夫婦のみなど）
3	二世帯世帯（親と子など）
4	三世帯世帯（親と子と孫など）
5	その他（ ）

問20 あなたの世帯全体の年収（税込み）はどのくらいですか。（ は1つだけ）

1	100万円未満
2	100万円～200万円未満
3	200万円～300万円未満
4	300万円～400万円未満
5	400万円～500万円未満
6	500万円～600万円未満
7	600万円～800万円未満
8	800万円～1,000万円未満
9	1,000万円以上
10	わからない

問2 1 あなたのお住まいの地域はどちらですか。1～5の地域に をつけてください。
（ は1つだけ）

1 北勢地域	（ 桑名市・いなべ市・四日市市・鈴鹿市・亀山市 木曾岬町・東員町・菰野町・朝日町・川越町 ）
2 伊賀地域	（ 伊賀市・名張市 ）
3 中南勢地域	（ 津市・松阪市 多気町・明和町・大台町 ）
4 伊勢志摩地域	（ 伊勢市・鳥羽市・志摩市 玉城町・度会町・大紀町・南伊勢町 ）
5 東紀州地域	（ 尾鷲市・熊野市 紀北町・御浜町・紀宝町 ）

このたびのアンケート調査に対するご感想、または三重県政に対するご意見などございましたら、ご自由にお書きください。今後の参考にさせていただきます。

質問は以上で終わりです。ご協力ありがとうございました。
このアンケート用紙を同封の返信用封筒（切手不要）に入れて、郵便ポストに投函してください。
ご回答いただいた内容については詳しく分析し、県政を進めるための貴重な資料として活用させていただきます。
報告書は4月頃までに公表し、県庁舎の受付などに配置するとともに、県ホームページにも掲載する予定です。

URL <http://www.pref.mie.lg.jp/SENSOMU/HP/mieishiki/>

▼ みえ意識

検索



回答者の属性構成と県全体の構成との比較

第3回みえ県民意識調査は、各市町の選挙人名簿を使用した等間隔無作為抽出法により、標本を抽出しており、標本数10,000人に対して、有効回答数は5,456人でした。そのため、各属性において、実際の県全体と回答者の構成が異なる部分もあることから、以下にその概略をまとめています。

属性	属性項目	県民意識調査 件数	県全体 件数	県民意識調査 構成比 (%)	県全体 構成比 (%)	比較 (/)	備 考 (県全体の資料出処、意識調査との差異)
地域	北勢地域	2,445	666,887	44.8	44.6	1.00	資料出処：総務省住民基本台帳人口 (25年3月31日)(日本人住民)
	伊賀地域	536	144,052	9.8	9.6	1.02	
	中南勢地域	1,516	404,256	27.8	27.0	1.03	
	伊勢志摩地域	738	213,650	13.5	14.3	0.95	
	東紀州地域	221	66,135	4.1	4.4	0.92	
計		5,456	1,494,980	100	100		
性別	男性	2,346	721,276	43.5	48.2	0.90	資料出処：総務省住民基本台帳人口 (25年3月31日)(日本人住民)
	女性	3,045	773,704	56.5	51.8	1.09	
	不明	65	0	-	-	-	
計(不明除く)		5,391	1,494,980	100	100		
年齢	20歳代	379	181,648	6.9	12.2	0.57	資料出処：総務省住民基本台帳人口 (25年3月31日)(日本人住民)
	30歳代	658	229,629	12.1	15.4	0.79	
	40歳代	946	247,307	17.3	16.5	1.05	
	50歳代	994	222,972	18.2	14.9	1.22	
	60歳代	1,239	267,371	22.7	17.9	1.27	
	70歳以上	1,157	346,053	21.2	23.1	0.92	
	不明	83	0	1.5	0.0	-	
計		5,456	1,494,980	100	100		
主な職業	農林水産業	174	32,926	3.2	2.3	1.40	資料出処：平成22年度国勢調査 ・「自営業、自由業」「正規職員」「パート・バイト・派遣」は15歳以上対象 ・「専業主婦・主夫」は「家事」、「学生」は「通学」、「無職」は「完全失業者」の数字
	自営業、自由業	507	80,870	9.3	5.6	1.66	
	正規職員	1,374	463,359	25.2	32.2	0.78	
	パート・バイト・派遣	1,028	245,223	18.8	17.0	1.11	
	専業主婦・主夫(家事)	792	254,687	14.5	17.7	0.82	
	学生(通学)	75	16,204	1.4	1.1	1.22	
	無職(完全失業者)	1,094	46,569	20.1	3.2	6.20	
	その他	273	248,373	5.0	17.2	0.29	
計		5,456	1,440,323	100	100		
配偶関係	未婚	707	290,472	13.0	19.4	0.67	資料出処：平成22年度国勢調査
	有配偶	3,959	977,703	72.6	65.1	1.11	
	離別・死別	583	214,579	10.7	14.3	0.75	
	不明	207	18,146	3.8	1.2	3.14	
計		5,456	1,500,900	100	100		
世帯類型	単独世帯	394	189,123	7.2	10.8	0.67	資料出処：平成22年度国勢調査 ・「三世帯世帯」には「三世帯以上世帯」を含む
	一世帯世帯	1,685	304,258	30.9	17.4	1.77	
	二世帯世帯	2,448	876,678	44.9	50.2	0.89	
	三世帯世帯	752	344,822	13.8	19.7	0.70	
	その他	83	29,797	1.5	1.7	0.89	
計		5,456	1,746,163	100	100		
世帯の年間収入	100万円未満	227	113	14.1	8.6	1.64	○資料出処：平成21年全国消費実態調査
	100～200万円未満	544	113	15.9	8.6	1.85	
	200～300万円未満	867	179	13.4	13.6	0.98	
	300～400万円未満	731	224	10.9	17.1	0.64	
	400～500万円未満	531	142	9.7	10.8	0.90	
	500～600万円未満	645	242	11.8	18.4	0.64	
	600～800万円未満	449	132	8.2	10.1	0.82	
	800～1,000万円未満	410	167	7.5	12.7	0.59	
	1,000万円以上	328	-	6.0	-	-	
	わからない	127	-	2.3	-	-	
計		5,456	1,312	100	100		
有効回答数		5,456		100			

注) 比率が1.50以上もしくは0.50未満の場合に、太枠囲いとしています。

平均値や回答比率の差についての統計的な有意性を確認するための手法

みえ県民意識調査は、一部の標本を抽出し、その結果から全体の値を推定する「標本調査」です。

この調査では 5,456 の回答数（サンプル数）がありますが、調査結果と県全体の本当の姿との間にはどうしても誤差（＝標本誤差）が発生します。また、属性を組み合わせで細分化すると、そのカテゴリーのサンプル数はさらに少なくなることから、誤差はより一層拡大します。

このため、幸福感の平均値や地域や社会の状況についての実感の比率に差があったとしても、結果として、そのことがそのまま県民全体に当てはまるとは言い切れない（統計的に有意ではない）ケースが考えられます。

そこで、幸福感の平均値や地域や社会の状況についての実感の比率などについて比較を行うにあたり、その差に統計的な有意性があるかどうか、ここでは、例えば同じ調査を異なる調査対象で 100 回行った場合、95 回以上の割合で同様の差が生じると言えるかという観点から、下記の検定方法により判定を行いました（ 1、 2 ）。

1 幸福感の平均値の差の検定方法

$$U = \frac{\bar{X} - \bar{Y}}{\sqrt{\frac{S_1^2}{n} + \frac{S_2^2}{m}}}$$

\bar{X} : 標本 X の平均値 \bar{Y} : 標本 Y の平均値
 S_1^2 : 標本 X の分散 S_2^2 : 標本 Y の分散
 n : X のサンプル数 m : Y のサンプル数

U > 1.64 の時、平均値の差は統計的に有意であると言える（危険率 5 %）

2 比率の差の検定方法

$$U = \frac{P_1 - P_2}{\sqrt{\frac{P_1 \times (1 - P_1)}{n} + \frac{P_2 \times (1 - P_2)}{m}}}$$

P_1 : 標本 X の回答比率 P_2 : 標本 Y の回答比率
 n : X のサンプル数 m : Y のサンプル数

U > 1.64 の時、回答比率の差は統計的に有意であると言える（危険率 5 %）

なお、上記 1 及び 2 の算出方法により

U > 2.33 の時、平均値や回答比率の差は統計的に非常に有意（危険率 1 % 未満）

U > 1.28 の時、平均値や回答比率の差はある程度有意（危険率 10 % 未満）

となります。

調査と分析 3 回分の成果

県民の幸福感や幸福に関わる様々な意識を把握して県政運営に活用しようというみえ県民意識調査は、3 回目となる今回もこれまでと同様、詳細な集計と解釈がなされました。比較的大きいサンプルのデータを3年間にわたり様々な角度から分析した結果、例えば結婚や子育て、就業、収入などの要因が幸福感に大きく関わるということが明らかになりました。

既存の調査で指摘され、すでに様々な場で論じられていることも多く含まれますが、三重県における事情を定量的に把握したこと、それも精密かつ詳細に把握したことの意義は明らかです。幸福感に16の幸福実感指標や、結婚・子育て・就業などについて具体的に尋ねた結果を組み合わせることで、本レポートにも述べられている通り、様々な仮説や県政運営への示唆が得られています。

更なる活用を

意識調査の意義は実査の後にあり、調査の本番は集計が済んでからとさえ言えます。この分析レポートや過去2回のレポートはそれ自体立派な、他自治体には例のないほどの成果ですが、調査の活用はこれで終わりではなく、このレポートをこれから活用していくことの方が重要であることは明らかです。

このレポートを活用する際は、第6章の総括的なまとめをある種の索引のように使っていただくことが重要です。そこにはこの調査から明らかになったこと、そこから得られる示唆などがかいつまんで整理されていますが、例えば「関連がある」とはどの程度なのか、何をもって関連があると解釈できるのか、レポートの本文の中で定量的に明らかにされています。データ集の集計表まで遡って参照すべき場面もあるでしょう。

また、相関と因果の区別についても留意していただきたいと思います。一般に、2つの量に相関(大小の対応関係)があるからといって、直接の因果関係があるとは限りません。AとBに相関がある場合、A B、B A、あるいは別の要因CがあってC A・Bなど様々な因果関係があり得ます。因果関係があらかじめ明らかな場合を除き、別のデータと組み合わせたり、別途の質問を重ねたりすることで探るほかありません。

第4回以降の調査に向けて

これまでの3回の調査を通じて、安定した傾向や関係が観察されています。これらは三重県民の意識の構造(容易には揺らがない部分)といつてよいでしょう。これらは毎回調査する必要はなく、一定の周期で定点観測すればよいでしょう。一方、調査ごとの様々な変動も観察されています。この変動は実体の変化や差異を反映している場合もあれば、標本誤差やサンプルの偏りによる場合もあり、また隠れた変数が作用している可能性もあります。これらについては引き続き調査するとともに、新しい切り口から探ることが有効な場合もあるでしょう。

これまでの調査結果から得られた様々な仮説を検証できるような設問も、今後の調査に期待される事柄です。とりわけ上で述べたような因果関係を特定するための設問は、行政へのニーズ(果たすべき役割)がどこにどれだけあるかを探る上で重要な場合があるでしょう。

幸福と政策の関係

みえ県民意識調査の最終目的は、ここで得られた結果を県政運営に活用することです。もちろん、すでに様々な点で県政運営に反映されていることと思いますが、「幸福と政策の関係」はまだ必ずしも明らかになっていません。この点は過去2回の研究レポートへの寄稿でも述べたことですが、重ねて強調したいと思います。ただし、これはそれほど容易なことではありません。現在は、その目標に向かって着実に歩むべき段階です。

幸福と政策の関係、最終的には幸福の実感と政策の効果の関係を明らかにするためには、みえ県民意識調査の結果に、各政策分野において設定されている指標、それらに関連する様々な統計指標、政策そのものの実績情報などを照らし合わせ、可能であれば定量的に分析するなどの作業が必要です。ここでは各部署の役割も重要でしょう。またこのためにも、各部署が次回以降の調査における設問の検討にも積極的に関わることを期待します。

みえ県民意識調査分析ワーキング（平成26年度）の開催実績

回	日時	ワーキングの主な内容	備考
第1回	4月23日（水）	・実施する分析とスケジュールの確認	
第2回	5月9日（金）	・分析の進捗状況の確認	
第3回	5月30日（金）	・分析の進捗状況の確認	
第4回	6月11日（水）	・中間とりまとめの検討	小野先生参加
第5回	6月30日（月）	・分析の進捗状況の確認	
第6回	7月4日（金）	・分析レポート案の検討	小野先生参加

上記以外に、小野先生には電話や電子メールでの照会や鳥取大学研究室においてご助言を得たほか、ワーキングメンバーと事務局との間で個別に意見交換を実施しました。

みえ県民意識調査分析ワーキング（平成26年度）の構成

（顧問）

鳥取大学 地域学部 教授 小野 達也

（メンバー）

企画課 主査 榎 寿美江

企画課 主査 大迫 慎太郎

企画課 主事 立花 健太

統計課 主事 丸岡 陽平

戦略企画総務課 班長 佐波 斉

戦略企画総務課 主幹 天野 長志

戦略企画総務課 主査 中井 宏人

事務局

三重県 戦略企画部 戦略企画総務課

〒514-8570 三重県津市広明町13番地

：059-224-2062

E-mail : sensomu@pref.mie.jp

みえ県民意識調査分析レポート（平成26年度）

- 県民の幸福実感向上のために -

平成26年8月 発行

三重県戦略企画部

みえ県民意識調査分析ワーキング

（事務局）三重県 戦略企画部 戦略企画総務課

〒514-8570 三重県津市広明町13番地

TEL：059-224-2062

FAX：059-224-2069

E-mail：sensomu@pref.mie.jp